Japan Foundation for
Regional Art・Activities

令和元年度
公共ホール音楽活性化事業
報　告　書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国12の団体との共催により実施された令和元年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成30年度から令和元年度にかけて秋田県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」及び令和元年度に京都市で実施された「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」についてもとりまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、令和元年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は令和元年度のものです〉

第１部　令和元年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要……2

登録アーティスト／コーディネーター……3

実施団体……4

全体研修会概要……5

第２部　令和元年度公共ホール音楽活性化事業　事例紹介・レポート

〈通常〉

国見町　（福島県）……8

吉見町　（埼玉県）……14

酒々井町　（千葉県）……20

羽村市　（東京都）……25

氷見市　（富山県）……31

御殿場市　（静岡県）……37

田原市　（愛知県）……42

奈良市　（奈良県）……47

奥出雲町　（島根県）……52

〈発展継続〉

帯広市　（北海道）……57

久留米市　（福岡県）……64

佐賀市　（佐賀県）……70

第３部　令和元年度公共ホール音楽活性化事業　コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤　櫻作　（チーフコーディネーター）……80

丹羽　徹　（コーディネーター）……82

花田　和加子　（コーディネーター）……84

山本　若子　（コーディネーター）……86

大澤　寅雄　（アドバイザー）……87

第４部　平成30-令和元年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要……90

派遣アーティストプロフィール……96

レポート

佐藤　亜希子　（事業担当者）……98

児玉　真　（チーフコーディネーター）……100

菊地　俊孝　（コーディネーター）……101

三浦　幸恵　（コーディネーター）……103

酒井　雅代　（アシスタントコーディネーター）……105

山下　直弥　（アシスタントコーディネーター）……108

第５部　令和元年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業
実施概要…… 112
アウトリーチセミナー…… 114
レポート…… 116
高野　裕子　（ホール担当者）…… 117
児玉　真　　（アドバイザー）…… 118

第１部
令和元年度公共ホール音楽活性化事業の概要

令和元年公共ホール音楽活性化事業　実施概要

１　事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校･福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

２　実施内容

（１）実施団体　全国12団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

（２）研修事業　①全体研修会

平成31年４月22日（月）～24日（水）／（一財）地域創造、HAKUJUホール

開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階（公演２、３カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

（３）公演事業　公演事業の実施（全国12地域）　令和元年９月～令和２年２月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①コンサート　　身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②アクティビティ　　ミニコンサートや参加体験型のワークショップ等地域との交流を図るプログラム

３　費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

（１）一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

（演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家）、演奏家派遣に関するマネジメント料）

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を上限として負担

（２）開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

４　主催・共催等

主　　催：開催地の地方公共団体等

共　　催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

令和元年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1　平成30年度・31年度登録アーティスト

岡田　奏	（ピアノ）	株式会社パシフィック・コンサート・マネジメント
酒井　有彩	（ピアノ）	コンサートイマジン
中野　翔太	（ピアノ）	株式会社ジャパン・アーツ
田中　拓也	（サクソフォン）	株式会社アスペン
糸賀　修平	（声楽（テノール））	株式会社二期会21
山本　奈央	（オカリナ）	株式会社ミリオンコンサート協会
泉　真由×松田　弦（フルート、クラシックギター）		株式会社ミリオンコンサート協会
アーバンサクソフォンカルテット（サクソフォン四重奏）		株式会社プレルーディオ

2　コーディネーター

小澤　櫻作　（上田市交流文化芸術センター プロデューサー）
丹羽　徹　（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事　事務局長）
花田　和加子　（keynote代表、ヴァイオリニスト）
山本　若子　（有限会社N.A.T取締役）

3　サブコーディネーター

菊地　俊孝　（公益財団法人東松山文化まちづくり公社副局長、東松山市民文化センター副館長兼プロデューサー）
三浦　幸恵　（HAKUJUホール　事業担当）
桜井　しおり　（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

4　アドバイザー

大澤　寅雄　（株式会社ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室）

5　研修スタッフ

植田　理沙　（iichiko総合文化センター　企画普及課）
髙井　晴美　（公益財団法人ひろしま文化振興財団）
福原　理子　（公益財団法人北九州市芸術文化振興財団）

6　実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	アーティスト	コーディネーター
1	福 島 県	国見町 （くにみまち）	国見町	国見町観月台文化センター	2019年 12月13日（金）～ 12月15日（日）	アーバンサクソフォンカルテット	花田和加子 桜井しおり
2	埼 玉 県	吉見町 （よしみまち）	吉見町	吉見町民会館 （フレサよしみ）	2019年 12月19日（木）～ 12月21日（土）	岡田奏 田中拓也	小澤櫻作 植田理沙
3	千 葉 県	酒々井町 （しすいまち）	酒々井町	プリミエール酒々井	2020年 1月23日（木）～ 1月25日（土）	泉真由×松田弦	花田和加子 福原理子
4	東 京 都	羽村市 （はむらし）	羽村市	羽村市生涯学習センターゆとろぎ	2020年 2月6日（木）～ 2月8日（土）	田中拓也 中野翔太	小澤櫻作 高井晴美
5	富 山 県	氷見市 （ひみし）	氷見市教育委員会	氷見市いきいき元気館	2019年 9月26日（木）～ 9月28日（土）	アーバンサクソフォンカルテット	山本若子 福原理子
6	静 岡 県	御殿場市 （ごてんばし）	御殿場総合サービス株式会社	御殿場市民会館	2020年 1月20日（月）～ 1月22日（水）	中野翔太 田中拓也	丹羽徹 菊地俊孝
7	愛 知 県	田原市 （たはらし）	田原市	田原文化会館	2019年 10月17日（木）～ 10月19日（土）	アーバンサクソフォンカルテット	小澤櫻作 桜井しおり
8	奈 良 県	奈良市 （ならし）	一般財団法人奈良市総合財団	なら100年会館	2019年 11月7日（木）～ 11月9日（土）	酒井有彩	山本若子 桜井しおり
9	島 根 県	奥出雲町 （おくいずもちょう）	奥出雲町文化協会	横田コミュニティセンター	2019年 10月3日（木）～ 10月5日（土）	糸賀修平	丹羽徹
10	北 海 道	【発展継続】 帯広市 （おびひろし）	一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団	帯広市民文化ホール	2019年 10月30日（水）～ 11月3日（日・祝）	中野翔太 田中拓也	丹羽徹
11	福 岡 県	【発展継続】 久留米市 （くるめし）	インガットホール活用実行委員会	久留米市城島総合文化センター	2020年 2月4日（火）～ 2月8日（土）	酒井有彩	山本若子
12	佐 賀 県	【発展継続】 佐賀市 （さがし）	公益財団法人佐賀市文化振興財団	佐賀市立東与賀文化ホール	2019年 9月17日（火）～ 9月21日（土）	岡田奏	花田和加子

令和元年度公共ホール音楽活性化事業　全体研修会実施概要

１　概要

令和元年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。２日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討及び発表を行った。

２　参加者

令和元年度事業実施団体　担当者

３　日　程

平成31年４月22日（月）～24日（水）（３日間）

４　会　場

４月22日（月）・24日（水）：一般財団法人地域創造　会議室
４月23日（火）　　：HAKUJUホール

５　実施団体研修スケジュール

４月22日（月）

時　間	会場：地域創造　会議室
13：00～13：10	オリエンテーション
13：10～14：40 (90分)	ワークショップ セレノグラフィカ　隅地茉歩　阿比留修一（ダン活支援登録アーティスト）
休憩（20分）	
15：00～15：30 (30分)	おんかつを知る　Vol.1～基礎編～ 小澤　櫻作
15：30～16：00 (30分)	おんかつを知る　Vol.2～実務編～ 地域創造
休憩（10分）	
16：10～18：50 (160分)	おんかつを知る Vol.3～事例紹介編～ Ⅰ：関市の事例（45分） 長尾　哲男（関市）、丹羽　徹 Ⅱ：演奏家の事例（60分） 塚越　慎子（支援登録アーティスト）、花田　和加子、山本　若子 ＜休憩（10分）＞ Ⅲ：事業担当者の役割とは（45分） 三浦　幸恵

４月23日（火）

時　間	会場：HAKUJUホール（渋谷区富ヶ谷）
10：00 ～ 11：30 （90分）	おんかつから始まるホールと地域の未来 大澤　寅雄（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12：30 ～ 14：00 （90分）	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
14：00 ～ 14：10 （10分）	プレゼンテーションの聴き方 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
休憩・移動（20分）	
14：30 ～ 18：30	平成30・31年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 山本　奈央　（オカリナ） 中野　翔太　（ピアノ） 泉　真由×松田　弦　（フルート、クラシックギター） ＜休憩（20分）＞ アーバンサクソフォンカルテット　（サクソフォン四重奏） 糸賀　修平　（テノール） 岡田　奏　　（ピアノ） ＜休憩（20分）＞ 田中　拓也　（サクソフォン） 酒井　有彩　（ピアノ）
休憩・移動（30分）	
19：00 ～ 21：00	交流会 参加者、H30・31登録アーティスト、コーディネーター

４月24日（水）

時　間	会場：地域創造　会議室
10：00 ～ 12：00 （120分）	フィードバックとグループ別企画検討 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
昼食休憩（60分）	
13：00 ～ 15：00 （120分）	企画発表 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
15：00 ～ 15：10 （10分）	事務連絡、閉講式

第２部
令和元年度公共ホール音楽活性化事業事例紹介･レポート

実施団体：福島県国見町
実施時期：令和元年12月13日（金）～令和元年12月15日（日）
出演アーティスト：アーバンサクソフォンカルテット

アクティビティ

タイトル：国見町観月台文化センター開館25周年記念　観月台クラシックス～サクソフォン四重奏で聴くクラシック名曲いいとこどり！～
期　　日：令和元年12月13日（金）　10：30 ～ 11：30
会　　場：特別養護老人ホーム国見の里　地域交流スペース
参 加 者：施設入所者70名

特別養護老人ホーム国見の里の入所者を対象に実施しました。平均年齢が80代で車いすの方が大半でしたが、サクソフォン四重奏の音色に聴き入ったり、「日本の四季メドレー」では口ずさんだり、メドレー中「まつり」の演奏では手拍子したりする方が見受けられ、また最後の曲の「川の流れのように」では合唱するなど大変充実した内容でした。

タイトル：国見町観月台文化センター開館25周年記念　観月台クラシックス～サクソフォン四重奏で聴くクラシック名曲いいとこどり！～
期　　日：令和元年12月13日（金）　14：30 ～ 15：30
会　　場：国見子どもクラブ　遊戯室
参 加 者：学童１年生23名

放課後学童の小学生１年生を対象に実施しました。元気な子が多く、じっとしていられないとのことでしたが、サクソフォンが奏でられた瞬間､おとなしく聴き入ることができていました｡サクソフォンを分解して音の出る仕組みのお話や、楽器に触れる時間、一緒に身体を動かす時間を設けていただいたことから、飽きる子は少なかったようです。終始、子どもたちは初めてのサクソフォンとその音色・音の迫力に興味津々で、笑顔で目を輝かせていました。

タイトル：国見町観月台文化センター開館25周年記念　観月台クラシックス～サクソフォン四重奏で聴くクラシック名曲いいとこどり！～
期　　日：令和元年12月14日（土）　10：30 ～ 11：30
会　　場：幼稚園預かり保育　年小室
参 加 者：預かり保育幼稚園児童22名

幼稚園預かり保育の児童を対象に実施しました。こちらも元気な子が多く、じっとしていられないとのことでしたが、やはりサクソフォンが奏でられた瞬間、おとなしく聴き入ることができていました。サクソフォンの音の出る仕組みのお話や、楽器に触れる時間、身体を動かす時間では元気いっぱいの子どもたちでした。間近で聴くサクソフォン四重奏曲では耳を抑えてもその場から離れることなく、音色や音の迫力を体感していました。

タイトル：国見町観月台文化センター開館25周年記念　観月台クラシックス～サクソフォン四重奏で聴くクラシック名曲いいとこどり！～
期　　日：令和元年12月14日（金）　14：00～15：00
会　　場：県北中学校　音楽室
参 加 者：吹奏楽部生徒14名

中学校部活動吹奏楽部員を対象に実施しました。部員は１・２年生ということもあり、シャイで純粋な子が多いとのことで、静かに聴き入る生徒が大半でしたが、サクソンフォンの歴史や、息の使い方、アンサンブルの楽しさ、その喜びなどをプロのアーティストから直接聞くことができ、またチャルダッシュの演奏での指の動きなど熱心に見聴きしていました。

コンサート

タイトル：国見町観月台文化センター開館25周年記念　観月台クラシックス～サクソフォン四重奏で聴くクラシック名曲いいとこどり！～
期　　日：令和元年12月15日（日）　14：00～15：30
会　　場：国見町観月台文化センター　ホール
参 加 者：204名

前半はクラシック名曲いいとこどりと題したことから有名曲を中心に曲の解説から、サクソフォンの種類や音の出る仕組みの解説など、クラシックが初めてのお客様でも大変楽しめる内容でした。休憩を挟み、第２部では客席からの登場という驚きな演出と、そこから始まるサクソフォン四重奏による調和は、アンコールが終わるまで、ホール全体を幸せを共感する空間としてくれました。

当日はロビーにアクティビティ先でのアーティストと子どもたちの様子をパネル展示し、お客様がアーティストへ親近感を持てるよう取り組みました。前売りチケット伸び悩みましたが、近隣公文協施設の特段の広報のご協力により、当日入場が想定を上回り、パンフレットが不足してしまうハプニングがありました。

また、アーバンサクソフォンカルテットのみなさんのご理解により、国見の子供達に入場チケットもぎりや影アナウンスなどを体験させていただきました。

ホール担当者の意見・評価
国見町教育委員会生涯学習課　佐藤　孝法

①　応募の動機・事業のねらい

町民の特に国見町の子どもたちにクラシック音楽へ興味関心を持っていただきたい。
また、普段ホールでクラシック音楽に触れる機会が少ない町民の皆様へクラシック音楽をお届けしたい。
併せて国見町に来る人たちへも触れる機会を提供し、交流人口を拡大したい。

②　企画のポイント

誰もが一度はどこかで耳にしたことがあるクラシック名曲を中心に。サクソフォン四重奏による調和と共生を体感し、演奏者と鑑賞者が幸せを共感できる内容としたい。

アクティビティ先は特別養護老人ホーム、小学校放課後児童クラブ、幼稚園預かり保育、中学校部活動吹奏楽部としたい。

ねらいは普段ホールで音楽に触れる機会の少ない施設入所者に上質な音楽を鑑賞する機会を提供したいこと、また当町の子どもたちに生の音楽を聴く機会を提供することで、当館における未来の鑑賞者や演奏者を育成したい。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

これまでの自主事業のクラシック公演同様に集客が問題となりました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

関係機関やアクティビティ先、町内の小・中学校全教師へ招待を行いました。

また、近隣公文協施設の特段の広報協力をいただいたことでプレイガイドや当日チケット販売が想定以上となりました。

⑤　事業を実施しての成果

特別養護老人ホーム国見の里ではアーバンサクソフォンカルテットの演奏に合わせて自然と手拍子や口ずさむ入所者が、小学校放課後児童クラブと幼稚園預かり保育では、初めてのサクソフォンとその音色や音の迫力に目を輝かせ笑顔・興味津々な様子が、中学校吹奏楽部では、サクソフォン四重奏を熱心に聴き入る姿が見受けられたことは事業のねらい、企画のとおり実施することができたと言えます。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

現地入りしてから、事業実施までを担当コーディネーター、同アシスタント、事務局、そしてアーティストの皆様へ丸投げしてしまい、アーティストへ会館のねらいをもっと伝えるべきだったのではないかと猛省いたしました。

音かつ事業の継続、個人的にはアクティビティで完結することも是としたいところですが、やはりアクティビティとコンサートの串刺し、いかにホールへ足を運んでいただき、ホールの音響でクラシックを観賞していただき、会館使命である「町民が幸せを感じられる空間、幸せを共感できる文化拠点」になれるかが課題です。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

クラシックコンサートは人が入らない。どんなに有名で鳥肌が立つ演奏をされるクラシックアーティストを招聘しても、そう感じながらクラシックの公演に携わってきました。しかし、音かつは違いまし

た。もちろん満員御礼にはなりませんでしたが、私が経験させていただいたクラシックコンサートで一番の集客でした。そしてアクティビティ。初めてプロが奏でる音色に身近に触れた子どもたちのあの目の輝き、そして笑顔にさせる機会を提供することは、当町で当館にしかできないことであると改めて感じました。

アシスタントレポート
桜井しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

「国見町」は、福島県の中央北部に位置し、北は宮城県白石市、東は伊達市、南は桑折町に接し、JR福島駅から車で約40分弱のところに位置する、自然豊かな町である。道の駅国見あつかしの郷では、豊かな農産物のほか、オリジナルブランド商品も多数販売しており、地域の方の集いの場となっていた。同時に、国見町には「義経の腰掛松」や「弁慶の硯石」など源義経にまつわる伝説が残っており、町をあげての年に１度の義経まつりは2020年で24回目を迎える。担当者の佐藤さんは、幼少期から現在までを国見町で過ごしている方で、町や町民のことを非常に愛しており、「町のため」、「町民のため」が常に軸にある方だったのが印象的だった。もともとクラシック音楽にそこまでご興味がなかったという佐藤さんは、主催事業で担当したピアニストの方の演奏に強い感動を覚え、そこからクラシック音楽の虜になったと仰っていた。クラシック音楽の奥深さをぜひたくさんの町民の方に味わってほしい！という、佐藤さんの熱い想いが、我々スタッフを奮起させた。

実施された国見町観月台文化センターは500人収容の中ホールの他、公民館、図書室、歴史資料室、会議室、茶室を備えた複合的な施設となっている。クラシック音楽に興味のない方も足を運びやすい施設の為、幅広い年齢層の方にお越しいただけるようなコンサートにしたいという願いがあった。今回は特別養護老人ホーム、小学校放課後児童クラブ、幼稚園預かり保育、中学校吹奏楽部を対象にアクティビティが行われ、コンサートは小中学生は無料で入場できるようにした。アーティストはアーバンサクソフォンカルテット（以下アーバンと記載する）を指名された。アーバンにとって、２年の登録期間の最後の音楽活性化事業（以下おんかつと記載する）だったので、集大成となるようなおんかつにしよう！と全員のエンジンが最初からフル活動であった。

【アクティビティ】

※諸事情により、初日のアクティビティ（特別養護老人ホーム国見の里と国見子どもクラブ）は同行出来ず、国見町立くにみ幼稚園（預り保育児のみ）と国見町立県北中学校の吹奏楽部生への実施報告とさせて頂く。

くにみ幼稚園では、先生方からサックスという楽器を初めて見る、聴くであろう子供たちにサックスを知るだけではなく、楽しんでもらえるようなプログラムをとリクエストがあった為、サックスを吹く真似をしてみようコーナーやクイズを入れるなど、子供たちが飽きない工夫が施されていた。県北中学校の吹奏楽部生には、アンサンブルの楽しさ、難しさ、面白さを伝えるプログラムを作成していた。先生から、三年生が引退していたのもあり、活気がないということを心配されていたが、終わったころには楽器を片付けていた奏者に自ら話しかけに行ったりと意欲的な姿も見られた。

おんかつのアクティビティは、少ない人数に近い距離で実施される為、観客の表情やリアクションがダイレクトに奏者に伝わる。そしてそのリアクションを瞬時に拾い、何らかの形でレスポンスしなければならない。求められているスキルが非常に高く、生身の人間的な部分が露呈する瞬間でもある。アーバンの４人はそれぞれがもつキャラクター性を生かしつつ、お互いを補い合いながら進行していた姿が印象的であった。

【コンサート】

佐藤さんは下見で伺った際から対象者をどのターゲット層にするか深く悩まれており、我々スタッフと何時間も話しあった。というのも上記の通り、出来るだけ多くの町民の方々に音楽をお届けしたいとお考えであった為、可能であれば普段なかなかコンサートに足を運ぶことが難しい年齢層の方にもいらしてほしいという願いがあったのだ。担当コーディネーターの花田さんは、過去のおんかつの事例をも

とに、佐藤さんが一番届けたいターゲット層を明確にすることと、この事業での佐藤さんのゴールを再確認する作業を丁寧に行っていた。

その意思が奏者のプログラムにも生かされており、日本の四季メドレーからサックスオリジナルの曲、洋楽など幅広い曲をプログラミングしていたので、お客さま全員が楽しめる内容であったと思う。また、アクティビティで訪れた対象者の方々も多数いらして下さった。

【まとめ】

国見町のおんかつを一言で表すのであれば、“国見町への愛の強さ”。佐藤さんをはじめとするスタッフの皆様の国見町への強い愛が、アーティストや我々スタッフを一致団結させ、初志貫徹でおんかつを走り切ったという印象であった。また、コンサート当日は教育長自らがチケットもぎりをご担当くださり、このコンサートを盛り上げようとして下さった。もちろん佐藤さんの人脈あっての成功だったということも間違いない。当初、「クラシックはなかなか集客が難しい…」と仰っていたが、沢山の町民の方がコンサートを楽しんでいらっしゃる姿が見られたのは、大きい収穫だったと思う。すでに自主事業で実施されている本格的なクラシックの公演から、今回のような気軽に楽しめるコンサートまで、幅広い方々が足を運んでくださるような企画がさらに充実される事を期待したい。

実施団体：吉見町民会館（フレサよしみ）
実施時期：令和元年12月19日（木）～令和元年12月21日（土）
出演アーティスト：岡田　奏（ピアノ）田中　拓也（サクソフォン）

アクティビティ

タイトル：体験型ミニコンサート～想像の世界～
期　　日：令和元年12月19日（木）　11：35 ～ 12：20
会　　場：吉見町立北小学校　音楽室
参 加 者：４、５、６年生　49名

小学校の中高学年を対象に、ミニコンサート、給食交流会を実施しました。

アーティストの入場後、すぐに演奏が始まり、児童たちは緊張した面持ちで静かに聴き入っていました。その後お二人の優しい口調で、児童に問いかけながら楽器の名前の由来や仕組みについて説明がありました。さらに、５枚の絵を掲示しながら演奏を聴き、どの情景を想像したか､なぜ？どうして？の発表に会場は賑わいました。不安そうに答える児童たちに「これに正解はない」という言葉で、音楽は自由な想像、発想で楽しめることに気づいた様子でした。

タイトル：体験型ミニコンサート～想像の世界～
期　　日：令和元年12月19日（木）　14：35 ～ 15：25
会　　場：吉見町立吉見中学校　音楽室
参 加 者：３年生　34名

中学校３年生の１クラスを対象に、ミニコンサートを実施しました。

小学校のプログラムから中学校に合わせた曲目に変更し、ワンランク上のアウトリーチになりました。また、人生の転機を迎える15歳という年齢から、アーティストの経験談が盛り込まれ、生徒たちは真剣な表情で話に耳を傾けており、心に響くアウトリーチになりました。

タイトル：体験型ミニコンサート～想像の世界～
期　　日：令和元年12月20日（金）　11：35 ～ 12：20
会　　場：吉見町立東第一小学校　音楽室
参 加 者：６年生　35名

小学校の６年生を対象に、ミニコンサートを実施しました。
１回目のアウトリーチと同内容のプログラムではありましたが、対象が６年生のみということもあり、少し緊張感のある内容となりました。

１日目同様、プログラム終了後に給食交流会を実施しました。児童たちは、音楽室とは違った一面を見せプロのアーティストと楽しく交流しました。

タイトル：体験型ミニコンサート～想像の世界～
期　　日：令和元年12月20日（金）　13：50 ～ 14：35
会　　場：吉見町立東第二小学校　音楽室
参 加 者：４、５、６年生　25名

小学校の中高学年を対象に、ミニコンサートを実施しました。

楽器の名前の由来や仕組みについての説明など同内容のプログラムを実施しました。

児童数の少ない学校でのプログラムでしたが、アーティストや楽器をより近くに感じることができました。音楽に「正解はない」という言葉を軸に、自由な想像、発想で、プログラムが進められました。最後は、アーティストからクリスマスプレゼントで「ホワイトクリスマス」が演奏されました。

コンサート

タイトル：Fresa15thXmas
　　岡田奏×田中拓也JOINT　CONCERT
期　　日：令和元年12月21日（土）　15：00 ～ 16：30
会　　場：吉見町民会館（フレサよしみ）　大ホール
参 加 者：213名

おんかつ期間中に開催している、イルミネーションフェスタの点灯時間に合わせ、２部構成90分のクリスマスコンサートとしてプログラムを実施しました。

１部は、アンダーソン「そりすべり」から始まり、楽しいクリスマスの雰囲気で開演、最後はピアソラ「ル・グラン・タンゴ」で来場者を引き付けました。

２部は、アーヴィング・バーリン「ホワイトクリスマス」、フランク「ヴァイオリン・ソナタ」サックス編曲や、ピアノ、サックスのソロを交えた構成で全９曲のプログラムとなりました。

また、会場には、訪問した学校の児童生徒の姿もあり、曲間でアクティビティの様子や町の印象などのトークで、クラシックを身近に感じることができるコンサートになりました。

ホール担当者の意見・評価
吉見町教育委員会生涯学習課　木田　諭史

①　応募の動機・事業のねらい

吉見町民会館は、開館から15年が経ち、これまで多くのアーティストを迎えて公演を開催してきました。

町民の文化の向上と福祉の増進及びコミュニティの醸成をホールの設置目的として、今後会館が果たすべき役割を検証し、次世代に継承するため、本事業に応募しました。

②　企画のポイント

アクティビティでは、次世代を担う子供たちに音楽（芸術）の素晴らしさ、楽しさを伝え、プロの音を間近で体験し、刺激を受けてもらうことを軸としました。また、クラシックを身近に感じてもらうため、比較的見慣れているピアノとサックスの共演で気軽に体験し、自由な発想を引き出せるよう企画しました。

ホールコンサートでは、おんかつ期間中に開催しているイルミネーションフェスタにあわせ、コンサート終了後も館内外で楽しんでいただけるクリスマスコンサートとして企画しました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

公共ホールとしては、おんかつのねらいとは逆に、公平に全校、全児童生徒に向けてアクティビティを実施したいと考えていたため、アクティビティ先の選定に苦慮しました。

また、事業を誰が主動的に進めるのか線引きが曖昧で、調整、準備に時間を要した期間がありました。

最後に、ホールコンサートのチケット販売数が思うように伸びず集客に苦しみました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

おんかつ事業の趣旨、目的について、研修資料の再確認やコーディネーター、アシスタント、地域創造事務局の皆さまと連絡を密に取り相談をすることで、ホール職員の理解を深めました。

アクティビティ先の選定については、職員が事業を理解したうえで全校責任者に対し説明することで、理解を得ました。

チケットの売り上げについては、コーディネーターに相談し、PR方法を検討しました。また、おんかつの性質を理解し、売れ行きの変化に注目し進めました。

⑤　事業を実施しての成果

おんかつ期間中アーティスト含め参加者の皆さんが笑顔で終えることができれば成功だと考えました。まず、私たちは、アーティストに気持ちよく事業に取り組んでもらうための雰囲気づくりに心がけました。

アクティビティでは、児童生徒の真剣な眼差しと笑顔で会場が賑わい、子供たちの自由な発想を引き出すことができました。

ホールコンサートでは、アクティビティ先の児童生徒や、保護者の方にも足を運んでいただいたほか、本格的なクラシックを楽しみに来場されたお客様で会場が大いに賑わいました。

ホールの外では、エントランスにアクティビティの様子を掲示し、おんかつへの理解に努めました。また、館内外で開催している、イルミネーションフェスタで冬の幻想的なクリスマスを楽しんでいただきました。

私たちは、おんかつで出会った方々の笑顔で、事業の成功を確信しました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

本事業に限らず、集客が課題となっています。おんかつ事業においては、単年での数字の成果は難しいと思います。事業の目的を十分に理解し、今後も地域に親しまれるホールとなるよう、公共ホールに求められる社会的役割とは何かを意識しながら運営すると同時に、新たなPR方法、媒体を検証する必要があると思います。

また、おんかつ事業を進めるにあたって会館職員のクラッシック音楽に関する知識が浅く、アーティスト、コーディネーターに頼る部分が多くなってしまいました。知識を深め、より充実したコンサートを計画してまいります。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今まで、ホール内での事業を展開してきましたが、アウトリーチの実績は少なく、ニーズがあるか不安要素がありました。

しかし、児童生徒も真剣に参加していただき、また学校も事業を十分理解し興味をもって積極的に協力をしていただきました。

今回のプログラムでは、一部の児童生徒を対象にアクティビティを実施しましたが、参加者の中には演奏会等でホールに来場したことのない子供が多くいたように感じました。

より多くの方に興味を持っていただき来場者が増えるよう、今後もアウトリーチ事業を継続し、ホールに来場される一部の方だけでなく、ホールに来たことのない多くの方に向けて文化芸術を届け、地域とホールの繋がりを創ることで両者の活性化が図れるのではないかと感じました。

アシスタントレポート
植田　理沙（iichiko総合文化センター　企画普及課）

埼玉県吉見町は、埼玉県のほぼ中央に位置している人口約２万人の町。特産品として吉見いちごがあり、また日本一の川幅を誇る荒川がある。この荒川と市野川に囲まれているため、台風19号の被害を受けた地域が多くあり、９か所の避難所が開設され多くの町民が避難し、また会館も雨漏りなど台風の影響を受けた。

会館の名称である『フレサ』（スペイン語で「FRESA」）とは、吉見町の特産品である「いちご」を意味する言葉。『フレサよしみ』とは、「イチゴ」と「いつまでも新鮮（フレッシュ）」との意味を込めて名付けられたホールで、会議室や吉見町を一望できるスカイホールがある施設。開館15周年の核となる事業として応募。

４月の研修会では、「芸術文化の振興による、コミュニティの形成や、音楽や芸術から遠くなっている子ども達に対して表現することの楽しさを伝えたい」と担当の木田さんはおっしゃっていた。

〈アクティビティ〉対象：町内小学校６校ある中から３校の４～６年生、町内唯一の中学校の３年生

ルロイ・アンダーソンの「そりすべり」から始まった。本来はムチで演奏する音を、お二人がそれぞれの手法で代奏するという、仕掛けを用意。リハーサル時はお互いに成功するか不安を抱えながらも、本番では見事成功させ、１曲目から対象者の興味をひきつけた。

楽器紹介では､田中さんお手製の紙リードを使用して音の出る仕組みをわかりやすく説明｡この紙リードでの説明は紙リードの調整が難しいようで本番で上手くいかなかった時には、「頑張って～って言ってくれる？」という田中さんの言葉で、たくさんの声援が飛んだ。このことで、田中さんのお人柄が参加者に伝わり、緊張していた心がほぐれたようだった。

お二人の共演曲では、５枚の絵を用意し演奏を聴いてどの絵が自分のイメージに合ったかを参加者から意見を出してもらった。「今の皆の気持ちが正解で、間違いはない」「皆感じ方が違うことは素晴らしい」「音楽はそれぞれが自由に楽しんで良い」ということ、音楽からイメージする楽しさを伝えた。

また中学校でのアクティビティの際には、お二人それぞれのソロ曲を演奏する前に中学校３年生時代のお話があった。田中さんは、このタイミングでこれからサクソフォンの道に進むことを決めたこと。岡田さんは、フランスの高校を受験し、その後11年間留学。言葉もわからなくて、授業も大変だったこと、友達の作り方に悩んだこと。留学をして、音楽以外にも培ったことが多く、この全ての経験が今役に立っていて、この時に頑張って良かったと思っていること。お二人とも『皆にも好きなこと・やりたいことがあれば諦めないで､頑張って。真っ直ぐその道を進んで欲しい』とまさにこれから受験を迎え、高校生になる参加者には、お話と音楽が心に届き、それぞれに感じている様子だった。

〈コンサート〉

フレサよしみでは、毎年町民ボランティアさんの協力により館内外ともにイルミネーションの装飾が施してある。「フレサよしみ」と検索すると「フレサよしみ　イルミネーション」という言葉が２番目に入る程有名で、台風19号のため自粛モードの装飾だったそうだが、そうは見えないほど豪華な装飾で、アーティスト達も大変感動していた。終演後には、ご来場いただいたお客様にライトアップしたイルミネーションを楽しんでいただきたいというホールの方の想いから、終演時間を夕方に設定した公演であった。そのためコンサート名も『Fresa15th Xmas 岡田奏×田中拓也 JOINT CONCERT』とし、クリスマスの曲も含めた公演内容であった。

台風19号の影響もあり、チケットの売行きも心配され事前に相談もされていたが、コーディネーターからのアドバイス通り、アーティストが現地に入り、町民の方と出会っていくほどチケットの販促に繋がっていき、当日はアクティビティ参加者や関係者が来場してくださり、予定よりも多くの方にお集まりいただいた。前方の席が埋まっていたことも印象的であった。

当日の館内には、アクティビティ４ヶ所の様子をまとめた活動記録と写真を展示してあり、この２日間の活動報告を行った。

演奏時には各曲のイメージに合わせた照明で、アーティストのイメージに合うように綿密な打合せを行い、舞台スタッフさんも大変協力してくださった。このホールは地舞台を黒で塗装してあるので、照明からイルミネーションを連想させた。

今回が初共演であった２人であったが、アクティビティの回数を重ねるごとに息があっていき、本番は、コラボ演奏ではなくデュオ演奏として音楽を心から楽しんでいること、この町が大好きでこの時間が終わって欲しくない、そんな気持ちを一つ一つの音で伝えようとしてくださっているのが伝わる演奏であった。

〈アーティストとホール〉

下見を含めると吉見町にて６日間、アーティストのお二人と４日間一緒に過ごした。

フレサよしみのホールの方々は本当に明るいお人柄で、町の皆さんから好意を持たれていることがすごく伝わってきた。町内どこに行っても、いろいろなところで声をかけられたり、声をかけたりと知らない人がいないような印象を持った。またアクティビティの４日間、各会場への移動、急なお願いにも、疲れた顔をせず、迅速に対応してくださった。さらにこちらに気を遣わせない配慮があり、素晴らしいと感じた。事業に対しても、「どうしたら継続できるか」ということを常に考えいらっしゃって、見習うべきだと思った。

吉見町では町民ボランティアの活躍が欠かせなく、イルミネーション・公演運営もそうだがホールの冬カフェ運営もボランティアさんの活躍によるものであった。公演が無い時にでもイルミネーションを見に来てくださる方のために毎日冬カフェを開放しており、忙しい時には職員の方も手伝っているそう。なかなかできることではないと思った。ホール周辺は街灯も多くはないので、町内にこれだけ明るい場所があり人が集まる場所があることは、町にとっても良い事業で、羨ましいと思った。

またアーティストのお二人もアクティビティ各会場での対象者や公演時間の違いにも臨機応変な対応力であった。岡田さんはキラキラした笑顔のトークと配慮のある言葉選びに心遣い。田中さんの心地良い声と、穏やかでユニークな語り。演奏に圧倒されている参加者は２人のギャップに心惹かれただろう。

担当の木田さんが人見知りとおっしゃっていたが、そんなことは全く感じることはなく、アーティストのお二人も身構えず４日間過ごすことができた。両者をこのような雰囲気にさせたコーディネーターの力が大きいと感じた。アーティストと担当者が肩肘はらず自然体でいることができたおかげで、アクティビティやコンサートでのトーク部分も和やかな雰囲気で、さらにはデュオとしても磨きがかかった聴きごたえのある演奏につながった。

〈最後に〉

この期間に「人」という存在を強く感じた。

担当の木田さんの周りには常に人が集まっていた。笑顔溢れる職員の方がいて、その職員の方々がいるホールには、大勢の町民ボランティアの方々が集まり、イルミネーションや冬カフェを運営してくださっている。

どんな公演もいろんな方々が関わっているが、こんなに町民の方が多く集まり、関わっていることに新鮮さを感じた。「人」と「人」の数多くの繋がりが相乗効果となり、『自分を表現する楽しさ』だったり、『好きなことを見つけたら諦めずに進んで欲しい』という担当の木田さんとアーティスト達から吉見町に住む子ども達へのメッセージがたくさん詰まった「おんかつ」だった。

実施団体：千葉県印旛郡酒々井町
実施時期：令和２年１月23日（木）～令和２年１月25日（土）
出演アーティスト：泉　真由×松田　弦（フルートとクラシックギター）

アクティビティ

タイトル：ふれあいミニミニコンサート
期　　日：令和２年１月23日（木）　11：30～12：15
会　　場：大室台小学校　視聴覚室
参 加 者：３年生　25名

大室台小学校３年１組の児童を対象にミニコンサートを行った。曲の聴きどころや楽器の紹介等を交えつつ、多様な曲を演奏していただいた。「アヴェ・マリア」では泉さんがフルートを吹きながら児童の間を練り歩き、児童は泉さんを目で追いながらフルートの音色に聴き入っていた。児童とコミュニケーションを取りながらの進行で、とてもアットホームな雰囲気のコンサートとなった。

タイトル：ふれあいミニミニコンサート
期　　日：令和２年１月23日（木）　13：45～14：30
会　　場：大室台小学校　視聴覚室
参 加 者：３年生　25名

大室台小学校３年２組の児童を対象にミニコンサートを行った。内容は３年１組でのアクティビティと同様で、クラシック音楽から現代曲まで幅広く演奏していただいた。ギターソロ「フォーコ」の演奏では大きな歓声が上がるなど、とても楽しんでいる様子であった。「海へ」の演奏後には曲を聴いてイメージした海の様子を児童に尋ね、想像を膨らませながら聴くという音楽の楽しみ方をご紹介いただいた。

タイトル：ふれあいミニミニコンサート
期　　日：令和２年１月24日（金）　９：25～10：10
会　　場：酒々井小学校　多目的ホール
参 加 者：３年生　30名

酒々井小学校３年３組の児童を対象にミニコンサートを行った。内容は前日と基本的に同様だが、会場の多目的ホールにオペラ「魔笛」についての掲示がされていたため、急遽「魔笛」の曲をピッコロを用いて演奏してくださった。ピッコロ、フルート、アルトフルートの３種類の音色を聴き比べることができる貴重な機会となった。

タイトル：ふれあいミニミニコンサート
期　　日：令和２年１月24日（金）　11：25～12：10
会　　場：酒々井小学校　多目的ホール
参 加 者：３年生　31名

酒々井小学校３年１組の児童を対象にミニコンサートを行った。内容は３年３組のアクティビティと同様で、ピッコロの演奏を含めたプログラムを行った。音楽の先生から教科書に載っている「アルルの女」を演奏してほしいとのリクエストを受けており、授業でも事前にしっかり触れていただいていたため、授業での学びがより深まり、生演奏ならではの音色を感じられたようだった。

タイトル：ふれあいミニミニコンサート
期　　日：令和２年１月24日（金）　13：40 ～ 14：25
会　　場：酒々井小学校　多目的ホール
参 加 者：３年生　29名

酒々井小学校３年２組の児童を対象にミニコンサートを行った。内容は午前中と同様にピッコロの演奏を含めたプログラムを行った。どの回でも「海へ」の演奏の際は演奏を聴いて想像した情景を児童に尋ねていたが、毎回多種多様な回答が飛び出し、とても興味深かった。意見が出づらい時もあったが、別の回で出た秀逸な回答を紹介したり、泉さん松田さんの優しい声かけによって和やかな雰囲気となり、微笑ましく感じた。

コンサート

タイトル：しすいふれあいコンサート
　　～広げようおとのわ　ふるさとのわ～
期　　日：令和２年１月25日（土）　14：00 ～ 15：30
会　　場：プリミエール酒々井　文化ホール
参 加 者：177名

酒々井町ならではの企画として、「しすいみんわ絵本」の絵を投影しての演奏と、事前に募集した「酒々井町のココがすき！」というアンケートの結果を紹介しながらの演奏の２つを含めてのプログラムを実施した。あたたかい音色と泉さん松田さんの和やかなトークによってアットホームなコンサートとなり、好評をいただいた。集客に苦労した中、アクティビティに参加した児童がお金を握りしめてチケットを買いに来場し、最前列で聴いてくれたことが印象的であった。

ホール担当者の意見・評価所属
プリミエール酒々井　三石　希美

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールでは自主事業をほとんど行っていない状況であったが、町の将来を担う子どもたちの音楽への興味を広げ、音楽に親しんでもらいたいという想いから、応募を行った。また、今年度は町制施行130周年の記念の年でもあるため、音楽を通して郷土愛を深めてもらいたいというねらいもあり、事業を実施した。

②　企画のポイント

酒々井町独自のプログラムとして、町名の由来となった伝説が描かれた民話絵本とのコラボレーションをお願いした。また、チラシを利用して「酒々井町のココがすき！」というアンケートを実施し、コンサート当日に演奏とともに映像にて回答を紹介するという参加型の企画を実施した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

郷土愛育成を目的とし上記のプログラムを企画したが、あくまで音楽との融合により相乗効果をねらうものであるため、投影する映像が主になり過ぎず、コラボレーションの良さを体感していただけるような形で仕上げることが難しかった。

また、演奏者について、なぜ地元出身者を呼ばないのかとの声もあり、集客に苦労した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターをはじめスタッフの皆様に相談し、アドバイスをいただきながらコンサート当日まで微調整を行った。

集客についてはクリアできたとは言えないが、チラシの配布や各種広報紙にイベント情報を掲載した他、ロビーでアーティストの紹介映像を流したり、当ホールをよく利用される町民の方を通じて声掛けをする等の宣伝を行った。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティでは、普段はあまり生演奏を聴く機会がない子どもたちに、とても近くでプロの演奏を体感してもらい、生の音楽を届けることができた。アクティビティをきっかけにコンサートに参加してくれた児童もいたため、音楽の魅力を伝えられたのではないかと思う。また、コンサートの来場者アンケートを見ると、素敵な演奏だった、今までとはまた違った視点から酒々井を見つめることができた、というお声をいただき、音楽による地域活性化に寄与できたのではないかと考える。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アクティビティについて、訪問先の学校との連携がうまくとれず、担任の先生まで活動の意義を十分に伝えることができなかった。またコンサートの集客については、効果的な広報活動の手段を模索していくと同時に、いかにコンサートの魅力を伝えられるチラシを作成し、PRできるかという点が今後の課題である。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

おんかつを通じて、参加者やその様子を見守る人々を含め、酒々井町全体の音楽に対する興味関心の高さが感じられた。しかし、残念ながら生の演奏に触れる機会が少ないのが現状である。今回の事業を通じてできたつながりを大切に、今後も音楽に親しむ機会を提供していきたいと思う。

アシスタントレポート
福原　理子（公益財団法人北九州市芸術文化振興財団）

＜はじめに＞

酒々井町は、都心から50km、成田国際空港から約10kmほどに位置し、北西には印旛沼、東南には北総台地を配する。明治22年の町村制施行により酒々井町が誕生し、以来「日本で一番古い町」として着実に歩んでおり、町制130周年を迎えた。江戸時代には成田街道の宿場町として栄えた歴史を持ちながらも、暮らしのそばに自然が息づく。さらには大きなプレミアムアウトレットを携え、多面的な魅力に溢れている。

プリミエール酒々井は図書館と文化ホールを併設した施設で、２つを結ぶ開放的なエントランスホールでは、憩いの場としてくつろいだり、勉強や読書をするなど地域の方々が思い思いに過ごされている光景が見かけられる。文化ホールは350席の客席数を持ち、木のぬくもりを感じられるあたたかなホールで、客席後方にはゆったりとした親子室が完備されている。

町の将来を担う子どもたちに音楽の楽しさを知ってもらい、音楽を身近に感じてもらいたい、また、町制130周年を迎えたふるさとへの愛を深めてもらいたいという思いから、町内の小学校３年生全５クラスへのアクティビティ及びコンサートを実施した。

＜アクティビティ＞

町内の小学校は全部で２校あり、全ての小学校３年生を対象に５クラス、計５回のアクティビティとなった。３年生という学年は、部活動が始まる一つ前の学年であり、アクティビティを通じて音楽への興味関心を高め、音楽を親しんでもらうきっかけになればという目的から設定されたという。

プログラム中の「アヴェ・マリア」では、子ども達の中を練り歩きながら演奏する。はじめこそ驚きと嬉しさとで子どもたちの興奮が伝わるが、いつの間にか繊細で豊かな音楽の世界に引き込まれ、アーティストと子どもたちとの空気がスーッと溶け込んでいくような感覚であった。

また、「海へ」では、音楽と向き合い、音楽の聴き方や感じ方が多様であることを体感したようだ。一回一回の演奏が唯一無二であり、ホールの響きの中で聴くのではなく、まるで一緒に演奏しているかのような近さで息づかいを感じて聴くことの特別さを、アーティストの自然な言葉かけにより共有していた。

＜コンサート＞

コンサートは２部構成で、１部にクラシックや、フルートとギターのオリジナル曲を携え、２部には酒々井町ならではのこだわりのプログラムを盛り込んだ。「酒々井民話絵本」とのコラボレーションである。担当の三石さんは日頃は図書館の職務をされており、企画の段階から、演奏と絵本とのコラボレーションを実現したいという考えがあった。「酒々井町」の町名の由来にもなった「酒の井伝説」を描いた絵本を舞台上に映し出し、絵と演奏によって物語を紡いだ。絵本のページをめくるスライド操作と演奏のタイミングが完璧で、操作を担当された三石さんも舞台袖で一緒にアンサンブルに加わっていたかのようであった。

さらに、予め公演チラシに記入欄を作り、「酒々井町の好きなところ」を投票してもらい、演奏と共に投票結果を紹介するという演出も仕掛けた。お客様一人一人が町のことを見つめ、さらに会場に集まったお客様と同じ音楽を聴きながら、それぞれの町への思いに気持ちを馳せる。まさに唯一無二の「ふれあいコンサート」である。

＜おわりに＞

今回の事業に関わる全ての方々が、熱意を持ち丁寧に着実に準備を重ね、アクティビティもコンサートも大成功を収めた。コンサートには、アクティビティに参加した子どもたちが駆けつけていた。アクティビティの時には、コンサートの当日は塾や習い事があるという声が聞こえていたが、お家の方と都合をつけてくださったのだろうか。プリミエール酒々井さんの真摯な取り組みに、アーティストの届ける音楽と45分間の緻密なプログラム構成、子どもたちへの自然な言葉掛けによるコミュニケーションなどすべてにおける相互作用によって、「もっと聴きたい」「ホールで聴きたい」という気持ちを育んだ。

町制130周年を記念して実施された「おんかつ」であったが、今回をきっかけに酒々井町の方々にふるさとへの愛、音楽や地域の人々とのふれあいをお届けしていくコンサートが今後も紡がれていくことを願うばかりである。

実施団体：羽村市生涯学習センターゆとろぎ
実施時期：令和２年２月６日（木）～令和２年２月８日（土）
出演アーティスト：中野　翔太（ピアノ）　田中　拓也（サクソフォン）

アクティビティ

タイトル：はむらスクールコンサートvol.1
期　　日：令和２年２月６日（木）　11：15～12：00
会　　場：羽村市立松林小学校　音楽室
参 加 者：４年生（29名）、特別支援学校生（２名＋保護者２名）

松林小学校４年生と市内の特別支援学校生の合同授業として、計33名で実施した。登場してすぐに「スカラムーシュ」の演奏に入り、生徒たちの関心を一気に引き寄せていた。楽器の紹介では、ピアノの音が響く仕組みを伝えるために、響板にむけてサクソフォンの音を出すパフォーマンスをしたり、バラエティに富むサクソフォンの音色を出したりと、体感する「音」で分かりやすく楽しく伝えていた。

途中、抽象的なイラストや写真等５点の図を見せながら演奏を行い、生徒にはイメージに合う図を選んだり感じたことを言葉にしてもらった。最初はなかなか手が挙がらなかったが、アーティストのお二人がやさしく促してくれたことで､徐々に発言が増えていった。最後の曲「リベルタンゴ」は、楽器に近づいて聴いてもらった。素早く動くアーティストの指先を熱心に見つめる姿が印象的だった。アクティビティ後は給食交流も行なわれ、食べ終わった後もお話を続けていたりサインをねだったりと、積極的な交流をしていた。

タイトル：はむらスクールコンサートvol.2
期　　日：令和２年２月６日（木）　14：30～15：15
会　　場：羽村市立栄小学校　音楽室
参 加 者：６年生（47名）、特別支援学級生（13名）

栄小学校６年生と特別支援学級生の合同授業として、計60名で実施した。内容は午前中と同様であった。６年生のため落ち着いた雰囲気であったが､「リベルタンゴ」演奏中にはアーティストお二人の間を動き回りながら楽しんでいる生徒もいた。事前の打合せで担当教諭よりアンコールの希望があったため、アンコール曲としてG線上のアリアを演奏し、音楽好きの生徒たちはとりわけうれしそうな表情で聴き入っていた。

タイトル：はむらスクールコンサートvol.3
期　　日：令和２年２月７日（金）　10：35～11：20
会　　場：羽村市立武蔵野小学校　音楽室
参 加 者：４年１組（38名）

武蔵野小学校４年１組の生徒38名で実施した。内容は昨日と同様であったが、活発に発言する生徒が多く、次から次へと個性豊かな意見が出た。アーティストから、出た意見に正解はなく、それぞれ感じたことを大切にしてほしいと伝えると、生徒たちは真剣な表情でうなずいていた。アクティビティ後は給食交流も行なわれ、田中さんに入っていただいた。終了後も生徒たちが教室の外までお礼を言いに来ていたことか印象的であった。

タイトル：はむらスクールコンサートvol.4
期　　日：令和２年２月７日（金）　11：25～12：10
会　　場：羽村市立武蔵野小学校　音楽室
参 加 者：４年２組（38名）、特別支援学級生（２名）

武蔵野小学校４年２組と特別支援学級生の合同授業として、計40名で実施した。内容は前回と同様であった。クラスの違いに関係なく、自由な発言が多く出たことで、リラックスした良い雰囲気の中進行することができた。アクティビティ後は給食交流も行なわれ、中野さんに入っていただいた。終了後も生徒たちが教室の外までお礼を言いに来ていたことか印象的であった。

コンサート

タイトル：ピアノ＆サクソフォン デュオコンサート
　　～心躍る音の世界へ～
期　　日：令和２年２月８日（土）　14：00～16：00
会　　場：ゆとろぎ　小ホール
参 加 者：一般　223名（大人217名、子供２名、招待４名）

プログラムは、１部ではクラシック、２部ではジャズが中心の構成となった。一番最初に「Ｇ線上のアリア」をもってきたことで、クラシックファンの方もそうでない方もぐっと集中して聴いていただけた。その後はアーティスト２人の掛け合いを挟みながらコンサートを進行し、トークの際には客席から何度もなごやかな笑い声が聞こえる良い雰囲気であった。アンコール曲では「熊蜂の飛行」と「マンボ」が演奏され、「マンボ」ではお客さんにも合いの手を入れてもらう構成となり、一体感に包まれての終演となった。

ホール担当者の意見・評価
羽村市生涯学習センターゆとろぎ　岡野　志織

①　応募の動機・事業のねらい

当館では年３～４本のクラシックコンサートを実施していますが、多くが共催として関わっているものであり、主催者としての企画運営のノウハウが身についていない現状があります。本事業を通じて、地域のための公共ホール事業を実施するためのノウハウを学びたく応募しました。

②　企画のポイント

アクティビティ先については担当が動くよりも早く決まっていた経緯があるため、引き受けていただいた学校の要望を出来る限り汲み取り、充実した内容となるよう努めました。

コンサートについては、集客力向上のため実施日時を休日の午後とし、宣伝媒体の拡充を図りました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・どこまで何を進めて良いのか分からず、主催者として決定すべき事とアーティストにお任せするところのすみ分けが難しかったです。
・アクティビティ先で当日すべきことや、コンサート実施にむけてアーティストの方と舞台技術の方の間に立ち調整していくことについて、方法も手順も全く分からない状況でした。

④　上記③をどのようにクリアしたか

進行については、コーディネーターや地域創造の方に分からないことがあればすぐに相談をして、メールだけで分からないことは電話で確認するなど、疑問を残したままにしないよう心掛けました。相談をしていく中で、事業実施に向けての道筋をしっかりつくることができたと思います。

アクティビティ先やコンサート準備段階で主催者としてすべきことについては、コーディネーターが手本を見せてくださったので、できることからすぐに実行に移していきました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティにおいては、市内小学校との連携体制をつくることができ、また先生方からもご好評をいただいています。地域とのつながりを持つ大事な一歩になりました。

コンサートにおいては、定員の９割弱の方にご来場いただき、また主催者側としての狙いである「アーティストから近い距離で迫力の生演奏を聴いていただく」ことが、お客様にも伝わっているのをアンケートから伺うことができました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

ホールの音響上の都合で舞台袖をつくれなかったことにより、アーティストの出入りのタイミング調整と舞台スタッフへの連絡、舞台上の備品の出し入れを一人でやらなければならず、コーディネーターのアドバイスとサポートがなければ実施困難な状況でした。今後の事業実施にあたっては、事業に関わる職員の確保と会場の検討を行なっていきたいと思います。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今迄のクラシックコンサートは、海外の著名アーティストや市に所縁のあるアーティスト等を中心に演奏を依頼してきました。そこにも一定の需要はありますが、今回のおんかつ事業のコンサートにおける集客率とアンケート結果で、若手音楽家の演奏を楽しみにする新しい顧客を発見することができまし

た。またアクティビティでは、先生も知らなかった子供たちの音楽に対する考えを、中野さんと田中さんは引き出してくださいました。

アクティビティ＋コンサートは、地域のための公共ホールとして幅広い年代の方から支持いただける重要な事業であるため、今後の自主事業にも生かしていきたいと考えています。

アシスタントレポート
髙井　晴美（公益財団法人ひろしま文化振興財団）

羽村市は東京都の多摩地域にあり、人口約55,000人と東京都で最も人口が少ない市である。都心まで電車で１時間程度の場所にあり、市民は足を延ばせば様々な公演に触れることができる。市民が身近に芸術文化に触れることができるのが「生涯学習センターゆとろぎ」。平成18年に開館し、大ホール（856席）、小ホール（252席）、レセプションホールや展示室、会議室、講義室等を有し、市民の発表の場でもある生涯学習の拠点施設である。管理運営は直営で教育委員会が所管し、事業は市民オペラ、映画の定期上映、講演会や展示会など幅広い。本事業をゆとろぎが更に市民に親しんでいただける場となるための新たな試みとして捉え、事業継続には、直営ならではの担当者の異動が課題であるとしていた。そして、ゆとろぎが様々なジャンルの音楽と出会える場になって欲しい、子どもたちにアーティストとの出会いを通じて新たな発見をして欲しいとの思いがあった。

中学校が全国吹奏楽部コンクールの常連で金賞を取るなどレベルが高く、ゆとろぎの来場者には吹奏楽に親しんでいる方が多い。また、隣接する市には米軍基地があり、ジャズに馴染みのある市民が多い。そのため大ホールで開催されるたくさんの楽器が登場するいつものゆとろぎのコンサートとは趣を変えて、１つ１つの楽器にじっくり注目でき、客席が一体感を感じられるプログラムが検討された。そしてコンサートにジャズの要素を取り入れ、観客と演奏家の距離が近くなる小ホールでのコンサートが企画された。

アーティストはピアニストの中野翔太さんとサクソフォン奏者の田中拓也さんのお二人。昨年度もご一緒に事業に取り組まれ、今年度は北海道帯広市（おんかつ発展継続）、静岡県御殿場市（おんかつ）に続いて実施する経験豊富なアーティストであった。

ゆとろぎでアウトリーチを実施するのが初めてということで、学校と調整を進める中でアクティビティをすべて小学校で行い対象は高学年となった。学校側も初めてとのことであったが、音楽専科の教員もいらっしゃり下見・当日ともとてもスムーズに対応してくださった。アーティストは、子どもたちに想像力を膨らませて音楽を楽しんで欲しいとの思いがあり、子どもたちとコミュニケーションを取りながらたくさんの言葉を引き出していた。子どもたちが表現した言葉はホワイトボードに書き記し、同じ音楽でも色々な意見があることをわかりやすく共有していた。その様子がいつもとは違う子どもたちの一面であったようで先生は驚き、これまで知らなかった子どもたちの感性に感動したとおっしゃっていた。また、演奏や楽器を間近で見させて欲しい、子どもたちからの質問に答えて欲しいという先生の要望にも応える内容であった。

コンサートは広報の効果もありチケット販売は好調で、当日券も完売しほぼ満席。プログラムは、前半はクラシック、後半はジャズの雰囲気を感じられる、前半と後半では趣が違う内容。また、小ホールで実施することで照明での演出が可能となり、曲をイメージする色による演出で視覚的にも客席を盛り上げていた。アーティストは、トークで曲や楽器を紹介するだけでなく、アウトリーチの様子や地元の名物（水）といった身近な話題で客席との距離を縮め、アンコールでは観客が「マンボ」の掛け声で演奏に加わり一体感が生まれていた。

アウトリーチで、子どもたちは音楽はもちろんアーティストも身近に感じ、様々な刺激を得ただろう。学校を後にする際、どの学校からもまた同じような事業を実施して欲しいとの声があった。また、小ホールでコンサートを主催することが初めてであり、スタッフの少なさや休憩時のお客様の出入りなどを心配されていたが、職員やレセプショニストの方々の連携により問題なく運営されていた。コンサートの担当経験がない状況で、コーディネーターのサポートのもと、担当者の岡野さんは何でも挑戦されていた。都内ということもあり、アーティスト打ち合わせにも参加された。ゆとろぎの皆様がご準備された結果がアウトリーチやコンサートでのたくさんの笑顔として表れていたのだろう。事業継続が課題で

あったが、このたびの実績と様々な経験が次につながると思う。この度のおんかつ事業を通じて、地域の方々のことを思い、届けたい音楽を考えて取り組むことが、道をつくるのではないかと改めて感じた。

実施団体：氷見市、氷見市教育委員会
実施時期：令和元年９月26日（木）～令和元年９月28日（土）
出演アーティスト：アーバンサクソフォンカルテット

アクティビティ

タイトル：きときと100歳体操
　　いっしょに聴かんまいけ♪コンサート
期　　日：令和元年９月26日（木）　10：45～11：30
会　　場：宇波公民館　実習室
参 加 者：きときと100歳体操参加者　31名

アクティビティが始まる前に、アーバンサクソフォンカルテット、地域創造スタッフが聴き手である高齢者のみなさんとともに“きときと100歳体操”に参加されたことで、距離感がぐっと縮まった。クラシック音楽の生演奏を初めて聴かれる方が多かったが、伸びやかなサックスの音色とハーモニーで参加者を魅了した。「若返ったような気がする」「本物の音楽の余韻がいつまでも残っている」と感想を得た。

タイトル：市役所　de　サクソフォンな出会い　コンサート
期　　日：令和元年９月26日（木）　17：20～18：20
会　　場：氷見市教育委員会事務局　執務室
参 加 者：教育委員会職員、市役所職員　37名

就業後の教育委員会事務局にて、職員は電話やパソコンがある自席に座ってアクティビティに参加した。集中しづらい状況であったが、プログラムが進むにつれて、演奏者との距離感が縮まり少しずつ集中していった。また、他部署の職員の参加も多く見られ、廊下に立って時間を許す限り演奏に聴き入っていた。市長をはじめ、教育長、市職員が「音楽アウトリーチ」を間近で体験する貴重な機会となった。

タイトル：氷見商工会議所　de　サクソフォンな出会い
　　コンサート
期　　日：令和元年９月27日（金）　14：00～15：00
会　　場：氷見商工会議所　第１会議室
参 加 者：商工会議所役員、職員　35名

世界へ誇る絶景“海越しに望む立山連峰”を眺めながら、商工会議所役員会議後、役員・職員が生の迫力ある本物の音楽に触れた。音楽が好きな方とともにあまり興味の無い方も一体となって楽しんでいる様子がうかがえた。これまでこのような機会に恵まれなかった方から、「音楽に興味を持ち、また聴いてみたい」と感想を得た。

タイトル：アルカディア厨房コンサート
期　　日：令和元年９月27日（金）　18：00 ～ 19：00
会　　場：老人保健施設アルカディア氷見　厨房
　　（現在使っていない）
参 加 者：職員　34名

動線や音響を考え、もう使用されていない厨房を演奏会場に選び、施設職員のみなさんが会場清掃・設営に知恵を絞り楽しんで取り組まれた。獅子舞が盛んな氷見にちなみ、地元では誰もが馴染みのある獅子舞のお囃子をアレンジしたオープニング演出に、参加者全員が感無量の面持ちだった。『草深き鄙（ひな）には稀なサキソフォン　目尻を濡らす人もこほろぎも』（長谷川施設長）

コンサート

タイトル：ひみクラシックス
　　アーバンサクソフォンカルテット Special Concert
期　　日：令和元年９月28日（土）　10：30 ～ 12：15
会　　場：いきいき元気館　３階ホール
参加者：147名（チケット販売181枚）

音響を少しでも良くしたいという思いから、休館中の市民会館から利用できるものを探し、華道作品展示のパネルを演奏者後方に置く工夫を行った。開演前、休憩時間には、アクティビティの様子を壁に投影し、２日間の地域交流活動を観客のみなさんと共有した。市内では様々な行事が開催されているなかで、147名の方が足を運んでくださり、良質の音楽を楽しんだ。

ホール担当者の意見・評価
氷見市教育委員会事務局　教育総務課　後藤　和泉

①　応募の動機・事業のねらい

当市では、耐震不足のため氷見市民会館を休館しており、新たな文化施設の整備を進めている。このような中、２年前からアウトリーチ活動を始め、昨年度は市内小中学校等を会場に、体験型の音楽アウトリーチ活動を11回、演劇アウトリーチを15回開催した。今年度も小中学校等へのアウトリーチ活動を実施している。「おんかつ」でのねらいは、新しい文化施設が開館した時にホールを利用する市民、市内の芸術文化活動を支える若い世代を育むため、地域の団体や市民との新たな回路を構築することである。子どもたちへのアウトリーチを継続するとともに、新しい文化施設が開館したときに子どもと一緒にホールへ足を運んでくれる大人へのアウトリーチを促進したい。

②　企画のポイント

これまで音楽を聴く機会が乏しかった大人（特に働き盛りの方々）に、音楽を間近に体感し身近に感じてもらうため、老人保健施設、商工会議所、市役所（教育委員会）の様々な職場や元気な高齢者が通う「きときと100歳体操」会場で、大人のためのアクティビティを行った。コンサートは、「ひみクラシックス　アーバン サクソフォン カルテット Special Concert」と題し、アクティビティを体験した方々に家族とともにホールへ足を運んでもらい、家族で楽しめるプログラムとした。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

今回のねらいである「新しい文化施設が開館した時にホールを利用する市民、市内の芸術文化活動を支える若い世代を育むため、地域の団体や市民との新たな回路を構築すること」が苦労した点である。全体研修時には小中学校へのアクティビティを考えていたが、サブコーディネーター菊地俊孝さんから“公金を使ってやる意義”を問われ、地域との新たな回路を作ることに挑戦する覚悟を決めた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

これまで連携したいと思いながらできずにいた福祉分野との連携には福祉介護課への相談、連携を行い、きときと100歳体操会場でのアクティビティ実施につなげた。また、上司の橋渡しを受け、商工会議所事務局や老人医療施設（施設長・看護師長・事務長）との新たな繋がりをつくり、音楽アウトリーチへの理解者を増やすことができた。

⑤　事業を実施しての成果

子ども向けのアウトリーチは既に取り組んでいるため、今回のおんかつでは、アウトリーチ活動に対する共通認識を育むため、全て大人対象のアクティビティを実施した。“おんかつ”の力を借りて、これまでアウトリーチ経験がない対象を開拓し新しい人脈ができたこと、アウトリーチ未経験の方にその楽しさを新しく知っていただき理解が深まったことを実感し、市内でのアウトリーチ活動がより一層拡がっていく推進力になることを期待したい。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

10～１月は芸術文化事業が重なることから、実施時期を９月か２月のどちらかで考え、２月は雪の心配があることから、９月実施とした。実施までの準備期間が短く、十分に企画を練りこむことができず、また秋の芸術文化事業を目前にしその準備に追われ、おんかつに集中して取り組むことができなかったことが悔やまれる。教育委員会職員がおんかつ事業を実施する際は、全国どこでも同じような状況が

考えられることから、募集・決定・研修の時期等検討していただけたらと思う。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

休館中の氷見市民会館に代わり、現在新しい文化施設を計画中である。公共ホールは図書館･公民館･博物館に次いで４つめの社会教育施設であり、①市民文化事業（社会包摂)、②都市文化事業（経済活性化)、③貸館、④自主事業の４つの役割が挙げられるが、新しくできるホールは、市の文化振興理念を実現する場、地域を活性化するとともに世代間交流が行える空間、人と人・地域を結ぶ場として重要な役割を担うものであると再認識した。

アシスタントレポート
福原　理子（公益財団法人北九州市芸術文化振興財団）

＜はじめに＞

氷見市は富山県の西北、能登半島の東側付け根部分に位置する人口約４万7,000人ほどの市である。3,000m級の立山連峰を富山湾越しに臨む景観を持ち合わせながらも、藤子不二雄Ａ氏の出身地としても知られていることから、市街地の至るところに忍者ハットリくんや怪物くんなどのキャラクターモニュメントが出迎えている。また、新鮮豊富な海の幸をはじめ、氷見牛や氷見米などの山の恵みも盛りだくさんである。

耐震不足のため氷見市民会館を休館し、現在、新たな文化施設開設の準備を進めている。そのような状況において、市内小中学校などでの体験型の音楽アウトリーチ活動や出前コンサート、演劇のアウトリーチなどのアウトリーチ活動を２年前に始め、現在も継続的に行い、今後も推進していく予定だという。

「おんかつ」では、新たな文化施設が開館した時のために、ホールの利用者や市内の芸術文化活動を支える若い世代を育て、地域のあらゆる団体や市民との新たな出会いやつながりを創出していくことを見据え、市内四カ所での大人を対象としたアクティビティを実施し、コンサートへとつなげた。

＜アクティビティ＞

普段なかなかホールに足を運ぶことが出来ない方々に音楽を届けること、今まで以上により音楽を身近に感じていただくこと、音楽アウトリーチへの共通認識を育むこと、これらを目的に大人達を対象としたアクティビティを行った。一カ所目が元気な高齢者が通う「きときと100歳体操」の参加者、二カ所目が職員とアウトリーチ事業への共通認識を育むために実施した教育委員会、三カ所目が商工会議所の職員や非常勤役員、四カ所目が老人保健施設の職員である。大人向けのプログラムということもあり、地元の方々ならなじみのある、獅子舞にちなんだメロディーやリズムを用いた節回しとともに入場するなど、対象との距離感や場を温かくするための工夫が随所に盛り込まれた。

各会場ごとに様々な違いはあったものの、コンサートホールでは味わえないような、間近で感じる音の圧や、息づかいが聞こえるような臨場感、そして目の前のアーティストとのアイコンタクトをしながらのコミュニケーションに、どのアクティビティの参加者の方々も存分に音楽そのものの魅力とアーティストの魅力を存分に堪能していたようであった。

＜コンサート＞

閉館している氷見市民会館に代わり、健康交流施設「いきいき元気館」内のホールでコンサートを行った。10時30分という開演時間は、別の音楽事業がお昼以降の時間から実施されるため、音楽に関心のある方々が足を運びやすいよう設定された。斬新な試みではあったが、午前中の清々しい時間帯に、200人の定員のところ147人もの方々に足を運んでいただけた。お昼ご飯の時間帯の前には終演というのも、格好の時間帯であったのだろう。

サクソフォンカルテットオリジナルの楽曲を中心に構成した前半には、サクソフォンの魅力を存分に味わえる、本格的かつバラエティ豊かなプログラムで、観客はその音色に酔いしれていた。さらに後半には子どもから大人まで、家族でも楽しめる、アーバンの魅力を詰め込んだプログラムを構成した。遊び心溢れる演出によって会場全体に一体感が生まれさらに心をひきつけていく様子が印象的であった。

また、休憩時にはプログラム中には各地でのアクティビティの様子を記録した写真をスライド投影し、観客と共有した。アクティビティに参加していない観客も、写真を通して時間を共有し、和やかな雰囲気に包まれた。

コンサートが終演してもなお、会場には暖かな余韻が残った。終演後の写真撮影やサイン会にできた長蛇の列が如実に表していた。

＜おわりに＞

今回の「おんかつ」でアクティビティを享受した大人たちが、新たな文化施設に足を運ぶことのきっかけづくりになったであろうことと同時に、アウトリーチそのものの共通認識の育成へのダイレクトな働きかけとなったことは間違いない。今回のおんかつでアクティビティを享受した大人たちに加えて、さらにアウトリーチを享受した子どもたちが年月を重ねて大人になったときに、音楽やホールが生活の一部になっているのではないか。子どもから大人、高齢者と、あらゆる世代が集う場へなっていくであろうことが想像に容易い。

実施団体：御殿場市民会館
実施時期：令和２年１月20日（月）～令和２年１月22日（水）
出演アーティスト：中野　翔太（ピアノ）　田中　拓也（サクソフォン）

アクティビティ

タイトル：音楽室にアーティストがやってくる
期　　日：令和２年１月20日（月）　11：20 ～ 12：05
会　　場：御殿場市立印野小学校　音楽室
参 加 者：３年生19名、４年生17名

普段音楽に触れることが少ない児童たちに参加してもらうことを目的とし、プロの音楽家と身近に接することができる音楽室を選定した。３年生と４年生合同で45分間音楽を楽しんだ。演奏を聴くだけではなく、音から思い浮かぶ絵を選んだり、楽器の構造を身近で学んだりし、豊かな心を育むことができた。また、給食も一緒に食べ、交流を深めた。

タイトル：音楽室にアーティストがやってくる
期　　日：令和２年１月20日（月）　13：40 ～ 14：25
会　　場：御殿場市立印野小学校　音楽室
参 加 者：５年生24名、６年生23名

午前中と同様に５年生、６年生合同で45分間音楽を楽しんだ。内容は午前中のプログラムと同じく、宇宙や森、海など５枚の絵を提示し、どの絵の印象に合っているかを尋ねた。より自分の言葉で表現しようとする姿が見られ、「音楽の聴き方に対する新たな発見があった」と発言する児童もいた。音楽を自由に楽しむことを体感できる内容だった。

タイトル：音楽のある生活～東山旧岸邸コンサート～
期　　日：令和２年１月21日（火）　11：00 ～ 11：45
会　　場：東山旧岸邸　居間・食堂
参 加 者：高齢者28名程度と介護職員７名、岸邸ボランティア５名

高齢者や認知症をもつ方々へ音楽に触れる機会を提供し、音楽のある生活を体感してもらうことを目的に開催。サロンコンサートのように演奏家とも距離が近く、車椅子生活や介護付き生活の中でも、生の音に触れ音楽を身近に感じてもらえた。選曲もリベルタンゴなど分かりやすい曲もあり、楽しむことができた。

タイトル：音楽のある生活～東山旧岸邸コンサート～
期　　日：令和２年１月21日（火）　14：30 ～ 15：15
会　　場：東山旧岸邸　居間・食堂
参 加 者：東山地区、御殿場地区在住の方30名、
　　岸邸ボランティア５名

東山旧岸邸は御殿場市の東山地区に位置し、一般公開をして10周年を迎える文化施設であるが、まだ足を運んだことがない方にもお越しいただける機会づくりとして音楽コンサートを開催。建物にはあまり関心がない方にも音楽を通して知るきっかけになった。建物や庭園の雰囲気が音楽とも相まって、両方楽しめる空間づくりができた。５曲演奏し､プロの音に感動を覚え､翌日のコンサートチケットを購入してくださった来場者もいた。なお。御殿場地区よりピアノを無償でお借りすることができ、地域交流にもつながった。

コンサート

タイトル：御殿場パノラマコンサート
期　　日：令和２年１月22日（水）　19：00 ～ 21：00
会　　場：御殿場市民会館　大ホール
参 加 者：205名

本格的クラシックコンサートを開催する機会が少ない御殿場市において、プロの演奏家によるコンサートに触れる機会を提供することを目的に開催。アーティストと共に企画制作を行い、御殿場市の文化や名所を写真で紹介しながらアーティストが受けた御殿場の印象をトークした。またクラシックの演奏も素晴らしかったが、第２部ではジャズ、ボサノバなどもあり、はじめて音楽会に来た方々も楽しみ、親しみやすいコンサートとなった。

ホール担当者の意見・評価
御殿場市民会館　館長　高杉　伸一郎

①　応募の動機・事業のねらい

御殿場市民会館が主体的にまちの中に芸術文化を浸透していく役割を担っているが、さらに「音楽や文化を通じたまちづくり」に寄与するために、本企画を通して音楽が身近にあるライフスタイルの提案と子ども達の情操教育に大きな効果を発揮させることをねらいとし応募した。

②　企画のポイント

【アクティビティ】小学校においてはプロの演奏家とふれあい、生の演奏を聞くことによって、普段使用している音楽室の雰囲気が一変する体験を通し、新しい発見ができるような内容にした。一方、市内にある文化施設（東山旧岸邸）では、近隣の方に施設の存在と文化財の活用を知っていただく機会とすると同時に、普段とは違う音楽のあるライフスタイルの提案をした。

【コンサート】アーティストと共に企画制作を行っていった。具体的には、第１部後半で御殿場市の文化を取り入れ、曲に合わせた照明プランも立て音楽を展開していった。このコンサートは御殿場市内の方々はもとより、御殿場になじみがない方々へ御殿場の紹介も兼ねた構成とした。また、音楽会になじみがない方にも楽しんでもらうために、トークを混ぜたり、写真を映したり飽きのこないよう工夫した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

他館連携で行ったため、プランニング、営業、予算管理など共同制作の難しさを感じた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

構想すべてを実現しようとはせず、実現可能な範囲はどこまでかということを見極めながら進めていった。

⑤　事業を実施しての成果

アンケートにもあるように、本物を提供すればお客様も満足をしてくださることを実感できた。

中学生や高校生なども来場し、プロの演奏に触れてもらえたことはよかった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

公演ではコーディネーターが主導的に動いてくださったので無事に終えられたが、この動きを共同で学ぶところまで至らなかったのが反省。作り上げる難しさを実感した。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

クラシック音楽の土壌がない地で、ピアノとサックスのコンサートで集客することは難しいのが現実だが、足を運んでいただいたお客様の満足度を上げ、そこから広げていく地道な活動をすることが大事だと感じた。

アシスタントレポート

菊地　俊孝（公益財団法人東松山文化まちづくり公社副局長、東松山市民文化センター副館長兼プロデューサー）

御殿場市は東京から約80km、富士山と箱根の間に位置する平均標高500mの高原都市。自然環境豊かで、夏涼しく、避暑地としての性格を備えている。自然豊かなこの都市には、数多くの景勝地、観光施設などがあり、年間を通じて多くの人々がこの街を訪れる観光の街という側面もある。また、多くの政治家や著名人が避暑地としてその自然を愛した。

今回、おんかつ事業に手を挙げたのは御殿場市を代表する文化施設御殿場市民会館を管理する御殿場総合サービス株式会社と市内の歴史的文化施設東山旧岸邸を管理する虎屋グループの株式会社虎玄である。東山旧岸邸は首相を務めた岸信介の自邸として建てられた建築物で現在はその美しい庭園とともに御殿場市を代表する観光施設となっている。

芸術文化を市民に浸透していく役割を担う御殿場市民会館が「音楽や文化を通じたまちづくり」を推進するため、東山旧岸邸とともにおんかつ事業を通して「音楽が身近にあるライフスタイル」の提案をする。招聘したアーティストは、ピアノ中野翔太氏とサックス田中拓也氏である。

その企画意図のなかアウトリーチ先に選んだ施設は印野小学校と東山旧岸邸である。

印野小学校

印野小学校では、３、４年生、５、６年生を対象に実施した。中野さん、田中さんのアクティビティプログラムは音楽と想像力。聴くときに情景や色など何かを想像しながら聴いてもらい、創造性にアプローチしていくという組み立てである。子供たちは二人の人柄のように柔らかなで優しく、そして迫力のある演奏のもと絵や情景を想像しながら聴いていた。子供たちは驚くほどの集中力で演奏に入り込んでいた。特に想像しながら聴いたあとの「リベルタンゴ」は目を見開いて聴いていたのが印象的であった。音楽が創造力に働きかける力を身をもって体感した。

東山旧岸邸

東山旧岸邸は先に述べた岸信介の自邸である。御殿場市東山地区の地域住人にとって誇るべき文化資源である。今回のアウトリーチでは、地域とのコミュニティを模索していた岸邸側からのアプローチで地域住人、地域の福祉施設の方々をお招きしてのアクティビティとなった。来邸される方々の中には岸邸に初めて来られた方もいてその重厚で繊細な邸宅とお庭に感嘆のため息をもらしていた。そんなリラックスした中お二人の演奏は素敵なお庭をバックに曲の紹介を交え、二人の仲の良いトークでお客様も音楽とその空間を楽しむとても贅沢な時間となった。来場者からはあっという間の時間だったと楽しそうに話してくれた方も居られた。

コンサート

今回のおんかつの集大成である「御殿場パノラマコンサート」は御殿場市民会館で行われ、ここにも多くの御殿場市民の方々が来場された。特に特筆できる点として地域のラジオパーソナリティの南篠さんに二人のトークを盛り上げていただき、御殿場の資源を再度投げかけることでその魅力発信が出来たことは、御殿場市に来てまだ日が浅い近藤さん（東山旧岸邸）ならではの視点と言えるのではないだろうか。そのコンサートもアンケートなどによると満足度が非常に高く、お客様も満足した様子であったと追記しておく。

言うに及ばずであるが、アクティビティはただ単に演奏を提供する場ではなくその街でのコミュニティや新たな出会いが生まれる場でもある。特に岸邸でのアクティビティは地域とのコミュニティの醸成に一定の効果をもたらし、東山地区の誇りである岸邸や隣接する公園など人が集える場所の魅力の再発見に繋がったのではないだろうか。

特に今回のおんかつは担当者である近藤さんの強い想いによって御殿場の良い所、当たり前になってしまった資源を内外に発信したい、再確認してもらいたいということが根底にあり、御殿場市民会館の高杉館長をはじめとした多くのスタッフとの協働で実現したアウトリーチの第一歩である。公共施設が外に出て行く意義が垣間見えたおんかつとなった。また、この両施設の活動を見守り、支援し、全てのアクティビティに帯同してくださった御殿場市社会教育課の方々にも公共施設で今どんなことを考え、進もうとしているのかが伝わったとても良い機会となったのではないだろうか。多くの要素を盛り込んだおんかつゆえに両施設の担当者は非常に大変だったと推察されるが、このような活動を今後も継続していただきたい。今後もこのような活動により御殿場市全体で地域を巻き込んだ活動が活発化することを期待している。

実施団体：田原市教育委員会
実施時期：令和元年10月17日（木）～令和元年10月19日（土）
出演アーティスト：アーバンサクソフォンカルテット（サクソフォン）

アクティビティ

タイトル：海に囲まれた花のまち演奏会 by Urban Saxophone Quartet
期　　日：令和元年10月17日　10：40 ～ 11：25
会　　場：田原市立神戸小学校　音楽室
参 加 者：６年生　29名

１回目、２回目のアクティビティは、神戸小学校の小学６年生を対象に開催。この学年は、学年全体的におっとりとした優しい雰囲気があるのが特徴であるとのこと。演奏を聴き、アーティストからどんなことを思ったのか問われると、はじめは少し恥ずかしがってなかなか自分の意見を言うことができなかったが、そんな中でも何人かの生徒さんが思ったことを発言してくれた。アーティストも子どもたちの目線に合わせたアプローチ方法を試行錯誤してくださり、親しみやすい雰囲気で生徒たちとの距離を縮めてくれた。

タイトル：海に囲まれた花のまち演奏会 by Urban Saxophone Quartet
期　　日：令和元年10月17日　11：35 ～ 12：20
会　　場：田原市立神戸小学校　音楽室
参 加 者：６年生　26名

１回目に引き続き、神戸小学校の６年生を対象に開催。連続した授業時間での実施だったので、１回目との間が10分という状況の中でのアクティビティとなってしまったが、その中でも、１回目のアクティビティの反省点をコーディネーターと話し合い、１回目よりも生徒たちの意見を引き出せるアプローチ方法に変え、アクティビティを実施してくれた。

タイトル：海に囲まれた花のまち演奏会 by Urban Saxophone Quartet
期　　日：令和元年10月18日　10：35 ～ 11：20
会　　場：田原市立六連小学校　音楽室
参 加 者：１、２年生　18名

１回目２回目とは対象が変わり、小学１、２年生に向けたアクティビティとなった。下見の際に先生方に伺った通り、非常に素直な反応を見せてくれる生徒さんばかりで、どんどん意見を発言してくれる元気な学年であった。非常に元気な子が多く、たくさんの意見を発表してくれるため、少し心配をしたが、そこをアーティストさんがきちんと次へと進行をして下さり、時間通りに終了する事ができた。六連小学校の生徒さん方には、アーティストからあらかじめ用意したチケットをお渡しし、翌日の演奏会に来てもらえるようにPRをしてもらった。

タイトル：海に囲まれた花のまち演奏会 by Urban Saxophone Quartet
期　　日：令和元年10月18日　15：30 ～ 16：30
会　　場：田原市立田原東部中学校　音楽室
参 加 者：吹奏楽部を含む希望者50名

最後のアクティビティは中学生を対象に開催。前の時間に開催したアクティビティが小学１、２年生対象であったため、かなり対象者の年齢差があったが、アーティストはアクティビティでの演奏曲目を変更するなどして対応してくださった。中学生なので、意見を問われたときにすぐに発言できる子がいるかと少し心配したが、かなり積極的な生徒さんが多く、自ら意見を発表してくれた生徒さんが複数いた。吹奏楽部の生徒さんを中心に参加してもらっているため、本当に真剣に演奏を聴いてくれていて、曲のイメージを自分なりに考えながら演奏を楽しんでくれていた様子であった。

コンサート

タイトル：海に囲まれた花のまち演奏会 by Urban Saxophone Quartet
期　　日：令和元年10月19日　14：00 ～ 16：00
会　　場：田原文化会館　文化ホール
参 加 者：196名

第１部と第２部に分け、１部ではクラシック曲を中心に演奏していただき、休憩をはさんだ後の２部では、コンサートのテーマである「海と花」に関連した曲目を演奏していただいた。また、４月のプレゼンテーションで見せて頂いたように、来場者と近い距離で演奏をしていただきたくて、そのようにリクエストをすると、第２部開始の時にホール後方から演奏をしながら入場をしてくださり、来場者の反応がとてもよかった。また、アクティビティの合間に見学した田原市の名所に行った感想をスライドを使って楽しいトークと共に紹介していただいたり、来場者の笑いを誘って下さった。コンサート最後に演奏するアンコール曲では、前日のアクティビティで伺った東部中学校の吹奏楽部さんとの共演を行った。来場者の方からは非常に高い満足度をいただき、高校生以下の料金を無料としたり､学校へのアクティビティを行ったりしたことが功をなしたのか、過去のクラシックコンサートと比べるとたくさんの学生がホールに足を運んで下さった。

ホール担当者の意見・評価
田原市教育委員会　生涯学習課　河邉　ななみ

①　応募の動機・事業のねらい

今回この事業に応募した一番の目的は、田原市の子どもたちに本物の音楽を体感してもらうことです。田原市の芸術文化に対する意識は低く、クラシックコンサートに対する興味や関心がある人はかなり限られている状況です。そんな状況だからこそ、幼いころから本物の音楽に触れ、みずみずしい感性をを養うことができる環境を提供することが必要であると考え、この事業へ応募しました。

②　企画のポイント

今回のコンサートは、「子どもたちに本物の音楽を届ける」ことと「田原市の魅力を再発見してもらう」ことを主なテーマとして企画を進めました。まず、子どもが興味を持って音楽を楽しんでいただけるように、クラシック初心者でも親しみやすいイメージを与えてくれた「アーバンサクソフォンカルテット」さんに出演をお願いしました。また、田原市の魅力である、美しい「海と花」をコンサートのテーマとし、海や花に関連した楽曲を演奏していただきました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

一番苦労した点は人を集める事です。クラシックに興味のある人が少なく、市内にポスターを掲示したり、チラシを配ったりするだけではなかなか簡単にチケットを買ってくれませんでした。

④　上記③をどのようにクリアしたか

市内の音楽系の団体さんや、小中学校へ直接伺って、再PRを行いました。チラシやポスターを設置しただけでは、なかなか興味を持ってもらえないので、自分から直接コンサートの良さをPRしていかないと、なかなか興味のない相手には響かないということがよく分かりました。

⑤　事業を実施しての成果

子どもたちは、アーバンサクソフォンカルテットの演奏を聴いて、とても生き生きとした表情を見せてくれました。そして、最終日のコンサートにも、ご家族と一緒にホールに来て演奏を聴いてくれた生徒さんもいらっしゃいました。きっとそれぞれの生徒さんの中で何か感じるものがあったもではないかと考えています。また、アンケートの中でも、また生演奏を聴きたいという意見が多数寄せられ、今回のコンサートをきっかけに、再度ホールに来て下さる方が増えていけばよいと考えています。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

クラシックコンサートへの興味･関心が依然として低いという状況はあまり変わらないという点です。今回は、音楽やホール事業に興味のある方の参加が目立った印象でした。集客にかなり苦労した点からも、今後、普段音楽に慣れ親しんでいない方をどのように巻き込んでコンサートに足を運んでもらうかを考えていかなければならないと考えています。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

やはり、田原市の人々はクラシックコンサートに触れる機会が少ないため、それに比例して興味のある人も少ないというクラシックコンサートをやるには不向きなまちであると分かりました。ですが、来場者から寄せられたアンケートは非常に良い内容だったという意見が大多数で、元々興味のない方でもやはり実際にホールで演奏を聴けばいいものであると感じていただけることが分かりました。そんな方々が、継続して今後もホールに足を運んで下さるように、ホール事業を企画・運営をしていく必要があるということを改めて考えさせられました。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

愛知県の東南端から西南西に突き出すように延びている渥美半島の大部分を占めている田原市。内海（三河湾）と外海（太平洋）に挟まれ、豊かな海産物はもちろん、野菜、果物、花などの農作物も豊富である上、伊良湖岬からの景色が美しい街という印象であった。今回、音楽活性化事業（下記、おんかつと記載する）に取り組んだ主担当の河邉ななみさんは、田原市の将来を担う子供たちに本物の音楽を届け、豊かな感性を今から身につけて欲しいということと、音楽を通して市民がふるさと愛や地元の魅力を感じてもらうということの２つのコンセプトを軸とし、実施に至った。早い段階からコーディネーターとメール等で企画の方向性等、何度も話し合いを重ねていた為、下見に伺った段階で大方枠組みが出来上がっている状態であった。今回のおんかつは全編通して、非常に熱心な主担当の河邉さんと、以前、公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラムを担当していらしたベテラン前川さんの最強タッグを中心に進められた。上記のコンセプトにはこのアーティストしかいない！という理由で、アーバンサクソフォンカルテット（以下アーバンと記載する）をご指名された。

【アクティビティ】

今回は小学生１、２年生と６年生、そして中学校の吹奏楽部生を対象に合わせて４回実施された。対象者に合わせた多様なプログラムを用意しなければならなかったが、メンバー全員がそれぞれに適切なプログラムを届けたいという非常に強い向上心を持っていた為、各アクティビティが意味のあるプログラムになっていたと思う。アクティビティが終わる毎にコーディネーターからフィードバックを受け、メンバー同士で何度も話し合いを行っており常に新しい挑戦を自分たちに課していた。そのおかげで、段々とプログラムに説得力がついてきて、それが演奏にも反映されてくるようになった。改めて思うのは、プログラムを作成する際、アーティストとして何を伝えたいのか？なぜ自分はここで演奏しているのか？というコアな部分に向き合わなければ、小手先のプログラムしか出来上がらず、ただ演奏を届けるという行為に満足してしまうということである。印象的だった対象者は、吹奏楽部生。下見の際、先生からとにかくシャイなので…と伺っていたが、アウトリーチ後には多くの生徒がアーティストに駆け寄って質問を投げかけていた。

【コンサート】

コンサートのタイトルは、「海に囲まれた花のまち演奏会」。田原市の地形と風習（田原市は多くの花が栽培されている花の街として知られている）を生かしたコンサートを企画しており、タイトルにちなんだドレスコードを設けたり、終演後には、一人一人に苗木をプレゼントしたりと田原市ならではのオリジナリティあふれるコンサートが開催された。演奏曲も前半はアーバンのレパートリーであるクラシック曲、後半はテーマに沿った映画音楽や日本の唱歌、クラシック曲をプログラミングして、終始お客様を飽きさせないよう工夫がなされた。河邉さんの企画背景には、クラシック音楽に近寄りがたい市民の人にも楽しんでもらいたい、足をはこんでほしいという強い願いがあった。アンコールでは、アクティビティ先で訪れた東部中学校の吹奏楽部生とのコラボ演奏があり、生徒さんのみならず保護者や市民の方々全員が楽しんでいた様子が見られた。

【まとめ】

今回のおんかつは改めて、この事業が“人”によって創られていることということ、上記に記載の通り、担当者の河邉さんをはじめとするホールのスタッフの方々、アーティストの向上心、コーディネーターの的確なアドバイス、全員で少しでも良いパフォーマンスをお客さまに届けようという協力体制が、最

高のパフォーマンスにつながることを実感した。何をもって成功と判断するのかは、非常に難しい事業だと思うが、終演後のお客さんの笑顔、スタッフの皆さんのやりきったという安堵感がすべてを物語っていたと思う。今回のおんかつを足がかりに田原市ならではのコンサートや強みを生かした事業が続いていくことを期待したい。

実施団体：一般財団法人奈良市総合財団　なら100年会館
実施時期：令和元年11月７日（木）～令和元年11月９日（土）
出演アーティスト：酒井　有彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：母校でアウトリーチ
期　　日：令和元年11月７日（木）　10：40 ～ 11：25
会　　場：奈良市立登美ヶ丘中学校　音楽室
参 加 者：１年１組 31名　担任 １名

酒井さんの出身校である中学校の１年生を対象に実施。演奏した曲の作曲家や歴史について解説。楽器紹介では、反響版にオルゴールを置いての音が大きくなる仕組みの説明や、アクションモデルやハンマー、弦を使って音の出る仕組み、素材について生徒たちとコミュニケーションを取りながら説明。また、曲のイメージを生徒自身に自由に想像して聴いてもらったり、逆にイメージを与えて聴いてもらったり、いろいろな聴き方を体験してもらいました。

タイトル：みんなでピアノと絵本を楽しもう（酒井有彩先生）
期　　日：令和元年11月７日（木）　16：00 ～ 16：45
会　　場：奈良市音声館　ホール
参 加 者：“わらべうた”教室　３、４、５歳児クラス 14名
　　担当講師、保護者など16名

奈良市音声館で“わらべうた”教室に通う３歳から５歳のこどもたちとピアノと絵本を楽しみました。ピアノの伴奏に合わせてみんなで一緒に歌ったり､絵本をピアノで読み聞かせしたコーナーでは、酒井先生の問いかけにこどもたちが答える…そこには一つの空間が作り出されていました。最後は､「バラード第１番」をリラックスして自由に聴いてもらいました。

タイトル：母校でアウトリーチ
期　　日：令和元年11月８日（金）　11：35 ～ 12：20
会　　場：奈良市立登美ヶ丘中学校　音楽室
参 加 者：１年２組 32名　担任 １名

「J.S.バッハ（ラフマニノフ編）無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第３番よりプレリュード」から始まり計３曲。作曲家と時代背景の解説を交えました。ピアノの音の出る仕組み等を織り交ぜながら生徒のみなさんが、興味を持てるよう工夫した内容になりました。このクラスの担任の先生が、酒井さんの担任でもあり、給食をご一緒しました。先生から「子どもたちもより親しみを持って話しかけて良い雰囲気でした。」と感想をいただきました。

タイトル：母校でアウトリーチ
期　　日：令和元年11月８日（金）　13：20 ～ 14：05
会　　場：奈良市立登美ヶ丘中学校　音楽室
参 加 者：１年３組 30名　担任 １名

楽器の仕組みや演奏した曲の作曲家やその時代背景の解説。２日間に渡り、アーティストの出身校である登美ヶ丘中学校の１年生３クラス全員に参加してもらいました。生徒のみなさんは、先輩でもある酒井さんから聞くピアニストになろうと思ったきっかけや留学体験を真剣に聞いていました。普段落ち着きのない子どもたちが、生の演奏に触れ、クラシックの世界観に引き込まれ、純粋に感動していたと担任の先生も感じられていました。

コンサート

タイトル：酒井有彩　ピアノソロリサイタル
　　「ただいま！酒井有彩です」
期　　日：令和元年11月９日（土）　15：00 ～ 17：00
会　　場：なら100年会館　中ホール
参 加 者：一般市民 228名

有名な曲からコアな曲までトークを交えた演奏。座席に余裕があったので地域の方々を招待し来場していただきました。中には、クラシック音楽を聴く機会がない方もおられ「演奏の前の作曲家の歴史のトークや曲目のエピソード等の語りが、より音楽を深く聴く助けになった」とお声をいただきました。こどもさんが多く来場されていたこともありアンコール曲は、『お人形の夢と目覚め』ほかこどもにも親しみやすい曲になりました。

ホール担当者の意見・評価
事業係　田上・長田

①　応募の動機・事業のねらい

〇クラシック音楽に親しんでもらう

会館で開催されるクラシックの公演の比率は、低い。イメージについては、「難しい、堅苦しい」と思われがちである。そこでプロ奏者の演奏に触れ合う機会を提供し、興味・関心を高めてもらう。会館に来てもらうことで、なら100年会館を身近に感じ、どのような活動をしているのかを知ってもらう。

②　企画のポイント

地元奈良市出身（在住）の音楽家が出演するということで、身近に感じてもらう。出演者本人や周りの方々を通じて関心を持ってもらい、聴いてもらう。その流れで会館やクラシック音楽にも興味・関心を持ってもらいたい。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

〇アクティビティ先の選択と受入れ体制

第１希望の地元出身のアーティストということで、アクティビティ先を絞ることができました。①地元出身のアーティスト　②地元の公立小中学校を卒業している　この２点で出身校に依頼をすることにしました。年度予定が決定してしまっている中で小学校には断られてしまいました。中学校は、《卒業生》ということで興味を示していただいたのですが、おんかつのコンセプト（少人数制）での実施に難色をしめされたことと学校側のカリキュラムの都合等で一度断られてしまいました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

〇《卒業生》という特別な存在

最初にお話しを持って行った時点では、是非とも全校生徒に体験させたいということでした。そこを１年生に限定して活動を受け入れていただけたのは、学校側が、酒井有彩さんを“誇れる卒業生”と捉えてくださったことが大きな要因でした。①自分たちの先輩という存在が、在校生に良い刺激を与えられる。②キャリア教育の一環として年度カリキュラムに合わせられる。と受入れ可能と判断してくださり、その後は時間割の組み替え等スケジュール調整等全面的に協力してくださいました。

⑤　事業を実施しての成果

・今回の事業を通じて、学校や地域の施設とのつながりができました。

・こどもたちの順応力と理解力の高さを知ることができました。

この事業をきっかけに繋がった学校や施設と関係性を保てるような事業の企画など、今後に活かしていきたいと思います。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回は、出演者が地元出身者であることで助けられたことが多くありました。アーティストと日程が決まった後にアクティビティ先を出身校に絞って交渉する時に課題となったのは、「既に年度行事が決定してしまっている。」という点でした。公演日に合わせる必要があるため、学校側にどうしても変更不可の行事が入っている時点で交渉できないことが分かりました。当財団は、指定管理者であるため、アーティストや日程が確定していない段階で学校のカリキュラムに組み込んでもらうための事前協議をすることができませんでした。交渉相手によってそれぞれ時期が違い、初動が大事であると痛感しました。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

当館の中ホールは、室内楽など小編成のクラシックコンサートに適したゴージャスな音楽342席～434席の座席を持つ音の反響を考慮して設計されたガラス張りの作りになっています。奈良市は、大阪･京都に近く、そういう意味では便利な土地柄です。気軽に市外に出て行ける中で、文化事業の開催を地域のホールで継続して開催することの難しさを感じています。そんな中でも地元ならではの、人と人との「つながり」が大切なこと、大きな力を持っているということを改めて実感しました。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

奈良県の北部に位置する県庁所在地の奈良市。かつての都・奈良は、東アジアとの歴史的・文化的つながりが深く、お茶、薬、饅頭、墨という遣唐使によって大陸の最新の文化が日本に持ち込まれた街。京都・奈良とセットで観光されることが多いが、ほかの観光地に比べてが観光客が騒がしくなく、日本の古き良き町並みや歴史的建造物をゆったりと回ることができる。また、古い建物が多く残る奈良市には古民家を利用した飲食店や雑貨屋も多く、他の観光地にはない雰囲気を味わえる。高い建物がないため、空が広いなど自然景観も魅力の一つである。

今回のおんかつは、奈良駅から徒歩５分の所に位置し、1,476席の大ホールから100席程度の小ホールまでを完備する、なら100年会館で実施された。アーティストは奈良市出身の酒井有彩さん。担当の田上さんと長田さんは、酒井さんが幼少期から高校時代を奈良市で過ごし、長い留学生活を終えて近年帰国されたことから「ただいま！奈良市」という出身地への思いを強く感じさせる企画をご提案されていた。

【アクティビティ】

上記のコンセプトから、アクティビティ先は、酒井さんの母校である登美ヶ丘中学校へ３回、酒井さんが幼少期のころ通ったことがるという奈良県内に伝わる“わらべうた”の保存・普及を中心に運営している奈良市音声館へ計４回実施された。特に登美ヶ丘中学校は、酒井さんの担任の先生だった方が現役で教鞭を取っていらっしゃったこともあり、とても楽しみにして下さっていた。ピアノのハンマーを用いてのピアノの構造のお話や、中学生だったころのお話、ピアニストになろうと思ったきっかけや夢にむかって努力し続けることの大切さ、難しさなどを学生と同じ目線でお話されていた姿が印象的であった。また、ご自身が初めて海外へ演奏旅行として訪れたポーランドでのお話から、ショパンに焦点を当てて、酒井さんの視点でバラード１番をストーリーに見立て、演奏されていた。10分程度の長い曲ではあるが、曲が進むにつれてその世界観に没頭していく姿は学生の後ろ姿から見て取れた。

音声館では、未就学児のお子さんを対象に、プログラムをガラッと変えて、モーツァルトのキラキラ星を取り上げ、お星さまのストーリーを園児たちにお話しを交えて演奏されていた。また、酒井さんが幼少期に大好きだった絵本「わたしのワンピース」を用いて、酒井さん作曲による読み聞かせも行っていた。親しみやすい絵本が音楽付きになることで､園児たちの想像力がより引き立てられていたと思う。

【コンサート】

前述の通り、地元奈良市への帰京をコンセプトにしていた為、コンサートタイトルは、「ただいま！酒井有彩です」となり、クラシックコンサートに興味がない人への認知とホールへ足を運んで頂きたいという願いが込められていた。酒井さんからも、お客様がより楽しんでもらえるように、曲に合わせた照明を使用することや演奏する曲の作曲家の写真を印刷して使用するアイディアを提案して下さった。舞台スタッフの方のご協力もあり、酒井さんのイメージに合った照明が作られ、視覚的にも楽しむことのできるコンサートとなった。また、酒井さんの地元ということで、知人の方なども多くコンサートに足を運んでくださり、アクティビティ先の関係者も来場され、終演後のサイン会は、終始アットホームな雰囲気で行われた。

実施団体：奥出雲町文化協会
実施時期：令和元年10月３日（木）～令和元年10月５日（土）
出演アーティスト：糸賀　修平（テノール）

アクティビティ

タイトル：ようこそ！素敵な歌声の世界へ
期　　日：令和元年10月３日（木）　11：00 ～ 11：45
会　　場：カルチャープラザ仁多　１Ｆスタジオ
参 加 者：公民館館長、主事、文化協会コーラス団体　11名

【公民館館長、主事、文化協会コーラスの方を対象に地元出身者による本物のクラシック音楽に触れる】当初ワークショップに対して、上手に歌わなくてはいけない？何か言わなくてはいけない？等懸念しておられたが、アウトリーチが始まると我が子を見守るように、歌声や糸賀さんの映像を交えた話に感動をしたり、歓声を上げられたりする姿が見られました。

タイトル：ようこそ先輩！素敵な歌声と出会いましょう
期　　日：令和元年10月３日（木）　14：00 ～ 14：45
会　　場：奥出雲町立三成小学校　２Ｆ音楽室
参 加 者：三成小学校　５年生　18名

【５年生を対象とし、地元出身のプロの音楽家による演奏などを身近に触れることで本物の音楽を味わう】生のクラシック音楽（声楽）から、表現の楽しさを体感する。自分たちと同じ小学校で生活をされた糸賀さんの歌声に吸い込まれるように耳を傾け、また糸賀さんの姿を見入る目の輝き､姿がとても印象的でした｡校歌を一緒に歌ってくださると、歌い方を意識してより素敵な歌声で歌おうとする姿が見られました。

タイトル：ようこそ先輩！素敵な歌声との出会いから
期　　日：令和元年10月４日（金）　10：45 ～ 11：35
会　　場：島根県立横田高等学校　　３Ｆ音楽室
参 加 者：２年生（音楽選択）１、２組　13名

【２年生の音楽選択の生徒を対象に地元出身のプロの音楽家の声楽を通して、本物のクラシック音楽を楽しむとともに、キャリア教育に繋げる】映像を交えて『言葉の壁』『夢を叶えることの大切さ』等糸賀さんご自身の経験をもとに、話してくださったことでより親近感を感じ心に響いている様子でした。オペラホールの写真に歓声を上げる姿が印象的でした。

タイトル：ようこそ先輩！素敵な歌声との出会いから
期　　日：令和元年10月４日（金）　14：50 ～ 15：40
会　　場：奥出雲町立仁多中学校　２Ｆ音楽室
参 加 者：３年生　51名

【３年生を対象に地元出身のプロの音楽家による声楽を通して、上質のクラシック音楽の素晴らしさを体感する】合唱コンクールの曲を一緒に歌ってくださったことで、より素敵な歌声で歌おうとする姿が見られました。

コンサート

タイトル：おくかるフェスタオープニングスペシャル　糸賀修平
　　里帰りコンサート
　　～神話の里に響くオペラのうたごえ～
期　　日：令和元年10月５日（土）　18：00開場　18：30開演
会　　場：横田コミュニティセンター　大ホール
参 加 者：297名

【地元出身のプロの音楽家による声楽の魅力と本格的なクラシック音楽を味わう】町民のみなさんと、糸賀さんのキャッチボールが親近感を与え素晴らしいコンサートとなりました。ふるさと奥出雲への想いを語られる糸賀さんの優しさと、奥出雲のホールに響き渡る素晴らしい歌声がみなさんに感動を与えてくださいました。

ホール担当者の意見・評価
奥出雲町文化協会　千田　美保子

①　応募の動機・事業のねらい

「奥出雲町から世界へ」

　地元出身者が世界へ羽ばたき、音楽の世界で活躍されている素晴らしさを広く住民の方々に直に体感していただくことで、夢と希望と活力を育むとともに本町の文化芸術振興と地域活性化を図る。

②　企画のポイント

・地元出身である糸賀さんの魅力、オペラの魅力を直に体感する。
・児童、生徒にとって夢の実現に向けたキャリア教育につなげる。
・糸賀さんの母校等にて実施することで児童生徒、町民の方がより親しみや親近感を感じ感動を得る。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・コンサートでのリハーサルや本番の実施、進行管理、組織についてコーディネーター、地域創造さんにお任せする部分が多くなってしまった。
・アウトリーチのねらいについて、話をしていただいていたのにも関わらず、実際にワークショップが始まると先生方の指導的立場からの言動が見られた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

・コーディネーター、地域創造さんの温かい支えをいただきながら地域に何を発信したいのか、効果的に伝わるような手法について具合的に教えていただきながら実施していった。

⑤　事業を実施しての成果

・アクティビティ先では､素晴らしい先輩の歌声､夢への実現に向けての話を聴くことにより憧れやキャリア教育につながっていった。
・コンサート終演後には「本当によかった。」「素晴らしいコンサートでしたね。」と声をかけて帰ってくださったお客様がたくさんおられた。
・ホール事業への実際の企画、運営に向けての実際の進め方等について具体的に知ることができた。半面、企画側の想いをアーティストにしっかり伝えながらより成果のある事業実施をしていくことの難しさを感じた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

・人員不足・施設の改修

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

　この事業を通して、『入場者数のみでは計り知れない音楽の本質の価値を生み出すためには、ちょっとした気遣いやポイントを意識することが重要』（H29公共ホール音活事業報告書より）とコーディネーターの言葉にありましたが、糸賀さん、中ノ森さんに対するコーディネーターの細部にわたる言葉がけや環境への配慮等にそれを感じ、とても勉強になりました。財政上、今後ますますホール建築は見込めないことが予想されますが、既存の施設でできることを多面的に捉え活かしていきながら、地元出身の素晴らしいアーティスト（様々な分野での）等と町民の方々との繋がりが持てるきっかけづくりをしていきたいと思いました。

コーディネーターレポート
丹羽　徹（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事　事務局長）

出雲大社で有名な出雲、宍道湖に注ぐ斐伊川の最上流に位置する島根県奥出雲町は、旧仁多町と旧横田町が合併して発足した四季折々の美しい自然に彩られた自然豊かな町である。また、松本清張の名作「砂の器」の舞台となった町でもある。日本最古の「たたら製鉄」の発祥の地として、豊かな砂鉄を背景に製鉄技術が経済の繁栄をもたらすとともに、出雲街道の宿場町としても栄えた経済と文化が両輪で発展してきた場所でもある。しかし芸術分野はと言われると、幾分物足りなく映る地域でもある。

そんな奥出雲町に派遣されたアーティストは、テノール歌手の糸賀修平さんだ。実は糸賀さんが奥出雲町の旧仁多町出身ということもあり、糸賀さんにとっては故郷への凱旋公演と言ったところだろう。このような事例は非常に稀で、私が担当した地域では数年前にヴァイオリンの坂口昌優さんの石川県野々市市に次いで２例目である。しかし、坂口さんは地元在住でもあるので、凱旋公演と言った雰囲気では初の事例ではないだろうか。

糸賀さんとは、昨年度の岡山県美作市でご一緒している事から今回は二回目、美作市でのアウトリーチでは、歌手という唯一の「詩」を持つ音楽の特徴を活かし、歌詞とメロディの関係、歌詞があっても異なる言語の感じ方の違い、そもそも歌詞の無いヴォカリーズなど、歌手だからこそできる様々なアプローチにより、声と歌と詩が構成する音楽の魅力を感じ取ってもらう個性あるアウトリーチだった。そのような事も踏まえ、今回は故郷、それも母校へのアウトリーチだ。アーティスト打ち合わせで糸賀さんにお話を聞くと、糸賀さんが初めてプロの声を聞いたのも、歌手を目指すきっかけとなった場所も、音大を目指して放課後日々練習に励んだ場所も、今回訪問する母校なのである。つまりテノール歌手、糸賀修平を形づくった原体験の場所がまさにその音楽室なのだ。このような背景が合致する例こそ非常に稀だ。昨年度のアウトリーチプログラムではなく、奥出雲町出身の糸賀さんにしかできないプログラムが必ずあるはずと、これまでとは全く違うアプローチでのプログラム作りを提案した。

奥出雲町入りした初日、担当者の千田さんも交えて新アウトリーチプログラムのランスルーを実施した。私の感想は「糸賀さんの海外留学漫遊記」のような感想だ。糸賀さんも「伝えたい事モリモリプログラム」と自嘲していたが、それは故郷だからこそ伝えたいメッセージが強すぎたのだろう。関係者全員で意見交換を行い内容の取捨選択等も交えた結果、内容は回を重ねる毎にブラッシュアップされていった。今思えば、結構厳しい指摘もさせていただいたが、糸賀さんのより良いものを届けたいという強い意思が実現したこのプログラムは、当初、故郷だからこそできるプログラムと思っていたが、どこの地域でも実施できる子供達への強いメッセージを含んだどっしりとした内容になったと確信した。最終的なアウトリーチのテーマは「子供たちに夢を与えられるプログラム」。音楽に触れる機会の少ない場所でなぜオペラ歌手になれたのか、自身の経験を交えながら「夢や好きなことを見つけたら、目標を立てて突き進み続けることが大切」等強いメッセージが特徴的だ。最後の中学校でアクティビティ終了後、教室に戻った生徒が糸賀さんの歌い方をまねして声を出していたのが印象的で、ほんの少しでも何か刺激を与えられればと望んでいた事業担当者の千田さんや先生、アーティストの思いが垣間見えた瞬間ではなかっただろうか。アクティビティは、この滞在最終日のコンサート翌日から始まる町内の文化祭が各公民館で催されることもあり、機運醸成も込めた町内にある９つの公民館で日頃から企画運営している職員対象と、糸賀さんご自身が通っていた小中高の各学校で１コマずつの計４回。

最終日のコンサート会場は横田コミュニティセンターで開催。舞台上には反響板もないいわゆる公民館なので、ステージにはオペラの華やかなイメージを多少でも意識して装花を準備する等、可能な限りの舞台をご準備いただいた。タイトルは「里帰りコンサート」と銘打たれ、当初予定していた集客を大幅に上回るもので、同級生から恩師まで来場され、世界の歌から日本の歌、オペラアリア等盛りだくさんの内容に満員の聴衆が故郷の生んだスターに惜しみない拍手喝采を贈って、まさに故郷に錦を飾るも

のとなった。

この環境を１年で終わらせてしまうのは非常にもったいない。

おんかつ事業とは人手と時間がかかるものである。コンサート翌日からの文化祭も千田さんが主担当として従事されていた。今回は周りの職員の方々のサポートもいただき事業を終えることができたが、これが一過性のものであると定着しない。今回の経験を踏まえアウトリーチ活動の意義等を関係者で共有し、一定の理解が生まれる事を期待したいところであるが、人員不足は深刻のようで、今後の取組みに向けては現場に携わる人的な不足についても是非検討いただきたい所である。

実施団体：一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団
実施時期：令和元年10月30日（水）～11月３日（日・祝）
出演アーティスト：中野　翔太（ピアノ）　田中　拓也（サクソフォン）

アクティビティ１

タイトル：クラシック音楽に触れてみよう！
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年10月30日（水）　13：30 ～ 14：15
会　　場：帯広市立広野小学校　体育館
参 加 者：全校児童29名、先生６名

体育館はスペースが広すぎるため、パネルを使用して舞台側に仕切りを作り、反響するようにしました。目の前での生演奏を静かに聴いてくれました。イラストをみながらのアーティストの質問にも積極的に答えてくれていました。最後は、アーティストの近くまで寄り、間近で演奏と二人のテクニックをみんなで鑑賞しました。

アクティビティ２

タイトル：ピアノ＆サクソフォンの調べ　Part1
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年10月30日（水）　15：30 ～ 16：15
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール　舞台上
参 加 者：邦楽関係者　22名

昨年実施した時とアーティストと参加者の場所を入れ替えて実施しました。参加者にピアノの中も覗きながら聴けるように平台を２段組み、その上にイスを置いて座ってもらう形にしました。日頃、クラシックに馴染みのない邦楽の方達も、演奏を真剣に聴いてくださって、「元気をいただきました」「身体で音を感じました」との感想をいただきました。

アクティビティ３

タイトル：クラシック音楽に触れてみよう！
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年10月31日（木）　15：15 ～ 16：00
会　　場：帯広市立緑丘小学校　音楽室
参 加 者：合唱部～ 27名、吹奏楽部～８名、先生４名

３階音楽室で実施。イラストを見ながらのアーティストの質問に、とても積極的に答えてくれたり、サクソフォンのリードの部分に紙を付けて吹き方を見せた時にも「すごい」と真剣に見てくれていました。演奏も静かに聴いて、最後にはアーティストの近くに行って、演奏する指先などを真剣に見ていました。「楽しかった」「すごかった」との感想をいただきました。

アクティビティ４

タイトル：ホールでLIVE☆体験！
　　新進気鋭の演奏家と書のコラボレーション
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年10月31日（木）　18：30 ～ 19：15
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール　舞台上
参 加 者：市内書道教室の代表者と会員　22名

ジャズが好きな先生の教室という情報を踏まえてか、「リベルタンゴ」の迫力のある演奏で始まり、参加者は最初から引き込まれた表情で聴いていました。アーティストのトークにも反応が良く、笑顔で話しを聞いてくれました。アクティビティ終了後、音楽を聴いた気持ちを書に表して参加者全員とアーティストで大きな紙に「心」「音」「遊」「友」「生」「柔」など自由な気持ちを文字にしました。

アクティビティ５

タイトル：クラシック音楽に触れてみよう！
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年11月１日（金）　10：45 ～ 11：30
会　　場：帯広市立川西小学校　音楽室
参 加 者：５・６年生の児童43名、先生３名

イラストを見ながらのアーティストの質問にいろいろな答えを積極的に答えてくれたり、サクソフォンのリードの部分に紙を付けて吹き方を見せた時にも「すごい」と真剣に見てくれていました。アーティストの近くに行って、演奏する指先などを真剣に見ていました。狭い空間で間近で演奏を聴いて、先生も「このような機会はなかなかないので良かったです、感動しました」と言う感想をいただきました。

アクティビティ６

タイトル：ピアノ＆サクソフォンの調べ　Part2
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年11月１日（金）　14：30 ～ 15：15
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール　舞台上
参 加 者：帯広工業高等学校吹奏楽部の先生と生徒　17名

担当の先生より、生徒共々楽しみにしていましたと最初にご挨拶をいただきました。「リベルタンゴ」で迫力のある演奏をした後、「アヴェ・マリア」などしっとりと演奏し、最後まで生徒は真剣に聴いていました。演奏終了後、田中さんが使っている電子楽譜（ipad）に興味を持ち、全員で田中さんに質問をしたり、楽譜の説明を受けていました。地域創造の遠藤会長が視察に来られました。

アクティビティ７

タイトル：ピアノ＆サクソフォンの調べ　Part3
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年11月２日（土）　10：15 ～ 11：00
会　　場：帯広市民文化ホール　第５練習室
参 加 者：市内でピアノを習っている小中学生16名、先生１名

同じピアノ教室に通っている小中学生と先生が参加者して、真剣に二人の演奏を聴いてくれました。ピアノについての説明があったり、イラストを見せて、曲からイメージするのはどれかなど楽しみながら演奏を聴いてもらい、生徒たちも静かに聴いてくれました。先生から「どの曲もテクニックが素晴らしく迫力があった」ととても喜んでいただきました。

アクティビティ８

タイトル：ピアノ＆サクソフォンの調べ　Part4
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年11月２日（土）　19：00 ～ 19：45
会　　場：帯広市民文化ホール　第５練習室
参 加 者：一般のサクソフォン愛好者　15名

サクソフォンを愛好している一般向けのためか、トークは少なめで演奏を中心にしたアクティビティになりました。ピアノソロ、サクソフォンソロでの演奏もあり、田中さんはみんなサクソフォンをやっているということで緊張しますと言っていましたが、素晴らしいテクニックのある演奏を見せてくれました。「こんな贅沢な企画に参加させていただいて良かったです」との声を多数いただきました。

コンサート

タイトル：Premium concert Ⅱ　中野翔太×田中拓也
出 演 者：中野翔太（ピアノ）、田中拓也（サクソフォン）
期　　日：令和元年11月３日（日・祝）
　　14：30分開場　15：00開演
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール（定員：560人）
入場者数：159名

開演直前に、アクティビティの時の写真をプロジェクターで流しました。前半は二人の解説を踏まえながら、クラシックの曲を中心に演奏。トークの時の仲が良い雰囲気がお客様にも伝わったようで、笑いもありました。後半はまた雰囲気が変わるプログラムで、お客様の１曲１曲終わった後の拍手がとても大きく感じられ、感動が伝わっていると確信しました。公演終了後にはCD販売とサイン会があり、多くのお客様に買っていただけたことも演奏の内容が良かったからではないかと思います。

ホール担当者の意見・評価
帯広市民文化ホール文化振興部副主事　菊地　薫

①　応募の動機・事業のねらい

本年度、公共ホール音楽活性化事業の実施に際し、全体研修、個別研修と進めるうちに、地域交流プログラムの可能性の大きさを感じるようになりました。小中高生から大人までの文化、サークル活動が活発な地域ではありますが、市民の活動が公共ホールの活性化に繋がるように、今回の企画ノウハウを次回にも生かし、更に発展した事業を実施したいと考えます。

②　企画のポイント

本年度の地域交流プログラムは、大人向けのアクティビティを中心に実施を考えてコンサートの動員に繋がるように考えたいと思いましたが、やはり感性豊かな子供たちを対象にも実施したいと考えました。市内の小学校にこの事業の趣旨を伝えて、賛同していただける学校で実施したいと考えました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティとコンサートの日程を決めてから、どの日にどんなアクティビティを実施するのがいいのかパズルを埋めるような感じで考え進めました。まずは学校へのアプローチをしましたが、日程的に学芸会などと重なっている学校が多く、企画の趣旨は理解して頂けても日程が合わなくて決めるまでに苦労をしました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

音楽に日頃から理解のあるへき地の学校に向けて、事業の趣旨とアーティストの紹介を兼ねて資料を作り、FAXやメールで送って子どもたちに素晴らしい音楽を届けたいという気持ちを話したところ、日程の調整もしてくれたり、前向きに考えてくれました。プロの音楽を無料で、学校まで来てくれるという事が実施にむけてのポイントになったと思います。

⑤　事業を実施しての成果

昨年も感じた事ですが、アーティストサイドでこちらが企画したそれぞれの対象の方達に合わせたプログラムを考えて下さって、８カ所それぞれの工夫が見られたのが良かったと思います。今回のアーティストに関しては演奏テクニックは素晴らしいと感じていましたので、それをどの場所でも発揮して頂けたと思っています。それが参加していただいた方にしっかりと伝わっていたと思います。今回の参加者の満足度は感想を聞いた限りではとても高いものだと感じています。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

昨年は、出来る限りの集客をと考えて、コンサート事前のチケット販売数が少なかったので関係各所に招待券を出してきていただいたのですが、今回は券売を伸ばしたいと考えてあえて招待券は当初の予定通りにしか出しませんでした。アクティビティに参加した方にも、出来るだけチケットを買ってきてほしいと思ったのですが、思った通りには伸びず、その分集客数も伸びませんでした。アクティビティで満足感があったこと、日程的に文化の日でいろいろな行事と重なってしまったことが思うように集客が伸びなかった原因の一つかなと思います。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティの参加者、コンサートに来た方のご意見では、本当に演奏が素晴らしかったという事、

聴けて良かったという事、また来たら観たいというご意見も多かったことを踏まえ、良い音楽というものは年齢関係なく、誰でも感じることが出来、アクティビティを実施して実際に演奏を聴いてもらうことがまた、ホールを身近に感じていただけるという事と足を運んでもらえる事にも繋がるのではないかと考えます。

コーディネーターレポート
丹羽　徹（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事　事務局長）

今年のNHKによる前期の連続テレビ小説「なつぞら」の舞台となった北海道帯広市。街中が「なつぞら」のPRに包まれた中秋の帯広、晴れ渡った高い空と丘へ連なる黄金色に染まった大地は、おそらく北海道の中でも一番北海道らしさを感じられる美しい都市ではないだろうか。そんな美しい時期に今年のおんかつ発展継続事業は開催された。

昨年、おんかつ事業に初めて取り組んだ帯広市の文化ホールは、自主事業も積極的に展開され、帯響による学校へのアウトリーチも取り組んでいる。又、市民オペラやサークル活動が多種多様に実施されている十勝管内の文化の中心的な存在である。おんかつに応募した動機は「文化ホールの活動を効果的に発信し、地域の方々との密な交流により文化ホールに足運んでいただく仕組作りをしてゆきたい」との考えから、昨年度は小学校二校（従来より実施しているアウトリーチとは別のノウハウの習得）と、大人対象（活発なサークル活動との連携）のアウトリーチだった。その実績を今年は更に拡充し今回のアウトリーチ先は小学校３校（協力体制を整え期待感を持って受け入れしてくれる学校）に高校の吹奏楽部を加えた計４校と、大人対象（書道サークルと邦楽サークル、地域の楽器愛好者グループよりピアノとサックス）の４つだ。昨年度をベースとしつつ、発展継続事業の８つのアウトリーチを上手く活用して更にパワーアップした対象となった。

今回帯広市さんが選んだアーティストは、ピアノの中野翔太さんとサックスの田中拓也さんによるデュオ。昨年度のおんかつ全体研修会で担当者によるネットワークが出来た静岡県菊川市さんが昨年度選んだデュオである。そのお二人によるアウトリーチのテーマは「創造力の発揮と自由な感性」だ。学校対象のアウトリーチよりお二人の個性が表れた内容をご紹介したい。

中野さんは、音楽を聴いて、そのイメージに合った画像を選んでその感想を聞くというもの。これを何回か繰返すのだが音楽は変わるが画像は変わらない、ここがこの内容のポイント。同じ画像でも、音楽によって選ぶポイントが全く異なる事である。耳で音楽を聞いてはいるが、心で音楽を感じ取っているから選ぶ画像が違うのだ。つまり音楽は心で聞いているという音楽の持つ本質的なメッセージがそこにある。

田中さんは音楽を聞いて物語を想像するプログラム。参加者を複数のグループに分けて、それぞれのグループ毎に音楽の一部分を聞かせて感じたキーワードを並べて物語にする。決まりごとは、主人公がピエロである事のみ。これをそれぞれのグループ毎に行い、一つの物語を完成させる。正直、無理な繋がりや、あり得ないストーリーも生み出されるのだが、子供達は自分の感じたキーワードが必ず物語に組み入れられており、想像すると言う行為を共同で体験する事に強い関心と興味を持っているのだ。これは様々なストーリーが作れるのもポイントだが、子供達の突拍子の無いあらゆるキーワードを一つのストーリーとして完成する事が出来る田中さんの稀有な才能だろう。

大人対象のアウトリーチでは、今述べた想像型のコーナーは行わずにコンサートの曲目から抜粋した鑑賞に主軸を置いたプログラムに差し替えて行ったのだが、書道サークルでの出来事が非常に印象的だった。鑑賞後に会場を移して参加者に感想を一文字の書で表現していただき、その様子を見たアーティストも書で一文字を書くと言うコーナーを設定したのだが、参加者の表現する様々な１文字が、非常に多種多様な視点から捉えられており興味深かった。

最終日のコンサートは「プロによるホールでの本格的な演奏」が、おんかつの醍醐味でもあるのだか、８回と言うアウトリーチを重ね、長期間濃密なスケジュールを一緒に過ごしたアーティストだからこそ表現できる、非常に質の高い芸術的な密度の濃い秀逸な舞台が展開された。

昨年に引き続き事業をご担当された文化ホールの川上さんと菊地さんには、四日間８回のアウトリーチとコンサートと、約１週間の事業を設計から実施まで、様々なフォロー体制を整えていただいた事に

心から感謝を申し上げたい。実は今回、事前の下見時に学校に訪問する校門の前で「もらい事故」に会ってしまった。幸い全員怪我等は無かったのが不幸中の幸いではあるが、帯広市さんのご配慮により本番時のすべての移動はタクシーとなってしまった。おんかつでは移動中の車内で様々なダメ出し等のざっくばらんなお話ができるのも特徴の一つではあるが、そんな時間を共有する事が出来なかった事が私としては少し寂しい気持ちではあったが、今年は２年目と言う事もあり、松井部長や宮浦課長には全てのアウトリーチに同行いただくと共に、アウトリーチの内容をアーティストとスタッフで協議して作り上げるランスルーを体験していただいた事は、今後の事業継続に向けて非常に頼もしく感じると共に、今後の事業継続に向けて組織全体での取り組みができるような体制を整えていただけるものと期待している。

実施団体：インガットホール活用実行委員会
実施時期：令和２年２月４日（火）～令和２年２月８日（土）
出演アーティスト：酒井　有彩（ピアノ）

アクティビティ１

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月４日（火）　10：50 ～ 11：35
会　　場：城島小学校　音楽室
参 加 者：５年生　44名

昨年のアウトリーチをご覧になられた校長先生から、期待を込めた挨拶を頂いて、酒井さんが入場し、「トルコ行進曲」で一気に子どもの心をつかんだ。会場はフラットで、酒井さんは椅子に座った子どもたちに目線を合わせて「エオリアンパープ」のイメージについて質問するなど、距離が近まった。帰りのメッセージ入りのチラシを子どもたちもしっかり目を通して受け取っていた。なお、両側に窓がある会場だったため、生後側のカーテンをしめて、まぶしさにも配慮した。

アクティビティ２

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月４日（火）　14：05 ～ 14：50
会　　場：青木小学校　音楽室
参 加 者：５年生　16名

今回一番人数が少なく、オルゴールを使った反響板の実験のときにピアノの下や周りで子どもたちの移動が活発であった。少人数でも気後れせずに「シンデレラ」についての質問や意見も多くみられた。初めてアウトリーチを体験する教頭先生も生徒と一緒に音楽の世界を体験され、来年の実施に意欲を持たれたようだった。

アクティビティ３

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月５日（水）　10：40 ～ 11：25
会　　場：犬塚小学校　音楽室
参 加 者：５年生　65名

大人数用に初めて「ショパン」をテーマに、英雄ポロネーズとノクターンを入れたプログラムで実施した。椅子を使わず、生徒の間に通路を設けて着座してもらうことで、オープニングの酒井さんの通路や意見交換時の動線を確保し、距離を縮めるよう意識した。上下式の黒板にプログラムを書き、後方の児童も見やすくした。

アクティビティ４

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月５日（水）　14：10 ～ 14：55
会　　場：安武小学校　音楽室
参 加 者：６年生　52名

今回唯一のアップライトピアノ演奏のため、内部構造を見せることと、響きの両立をはかるため、途中でスタッフが板を外すようにした。内部のピアノ線を見た生徒たちからは驚きの声があがり、我先にとピアノの周りに集まってもらうことができた。

西日が強く、カーテン色（オレンジ）で会場が夕方のような雰囲気になったが、教室の照明などで影響が少なくなるようにした。

アクティビティ５

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月６日（木）　10：35 ～ 11：20
会　　場：下田小学校　音楽室
参 加 者：５・６年生　34名　（下田小学校・浮島小学校合同）

児童の約半数は昨年に続いての参加となり、オルゴールを使った実験やピアノ周りで自由に演奏を聴く場面では、場所の譲り合いが行われ、濃い内容での実施となった。また、終了後の感想では、「自由に想像することで音楽を楽しめた」などの意見が出されたほか、終了後は「ぜひコンサートで聞きたい」との声も聞かれ、充実したプログラムとなった。

アクティビティ６

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月６日（木）　13：30 ～ 14：15
会　　場：西牟田小学校　音楽室
参 加 者：５年生　48名

活発な児童が多く、演奏を自由な場所で聴く際は、ピアノ周りだけではなく、音楽室のいろいろな場所で楽しみ、「場所によって聴こえる音が違う」などの意見があった。また、ピアノ素材や構造の説明の場面では、酒井さんの問いかけやハンマーの実験で積極的な態度が見られた。最後に児童から、「音や鍵盤の微妙な強弱が興味深かった」との感想が述べられた。

アクティビティ７

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月７日（金）　10：40 ～ 11：25
会　　場：三潴小学校　音楽室
参 加 者：５年生　69名

最大数の人数での実施となり、ピアニストとの距離に悩んだが、「英雄ポロネーズ」演奏中に近くで聞いてもらうことで、移動時間が長くなり、児童の回遊性の確保ができた。また、犬塚小学校と同じ「ショパン」のテーマだったが、メリハリをつけるため曲の順番を変えたことで、活発な意見とまとまりの両立がかなった。

アクティビティ８

タイトル：小学生に贈る音楽とふれあいのひととき
～ピアノを学び、曲をイメージしてみよう～
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月７日（金）　14：10 ～ 14：55
会　　場：江上小学校　音楽室
参 加 者：５年生　30名

担任の先生がコンサートチケットを先に購入いただくほど、熱心なクラスで、一番意見が多くだされた。若い先生で生徒との距離も近く、先生の勢いに子どもたちもすぐピアノになじんでいた。児童を主役にするため、先生には途中から後方に下がっていただき、より集中力が増した。

終了後はサインや握手を求める児童の列ができた。

コンサート

タイトル：酒井有彩コンサート　ピアノで巡る舞曲の世界
出 演 者：酒井有彩
期　　日：令和２年２月８日（土）　14：00 ～ 15：45
会　　場：久留米市城島総合文化センター　インガットホール
（定員：568人）
入場者数：237名

来場者の多くに親しみがある「トルコ行進曲」のほか、モーツァルト、ショパン、プロコフィエフ、ラヴェル作曲の舞曲をテーマとしたコンサートを実施した。

演奏曲の前には曲目解説や作曲家の想いなどが語られ、来場者から高い評価を得ることができた。また、終演後、CD販売とサイン会を行い、出演者と来場者の交流があり、「素晴らしかった」、「また是非聴きたい」など、充実したコンサートであったことを実感できた。

ホール担当者の意見・評価
久留米市城島総合支所文化スポーツ課　乙丸　法道

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールは年間を通じ、音楽や演劇などの事業を多く実施しているが、来場者の年齢構成は60歳以上が多数を占めており、幅広い年代層の地域住民に文化芸術鑑賞機会を提供することが大きな課題であった。昨年度は、通常プログラムを実施し、アクティビティ参加児童や実施校から高い評価を得ることができ、少数ではあったが、参加児童のコンサート来場も実現した。

この経過を踏まえ、事業を継続実施することで、更に地域の文化芸術の振興を目指したもの。

②　企画のポイント

前年度に続く発展継続事業として、以下の３点のコンセプトに基づき企画した。

①音楽をまちの文化として定着を図る、②文化芸術が持つ「人の心と生活を豊かにしまちに活力を与える力」を引き出す、③久留米市西エリアの中核施設として文化芸術政策を推進する。

また、上記コンセプトを踏まえ、また地域創造による支援終了後も継続実施が可能となる事業内容を目指し、実施場所との調整を行った。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

前述したコンセプトに基づく事業内容で、アウトリーチ実施後は訪問先から高い評価を受けるものの、事業総括としてのホールコンサートの来場にはなかなか結びつかない問題があった。

また、前年度からアクティビティ実施が４回増えたが、受け入れを依頼する際に事業内容を理解していただくことに苦労した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

前年度はアクティビティ参加児童へコンサートチラシの配布を行ったが、今年度は出演アーティスト直筆メッセージ（複写）をコンサートチラシと一緒に配布した結果、来場者増に繋げることができた。

受け入れ先調整では、前年度事業をまとめた事業概要資料等を用いることで、事業内容に賛同を得ることができた。

⑤　事業を実施しての成果

文化芸術は「人の心と生活を豊かにし、まちに活力を与える」力を持っており、今回の事業を通じ、音楽がまちの文化として定着することを目指してきた。当センターが実施するホールコンサートでは、出演者の知名度が来場者数に影響を与えることが多く、来場者の多くが60歳以上を占めてきた。今回は、前年度からのコンセプトに基づくアクティビティ実施場所の選定や広報の強化を行った結果、全年齢層で幅広い来場につながり、実施２年目としての事業目的は達成することができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

前年度から続く事業となり、事業実施に向けた準備も順調に進んだが、受け入れ先調整の結果、アクティビティ参加者数が50名を超える回が発生した。アクティビティ実施で大人数の回はアーティストやホールが求める事業効果が十分に発揮できなかったのではないかと思う。

今後の事業検討では、この反省を踏まえ受け入れ先調整を行い、事業効果の最大化を目指したい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

当センターは開館から22年が経過し、これまでに様々な主催事業を実施してきたが、まだ地域住民の中にはホール鑑賞を体験したことがない方も多く存在する。これまで来場経験がない方に対して来場を促すことは容易ではなく、地域内で真の文化芸術振興に及んでいない。今回の事業を通じ、明確なコンセプトを持ち、継続的なアウトリーチ実施は地域内での文化芸術振興に重要な意義を持つと感じた。今後も継続的な実施により、更なる文化芸術の振興に取り組みたい。

コーディネーターレポート
山本　若子（有限会社N.A.T取締役）

発展継続事業の新規募集は行わないとのことですが、アウトリーチ事業を続けようとされている方々にとって、このありようはたくさんのヒントがあるように思います。ここでは2019年度に「音楽活性化事業（おんかつ）」を行い、2020年度より「音楽活性化発展継続事業」に取り組んでおられる久留米市についてご紹介します。

久留米市は福岡県内３番目の都市であり、人口30万人を超える大きな町ですが、2019年度に行ったおんかつでは、2005年に久留米市と合併した城島町を中心に５小学校（一箇所は２校合同のため４コマ）でアウトリーチを実施しました。続く発展継続事業では、同じ時期に久留米市と合併した旧三潴町（元々、城島町は三潴郡に属した町であった歴史があります）に範囲を少し広げ、前年度実施の５校を含む９小学校（コマ数は８）で行いました。

継続して同じ小学校を訪れたことで、先生方との距離感が縮まるのはもちろんのこと、前回の率直な感想や改善点など、得難いご意見を伺えました。実施直後にも感想をいただけることはあるのですが、高揚感もあり良い点のみをお伝え下さいます。それは大変ありがたく嬉しいことなのですが、１年経過したご意見は、他の先生方からの声も踏襲された忌憚のないご意見であることが多く、それはプログラム作りに生かせたり、制作面での不手際などの改善につながります。また、その声を反映できれば学校との信頼関係をより強固にでき、ホールからの提案だけでなく学校からの意見を汲み入れたアウトリーチプログラムを作り上げられ、理想的な関係性を築いていくことが可能になります。

関係性をうまく築ける一方、多くの方が危惧されているであろう課題、継続にあたってのノウハウの蓄積と継承についてはどのように克服していけばよいのか。

久留米市城島町では、奇をてらわずにベーシックなスタイルを確率しようと試みられています。例えばアウトリーチの対象者は市内（城島地区を中心に）小学校５年生とし、ホールで行うコンサート内容についてはテーマ性は設定するもののあくまで音楽的カテゴリーの範囲（今回は「舞曲」）で設定したり、直前にオーケストラでモーツァルトの「トルコ行進曲」が演奏される機会があったため、おんかつ発展継続事業においても同曲をオリジナルであるピアノソロでも聴いてもらえるよう、アーティストに演奏をリクエストするなどして、広報手段も音楽的な素材の中でお客様の興味・関心を高めるような工夫をされていました。凝った企画や演出にエネルギーを注ぐのではなく、中期的な未来を見据え、担当者が変わったとしても引き継いでいけるよう普遍性に重きを置いて事業を進められています。

来年度についてもすでに事業計画が立てられており、来年度も実施が決まっている中での現場は、双方が来年度をふまえつつ現状をとらえることができる非常に理想的な仕組みとなっていました。

また、アーティストが現地入りしてからのチケット販売の伸びも目を見張るものがあり、このことは学校との密な連携や会場となる教室の雰囲気づくりなど、子どもたちとアーティストとが出会う環境を整えたからこその目に見える成果となりました。継続・継承のための仕組みづくりとともに、これらの仕組みづくりの礎となる本質を見据えながら挑んでいっていただきたく思います。

２年目以降はコーディネーター派遣が必須ではないのでアーティスト（マネジメント）との直接のやりとりとなります。アウトリーチを行う上でアーティストに伝えなければならない情報、伝えておいたほうがよい情報、或いはあえて伝えないでおく情報等々、どのようにすれば子どもたちひいては学校とアーティストの関係性を良いものにすることができるのか、良い関係とはどういうものか、ひとつひとつの現場から感じ取りながら、確立して欲しく思います。これらは仕組みではなく、経験からくるセンスであり個人に備わるノウハウになる部分も大きいのですが、それらの根底にある、アーティストが伝えようとしていることが伝わるようにするにはどうすればよいのか、子どもたちの反応がアーティストに届くようにするには... といった、普遍性の根底にある本質を伝えていくことで、形骸化してしまうことのない継続を目指して欲しいと思います。

実施団体：公益財団法人佐賀市文化振興財団
実施時期：令和元年９月17日（火）～令和元年９月21日（土）
出演アーティスト：岡田　奏（ピアノ）

アクティビティ１

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　本庄小学校６年１組
　　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月17日（火）　11：10 ～ 11：55
会　　場：佐賀市立本庄小学校　音楽室
参 加 者：６年生　38名

アクティビティ初回は小学６年生を対象に実施。まずシューマンが未来の妻、クララに捧げた「献呈」を解説無しで演奏し、子どもたちにどのような状況でこの曲がかかれたか質問。「楽しいとき」「幸せなとき」など素直な意見が出されたのち、プロポーズの曲だったことを紹介。子どもたちも納得の様子だった。クラシック音楽も作曲者の気持ちが込められてつくられたことを理解して聴けば、より心に入っていきやすくなることを理解してもらう良い機会となった。

また、このアクティビティで音楽の印象を色で表現するワークショップを実施。コーディネーターの花田さん、地域創造の佐藤さんと協議した結果、画用紙にスプレーのりを吹きかけ、それに予めカットしたカラフルな折り紙を子どもたちに貼りつけてもらったが、特別時間を取ることなくスムーズに実施出来た。アクティビティ終了後は６年生児童と給食交流を行った。

アクティビティ２

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　本庄小学校６年２組
　　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月18日（水）　13：40 ～ 14：25
会　　場：本庄小学校　音楽室
参 加 者：６年生　37名

ひきつづき６年生を対象に実施。ショパンの「革命」では、祖国ポーランドが戦争に敗れ、悲しみと怒りの中で曲を書いたショパンの気持ちになって演奏を聴いてみようと促した。作曲者への共感がクラシック音楽に鑑賞者の心を近づけることを改めて実感した。

アクティビティ３

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　西川副小学校　３年松組・竹組
　　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月18日（水）　10：25 ～ 11：10
会　　場：西川副小学校　音楽室
参 加 者：３年生　松組、竹組　49名

佐賀市南部の小規模校で、３年生２クラスを対象に実施。当初、50名近い児童が最後まで集中して聴いてもらえるか不安だったが、世界地図をつかったショパンの祖国ポーランドの位置当てクイズや、色紙を使ったワークショップなどで、子どもたちを最後まで飽きさせずに楽しいアクティビティを実施することが出来た。地域創造の児玉真氏が視察で同行した。

アクティビティ４

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　佐賀大学教育学部附属小学校
　　５年１組　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月18日（水）　14：05 ～ 14：50
会　　場：佐賀大学教育学部附属小学校　音楽室
参 加 者：５年生　34名

ここから明日にかけて、佐賀大学附属小学校で３回にわたり実施。教育熱心な保護者に支持されている学校だけにピアノを習っている児童も多く、最後まで集中力を切らさず参加してくれた。岡田さんはここで自分が中学卒業してすぐにピアノの勉強のためにパリにわたったこと、ピアノに対する情熱がいかに大きかったことを子どもたちに述べ、あきらめずに最後まで努力することが自分の夢を実現させる方法であることを伝えた。そののち、子どもたちの夢を発表させ、応援のエールを送った。このアクティビティまで児玉真氏が視察。

アクティビティ５

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　佐賀大学教育学部附属小学校
　　５年２組　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月19日（木）　10：40 ～ 11：25
会　　場：佐賀大学教育学部附属小学校　音楽室
参 加 者：５年生　32名

シューベルトのソナタ第13番はタイトルがついていないが、曲想の変化が多く、時間が経つにつれ、いろいろな情景が浮かび上がってくる。鑑賞の注意点としてその変化を楽しんで曲を聴いてもらう事を伝え、演奏を聞いてもらったが、演奏後に感想を聴いたところ、お花畑や晴れた空などいろいろなイメージを伝えてくれた。クラシック音楽はその楽しみ方さえわかれば一生の宝物になると言うのが私の持論であるが、このことをより強く再確認できた。城島インガットホールの担当者も視察で参加。

アクティビティ６

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　佐賀大学教育学部附属小学校
　　５年３組　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月19日（木）　14：05 ～ 14：50
会　　場：佐賀大学教育学部附属小学校　音楽室
参 加 者：５年生　34名

附属小学校での最後のアクティビティ。ここから絵の印象を色で表現するワークショップの題材をラヴェルの「水の戯れ」からドビュッシーの「水の反映」に変更。出来上がった作品も心なしかラヴェルよりも淡い色彩になったように感じられた。附属小学校は８月末の水害で大きな被害を受け、予定していた感想画の提出もままならなかったが、そんな中でもこの事業を受入れてもらい、校長先生以下のご厚意に感謝しています。

アクティビティ７

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　南川副小学校６年１組　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月20日（金）　11：35 ～ 12：20
会　　場：南川副小学校　音楽室
参 加 者：６年生　28名

有明海にもほど近い郊外の小学校、６年生と５年生を対象に実施したが、先に６年生のアクティビティを実施。これまでの受け入れ先で最も少人数で、生徒との距離も近く、より音楽が伝わりやすい環境で実施出来た。来年卒業を迎える６年生への記念で給食交流も実施。

アクティビティ８

タイトル：音楽届け隊　岡田奏　南川副小学校６年１組
　　ピアノコンサート
出 演 者：岡田奏
期　　日：令和元年９月20日（金）　14：10 ～ 14：55
会　　場：南川副小学校　音楽室
参 加 者：５年生　34名

アクティビティ終盤になるにつれ岡田さんの進行も板についてきた。子どもたちが書いてくれたアンケートから「自分の夢をあきらめずに頑張ることの大事さ」を学んだという意見も有り、この事業は音楽の楽しみ方を伝えるだけでなく、アーティストの演奏や人となりに触れることで、子どもたちに人生の目的を持たせ、これからどう生きていくかという考えを持たせる効果も有ると感じた。最後に実施の機会を与えていただいた地域創造の各位に感謝したい。

コンサート

タイトル：よか音(ね)コンサート　in　ひがしよか　～ピアノで
　　描く水のいろ、水のおと～岡田奏　ピアノ・リサイタル
出 演 者：岡田　奏
期　　日：令和元年９月21日（土）　14：00開演
会　　場：佐賀市立東与賀文化ホール　ホール（定員：500人）
入場者数：215名

岡田奏さんが最も得意とするフランス音楽を特集。当初はフランスを代表する４人の作曲家の代表作を取り上げる予定であったが、コーディネーターから専門的になり難しく感じると指摘を受けたため、再検討した。演奏曲目の中で水をタイトルにした楽曲がいくつかあったため、水をひとつのテーマとして選び、作曲家による表現の違いを楽しんでいただくことを目的に、聴衆がイメージをふくらませやすくなるよう「ピアノで描く水のいろ、水のおと」とタイトルを付け実施。また、音楽と絵画を結びつけることを目指し、アクティビティに参加した児童に事前に岡田さんの演奏するドビュッシー「月の光」のCDを聴いてもらい、感想画を依頼し、それをホワイエで展示した。また、その中から岡田さんが選んだ絵を月の光の演奏にあわせ、プロジェクターで投影した。コンサート来場者からも大変ユニークな試みであると良い評価を頂くことが出来た。また､特筆したいのが､アクティビティを受けた子どもたちがコンサートに多数来場してくれたことであった。いままでこれほど多くの子どもたちが来場する事はなかったが、アクティビティで多くの事を感じ、岡田奏の音楽をもっと聞きたいと子どもたちが思ってくれた結果であると考えている。本当に良いコンサートが開催できたと今振り返って感じています。

ホール担当者の意見・評価
東与賀文化ホール　中野　弘文

①　応募の動機・事業のねらい

アーティストの知名度に頼らず、当ホールでシリーズものとして続けていけるクラシック音楽コンサートを企画することを狙い応募した。当初は一人の作曲家にスポットを当て、その作品や作曲家の生きざまなどを通じて、まずは作曲家の人となりに興味を持ってもらい、それから音楽にシフトしていくような企画を考えていたが、アーティスト・ファーストで岡田さんの得意とする演目をやってもらうことが、良いコンサートにする最良の方法であると考えなおし、岡田さんが得意とするフランス音楽でのプログラムとした。

また、アクティビティは当財団でも実施しているが、出前コンサートの域から脱せない事業も多く、改めてコーディネーターのアドバイスを受けながら質の高いアクティビティを企画してみたかったことも応募する大きな動機となった。

②　企画のポイント

ドビュッシー、ラベル、プーランク、サティというフランスを代表する４人の作曲家を特集し、それぞれの作品から作曲家の個性を感じてもらい、同じフランス音楽にも多様性があることを紹介したかった。ただクラシックビギナーの聴衆には伝りにくいと考えていたところ、プログラムに「水の戯れ」「水の反映」「水の精（オンディーヌ）」など水にまつわる曲が含まれていたため、「水」というキーワードをクローズアップし「ピアノが描く水のいろ、水のおと」とし、チラシ等印刷物にも水のイメージを反映させたことで、独自性を出した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当ホールが最近までクラシック音楽の演奏会が開催されておらず、ホールのファシリティやステイタスも佐賀市文化会館に比較し高いとは言えないため、集客には不安があった。また、アクティビティ参加者をいかにしてコンサートに足を運んでもらうかを計画することも検討しなければならなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コンサート集客には、岡田さんを支援する地元のファンの力をお借りし、SNSなどを使い、広範囲に宣伝をした結果、200名の観客を集めることが出来た。これは今まで実施したクラシックコンサートの集客数より好調で、まずまずの結果であった。また、アクティビティに参加する児童に、演奏を聴いた感想を絵にして貰う事を学校に依頼し、４校中３校（１校は水害の影響で辞退）に受け入れていただき、その絵をロビーで展示した。その事も影響し、コンサートの子ども連れの観客は通常のクラシック公演に比べ多かった。

⑤　事業を実施しての成果

素晴らしい演奏と演奏プログラムに加え、絵と演奏のコラボなども評判が良く、充実したコンサートが実施出来た。また、今までの経験上、アクティビティがコンサートの集客につながる例は少なかったが、今回は例外的に子どもたちの参加が多かった。子どもたちが書いた絵を掲示したことも理由のひとつではあったかもしれないが、一番大きな理由はアクティビティを通じてアーティストが子どもたちの心をつかんだことだと思う。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回は岡田さんの地元支援者の協力も有り、チケット販売は他のクラシック公演と比較して好調であった。事業を進めるうえで、地元の応援団と強いつながりを持つことが大切だと感じた。アクティビティ受け入れ先などおんかつの趣旨を理解してくれる支援者を増やしていく必要を感じた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

当ホールは佐賀市郊外にあり、周辺は農業・漁業等の第一次産業を営む家庭が多く、そのため本格的なクラシック音楽は受け入れられるのか心配であったが、アンケートを見る限り取り越し苦労であったと感じる。観客の「うけ」を気にして無難なプログラムを選ぶのではなく、地域住民の感性を信じ、アーティストが最も伝えたいと思うプログラムを取り上げることが、結果的に地域文化の底上げにつながると感じた。

コーディネーターレポート
花田　和加子（keynote代表、ヴァイオリニスト）

佐賀市のおんかつ発展継続事業が実施された「佐賀市立東与賀文化ホール」は、2007年に平成の大合併で佐賀市に組み入れられた旧東与賀町のホールです。以来、10年以上に渡って抱えてきた大きな課題がありました。

その課題とは、合併後の佐賀市内に於けるホールの位置づけです。佐賀市には、佐賀市文化会館と美術館ホール（佐賀県立美術館内）という２つのホールがあり、どちらも市民の間では「本格的なクラシック公演を実施しているホール」という認識が広く行き渡っています。かたや旧東与賀町時代のホールはといえば、多目的なスペースであり、「カラオケ用のホール」と見られていた存在でした。「佐賀市立東与賀文化ホール」として新しく生まれ変わったホールを既存の２つのホールに対してどう差別化していくか、佐賀市民（主に東与賀地域の）の中に定着しているカラオケ・ホールというイメージを払拭し、いかに音楽ホールへと変貌させていくかがおんかつ一年目の2018年の課題でした。

東与賀文化ホールは、多目的ホールでありながら本格的なクラシックの公演も十分行える音響や設備の整ったホールでした。その事実を地域住民に知ってもらうことと文化会館や美術館ホールではやっていない（聴けない）公演を、ということでたどり着いたのが「よか音（ね）コンサート in ひがしよか」企画でした。クラシック音楽に興味はあるが、文化会館等の公演は敷居が高くて行けないと感じる市民に、クラシック入門編的な、わかりやすく親しみやすい（が、演目は本格的なクラシックの作品）公演を提供することで、ホールのイメージの刷新と他の既存施設との住み分け（差別化）をはかるというのがその意図で、2018年はアーバンサクソフォンカルテットがその任にあたりました。

その方針を継ぎ、今年はピアニストの岡田奏さんがアーティストに選ばれました。アクティビティとコンサートの共通テーマとして、岡田さんが得意とするフランス印象派のピアノ作品に焦点を当てることで、ピアノの魅力（ピアノという楽器が持っている表現の可能性）を紹介し、ピアノの名曲に親しみを抱いてもらうことを目指しました。ピアノはおそらくクラシック楽器の中では最も認知度の高い楽器でしょう。誰もが知っている楽器ですが、フランス印象派の作品を通してピアノの持つ音色のバラエティやドラマチックな表現力に注目してもらうことで、新たな楽器の魅力や表現力の可能性に気付いてもらい、強いてはさらにその先にあるコンサート（演奏）を聴くということはどういうことなのか（作曲家の存在、演奏者の役割、音を通して伝える・伝わるもの等）の発見に導いていくことが狙いでした。

昨年のアクティビティはまずホール近隣の施設にアプローチするということで、ホール周辺の小学校や幼稚園、福祉施設で行いましたが、今年は発展継続事業ということもあり、８回に増えたアクティビティの対象を東与賀地域全域に広げ、以下の小学校で実施しました。

・本庄小学校６年生１組、２組
・西川副小学校３年生（２クラス合同）
・佐賀大学附属小学校５年生１組、２組、３組
・南川副小学校５年生、６年生

子供たちには事前に岡田さんからの手紙と一緒に岡田さんの演奏したドビュッシーの『月の光』の録音を届け、録音を聴きながら思い浮かんだ光景を絵に描いてもらいました（佐賀大学附属小学校のみ、集中豪雨の影響を受けて時間が取れず絵を描いてもらうことができませんでした）。また、実際のアクティビティの中でも、岡田さんの演奏を聴きながら子供達に選んでもらった色の色紙を用いてクラス毎に切り絵を作ってもらいました。こうした音楽を聴きながら色や景色を思い浮かべたりストーリーを作るという行いを通して、聴くという受動的な姿勢だけでなく、能動的な音楽の楽しみ方の方法を体験し

てもらいました。子供たちからは､我々の想像をはるかに超えるバラエティ豊かな絵が集まり（全てホールのロビーに展示しました）、子供たちの絵のおかげでホールのロビーがとても華やかな楽しい雰囲気になりました｡岡田さんに選んでもらった一部の作品は舞台上のスクリーンにプロジェクターで投影し、コンサートの中で岡田さんの生演奏の『月の光』と一緒に楽しんでもらいました。

コンサートの内容については、当初岡田さんとホール担当者の間のコミュニケーションがうまく取れていなかったためにアーティストが現地入りをしてからの調整が大変でしたが、最終的には当初の趣旨に沿った内容の公演が作れたのではないかと思っています。印象派時代のピアノ作品を集めた今回の公演では、ありがちな音楽史（印象派絵画からの影響など）的な「解説」重視のアプローチではなく、あくまでも、その日、舞台上で演奏家がピアノという楽器を使って表現するものを聴衆がどう感じるか・受け取るかという個々人の“体験”に重点を置いた内容にしたことが公演の成功のカギになったと思います。音楽史的な知識の披露ではなく、作曲家や演奏家が作品の中に籠めた意図を言葉ではなく“音”を介して感じ取るという、まさにホールでの生演奏を聴くことでしか得られない貴重な体験を味わってもらえたのでは思っています。

たった一度の公演で東与賀文化ホールの問題が解決したとはまさか思いませんが、表現者としての演奏者が舞台上で音に込めて放つ様々なメッセージを肌で感じ取る「コンサート体験」が、あの日、ホールに足を運んで下さった来場者に対して、小さいが確実な「変化」の下地となる種まきとなったのではないかと思います。そして、今回の経験から２つの重要なポイントが見えてきたと思います。まず１つは、企画内容についてホール担当者とアーティストがじっくり話し合うことの重要性です。ホール担当者が対象となる地域住民のことを考えて構想する「公演の目的・目指すところ」と、それに対してアーティストが考える「やりたいこと」とのすり合わせです。アーティストの「やりたいこと」をホール担当者の「目指すところ」にどうマッチングさせていくか。地域の人々にどういう体験をしてもらいたいのか、アーティストの「やりたいこと」をホールとしてどういう形で提供（演出）すればより効果的に伝わるのか。アーティストとホール担当者の間での“キャッチボール”の数が多く交わされれば交わされるほどコンサート来場者の体験の質が向上することは間違いありません。逆にいえば、事前にどれほど多くの実のあるキャッチボールが交わされたかどうかで、その公演の成否が決まってしまうといっても過言ではないでしょう。

２つ目は“継続”していくことです。担当の中野さんの中では既に次の「よか音（ね）コンサート」のイメージが湧いてきているようです。限られた職員数で今回のように手間をかけた公演を実施していくのは本当に大変なことだと思いますが、一年に一公演でいいと思います。毎年のお祭りのように、地域の人々が次の公演を楽しみに待っていて下さるような東与賀文化センターの目玉商品的な公演が出来上がるまで、不断の熱意と意欲を持って取り組んでいってくれることを願い、遠からぬ将来、目指す公演がホールに定着してくれることを祈っています。

第３部
令和元年度公共ホール音楽活性化事業コーディネーター・アドバイザーレポート

チーフコーディネーターレポート
小澤　櫻作（上田市交流文化芸術センター プロデューサー）

ノウハウの継承

アウトリーチ活動の定着や地域創造の継続支援の充実などを背景にアウトリーチ活動を長く継続している公共ホールがある一方で、担当者の異動などでノウハウを失い、継続を諦めてしまう公共ホールも沢山あるとお聞きしています。そこで今回は「ノウハウの継承」をテーマにしてみたいと思います。

パッケージ公演ではなく自主企画・自主制作が求められるアウトリーチ。しかし、人事異動が多い公共ホール業界においてはそのノウハウの継承が課題となっています。今回は具体的なノウハウをマニュアルのように詳しく書き上げるのではなく、ノウハウを継承していくためには、どのようなことが必要なのかについて考えます。

①　後任者（新担当者）には、まず理念や課題、全体像から伝える。

ホール／組織としての理念や課題などを知らずに、目の前の作業だけを理解しようとしても本質的なノウハウは獲得できません。ましてや“アウトリーチだけ上手く行けば良い”などの狭い視点から生まれた作業は継承するべきノウハウとは言えません。

ホール／組織としての理念や課題は何なのか？その中でアウトリーチはどのような役割を担っているのか？アウトリーチに取り組む目的と得たい成果は何なのか？などを明確にして、まずは“全体像”から伝えていくこと（知っていくこと）が大切となります。

②　具体的なノウハウを見極める。 ～作業の標準化と簡素化～

悪い例としてよくあること。例えば…“担当者は理解しているが、他の人には見づらいスケジュール表”や“楽屋ケータリングのこだわりメニューと配置のルール”など…

これらを「ノウハウだ」と言われても疑問しか残りません。このようにノウハウの継承では、“前任者の個人のこだわりがノウハウとして伝えられ、作業の目的が理解されないまま「行動」だけが引き継がれている”というケースが見受けられます。そうならないためのポイントとしては以下が考えられます。

・前任者の視点ではなく、後任者や組織の視点に立った継承が重要。
・過度なこだわりやおもてなしは、タスクを増やし、実現性、確実性を低下させる。
・ノウハウとは、効率性や確実性、安全性などを確保するための作業の集合体であり、それを継承していくためには作業の標準化、簡素化、近代化が必要となる。
・後任者には「行動」を求めるのではなく「原因、理由、目的」への理解を求める。
・ノウハウと個人のこだわりを区分し、個人のこだわりは尊重しつつ、残すべきノウハウを整理・把握していくことが大切。

③　ノウハウ継承のよくある課題

・前任者がノウハウを正確に伝えられるとは限らない。
・前任者がノウハウの継承に意欲があるとは限らない。
・後任者がノウハウを獲得することに意欲があるとは限らない。
・特定の担当者に任せきりでは、ノウハウを構築し、継承していくことはできない。
・「属人化」から「標準化」へのシフトが求められている。

④　共有　～ノウハウを成長させていくための環境づくり～

ほとんどの作業は、多くの人に共有され、応用されていくことによって、洗練されたノウハウへと成長していきます。例えば…担当者以外には見づらいスケジュール表も、副担当やお留守番組など事業に関わる全ての職員がアイデアを出し合ったり、または、別の事業でも同じ様式を使用していくなど、多くの人のなかで共有され、応用されていくことによって、より見やすいものへと成長していきます。

一方で、そうした共同作業が必要であることを理解していても、それを実現するためには多くの手間が掛かることから担当者に任せておくだけでは敬遠されてしまい、結果的に属人化が進んでしまいます。そうならないために担当者レベルではなく、組織として共有していくための環境を創っていくことが重要になります。

⑤　コンサート創りのノウハウ

コンサート創りのノウハウについては、全国のプロスタッフのなかで共有されているような高いレベルのいわゆる“専門性･技術”だけではなく、そのホールや地域ならではの“ハウスルールやローカルルール”も多くあります。

進行表の作成やリハーサルの進行など、具体的な作業の紹介は別の機会としまして、今回の視点として大切にしたいのは、やはり“共有”。まずは舞台スタッフと話し合い、経験を共有しながら、そのホールとしてのノウハウを創ることが大切です。幸い、おんかつ事業のコンサートの進行はさほど難しいものではありませんので、失敗を恐れず積極的に関わったり、類似のコンサートを観に行ったりしながらノウハウを身に付けていくことが大切です。ただし、楽器の管理だけは慎重に！アーティストの楽器は基本的には触らないほうが良いでしょう。

⑥　ガラパゴスにならないために

ホール内のスタッフの努力で創り上げたノウハウも、ハウスルールやローカルルールの領域を超えることが出来なければ、それは“ガラパゴス化”と呼ばれ、質の高いノウハウとは言えません。そうならないためには、各種研修会への参加やネットワーク事業への参加、類似のコンサートを観に行くなど、常に全国的な情報に興味、関心をもち、受信し続けていくことが重要となります。

コーディネーターレポート
丹羽　徹（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事　事務局長）

2020春、東京オリパラを直前に控えた日本は、新型コロナ感染症による嵐が吹き荒れている。政府によるイベント中止延期要請の影響で、今も連日公演の中止や延期の報告が相次ぎ、私の所属するクラシック協会が関係する公演だけでも800公演に迫る勢いだ。終息の目処は一向に見えず、中止延期の要請は出口の無いトンネルの中を手探りで進んでいるような感覚である。このレポートが発行される頃には、感染者の上昇もピークを過ぎ未曾有の大混乱も収束に向かって進んでいれば何よりと願う気持ちでいっぱいだ。この一連のイベント自粛の中で、世論を押し切って開催した主催者にコアな客層からは賛辞とエールが寄せられる反面、一般の方々から寄せられる多くのお叱りにより開催を断念した主催者と、様々である。人はそれぞれ自身の考え方に基づいて行動しているはずだが、なぜここまで世論が一つの方向性に偏ってしまうのか、自身の考え方に沿わない考え方は排除するという流れが主流になってしまっては、コミュニケーションなど取れるはずはないだろう。メディアの功罪は別として、インターネットの普及から、子供からお年寄りまでがスマートフォンを片手に様々な情報・娯楽を得る事が出来る社会となった事で、確実に人と人とのコミュニケーションは益々希薄になってくるだろう。音楽や演劇等の舞台芸術の根源を成す出発点はコミュニケーションでもあり、これが希薄になる事は、文化芸術そのものの在り方も変えなくてはならないだろうし、ひいては衰退も意識してゆく必要性があるだろう。機械頼りのコミュニケーションは文化事業やアウトリーチ活動に取り組む制作者や担当者にどのような影響を及ぼしているのか、ここ数年の意識変化について考えてみた。

音楽の力を活用して地域に文化の種を植えるアウトリーチ活動に、そもそも正解などないのだ。どの手法が正解でこれは間違い等の定義は無く、基本的にはどのような企画も自由なのである。それがアウトリーチの利点でもあるのだが、自由だからこそ、見本や参考がないと不安に思ってしまう方々が多いことも事実だろう。つまり自由が不自由に捉えられてしまってはいないか。

「オリジナル、手作りは魅力じゃないのか」

個性によって生み出されるオリジナル性や、採算性に寄らず手間と時間をかけて作る手作りというキーワードは衣食住のどのようなジャンルでも魅力的でありアピールするポイントだ。しかしオリジナルと言うキーワードはその分手間がかかる事でもある。担当者の中には個性を意識する事が不得手であり、難しいと感じる方もいるだろう。そもそも個性は人それぞれなのだが、個性を主張する事によって多勢と違うと言う事に傷つく人が多いのは最近顕著な傾向だ。個性は活かすべきポイントでもあるのに非常に残念な方向性に進んでいると感じる。

「ネットワーク、連携は有効なはず」

日本の社会は基本的には縦割りだ。縦の考え方がしっかりしていなければ横との連携はとても難しい。文化事業と言う領域は未だ未だ縦の考え方が確立はされていないし、もちろん縦の考え方が全国一律に確立される必要はないが、地域の文化施設と言う立ち位置から事業展開を考える上で、縦となる地域の文化行政の考え方や方向性が合致し浸透していて、初めて横に伸びる事かできるからだ。最近公共ホールの連携やネットワークは非常に活発ではあるが、ホールの規模や自治体の規模等による企画や事業の汎用性でのネットワークに陥ってはいないだろうか。私は連携のポイントは付加価値をいかに共有できるのかだと思う。事業ありきのネットワークは、パッケージ企画と同一ではないか。

「音楽・人・新たな出会いが企画の根源」

アーティストとの出会いや地域の人々との出会い、我々スタッフとの出会いも全ては異なる価値観との出会いだと思う。新たな事業を生む活力、新たな企画は個性のぶつかり合いから生まれるものだ。「他者を知って己を知る」と言う言葉もあるが、新たなる価値観との出会いは、未知の世界を体験する事で、自己の知見を広める事でもあろう。自身のスキルアップにも繋がるし、人として成長する事を望む上で

欠かせない事ではないだろうか。この価値観を楽しむ事が出来るかどうかが非常に重要なポイントであろう。昨今のネット社会の進展の中で、価値観が共有できるグループに安住し、新たなる出会いや価値観の擦り合わせに疲弊している人々が多くいるのも非常に重要な問題だと思う。

アウトリーチ活動がそれぞれの地域に定着していく為には、まず組織内の仲間を巻き込むことが重要だ。仲間との理解の上で共有の価値観が育まれる。その価値観をホールなり地域に浸透させて縦の考え方を共有し、ネットワークを形成して点の活動を線の活動へ進展させる事がポイントだろう。その為には、そのきっかけとなる人と人との出会いがすべての根底になければ原動力は育まれないだろう。小さなコミュニティに囚われず、自分自身の感性を信じて、誇りと自信を持って取り組んでいただきたいと心より願っている。なぜなら文化事業は人々を笑顔にしていくとても魅力ある事業だからだ。

コーディネーターレポート
花田　和加子（keynote代表、ヴァイオリニスト）

コンサートの多様化とは？

おんかつの現場（に限った話ではありませんが）でよく耳にするのが、「いいものをやっているのにチケットが売れない」という嘆きです。ここでいう“いいもの”とは、「一流の演奏家による本格的なクラシックのプログラム」という意味でしょう。いいものは必ず売れる。そう信じたいものですが、残念ながら現実はそう甘くはありません。

コンサートのチケットに限らず、モノが売れるための要因は一つではなく、いくつもの要素が組み合わさった結果です。「一流の演奏家による本格的なクラシックのプログラム」は必要条件であっても、それだけで充分条件とはなりません。

“いいもの”をいいもの―つまり「チケットを買って聴きにいくだけの価値があるコンサート」―だと判断できるのは、アーティストや演目についてある程度の専門的な知識を有し、多くのコンサートに足を運んでいる、いわゆる「クラシック・ファン」と呼ばれる層です。そういう人たちは確かに存在しますが、数は多くありません（ファン層の密度が最も高い大都市圏でもその数は減少傾向にあるのが実情です）。それ以外の、つまり大多数の人たちにとっては、「いいものらしいけど、よくわからない」というのが実態でしょう。人は「わかないもの」にお金をつかうことはありません。例えばバスケットボールに興味がない人に、「NBLのスター選手が来るから」と誘ってもチケットを買って試合を観にはきてくれないでしょう。ゲームのルールがわからないし、そのスター選手がどれほど（もしくは、なぜ）すごいのか知らなければ興味が湧かないからです。ホール所有のベーゼンドルファー製の名器（ピアノ）を活用し、一流のピアニストを全国から呼んで本格的なクラシック・コンサートを提供しているのに、客足が伸びない。国見町の例はまさしくこれに当たります。

時代が進み、個人の趣味や趣向が多様化し、その多様化をまかなえる規模の受皿がそれぞれに存在するようになった現代にあって、硬直化した従来通りの考え方ややり方に固執していては、結果は推して知るべし、です。おんかつに限らず、音楽業界全体に当てはまることですが、ごく一部の限られたクラシック・ファンだけでなく、広く近隣住民に足を運んでもらえるようにするためには、コンサートの多様化―さまざまなニーズに対応できるコンテンツを持った新しいコンサートの形が―求められています。

では、“多様化”とはなんでしょうか？　何を多様化するのでしょうか？

「クラシックは堅苦しくて難しいから」という理由で、プログラムにポップスやジャズ、アニメや映画音楽を入れるケースがありますが、これは問題の根本的な解決にはなっていません。さらに演奏者の立場からいうと、これまでクラシック音楽の勉強や訓練しかしてこなかった奏者がジャズを演奏しても、それは「ジャズっぽいもの」にしかなりません（最近はジャズなど他ジャンルの音楽も積極的に学ぶ演奏家や学生が出てきてはいますが）。先の例でいうと、バスケの選手にバレーの試合でスパイクをしろというようなものです（基礎的な運動能力は持っていますからそれなりのスパイクはできるでしょうが）。また、アニメや映画音楽も中途半端なアレンジで演奏すると、来場者の期待を大きく裏切ってしまう危険性もあります（映画の中で様々な楽器が含まれるオーケストラが演奏している音楽を弦楽四重奏などの少人数で演奏した場合、残念ながらその差は歴然です）。

“多様化”するとは、プログラムの内容で“妥協”することではなく、プログラムの提供の仕方を工夫するということです。例えば、この曲の何がすごいのか、演奏者自身が口頭で説明する。初めて耳にする曲を味わってもらう手助けとして照明や映像を使う。「訳が分からない曲を延々と聴かされる苦痛」を避けるという意味では、複数楽章がある作品（組曲やソナタなど）は思い切って必要と思われる楽章

のみ演奏する（楽章抜粋）というのも一つの方法でしょう。

そうしたコンセプトを基に組み立てた今回の国見町のコンサートでは、「クラシック名曲のいいとこどり」と題して、アーティスト（アーバンサクソフォンカルテット）に

・音楽は美しい
・音楽は楽しい
・音楽はワクワクする
・音楽はドキドキする
・音楽はドラマチック

というシンプルなキーワードを基にプログラムを考えてもらいました。その際に留意したのは、「演奏曲はあくまでもクラシックのレパートリーから選ぶこと」。クラシックの楽器（奏者）が演奏しても、演奏される内容（曲目）がクラシックでなければクラシック音楽を聴いたことにはならないからです。

最終的に目指したところは、コンサートにいらして下さった方々に「クラシック・コンサートには足を運ぶ価値があるのだ」ということを発見していただくこと、そのために国見町には観月台文化センターという素晴らしい施設があるのだと認識していただくことでした。全てクラシック音楽のジャンルで組み立てたプログラム（「本格的なクラシック・コンサート」と言えるもの）でしたが、わかりやすいキーワードに沿ったアーティスト自身によるトークを入れることで、終演後、「わかりやすかった」、「楽しかった」というアンケートが多数集まりました。会館して25年が経つにも拘らず、「初めて会館に来た」という来場者が非常に多かったのも、コンサートのコンセプトが地域の人々のニーズにマッチした一つの結果だったと言えるのではないでしょうか。

ひと昔前まで、クラシックのコンサートを聴きにいくことには「教養」という側面が付随していました。その優雅で知的な雰囲気を持った大人の社交場というイメージが奏功した時期もありましたが、その後、時代の変化や人々の嗜好の多様性が拡がるに従い、教養という側面に対する反撥や堅苦しく難解だという負のイメージが強くなったことがクラシック音楽業界の衰退につながったと言っても過言ではないでしょう。そんな状況を打破しようと様々な試み―先述のプログラムにポップスやジャズ、アニメソングや映画音楽をとり入れるといった―がなされていますが、それらは結局「クラシック」のエンターテイメント化でしかありません。少しでも敷居を下げて近づいてもらいたいという気持ちはわかりますが、それは“妥協”でしかありません。妥協をいくら積み重ねても期待するような結果は得られないでしょう。どうしたらホールに足を運んでくれた人々に「実際に体験してみたら面白かった」と思ってもらえるか？　知識を単なる情報として提供するのではなく、どうしたら来場者の実体験に結び付く形で提供できるか？　そして、何よりもホールという場を、アーティストの生の声と演奏が聴け、さまざまな音楽的感動体験を共有できる「ここだけの特別な空間」に作りあげることができるか？　かつて負のイメージだった「教養」というクラシック音楽に付随する要素を否定したり薄めたりするのではなく、それを逆手にとって利用することが一つのブレイクスルーのきっかけになるのではないか。そんな可能性の萌芽を感じさせてくれたのが国見町のコンサートの試みでした。

コーディネーターレポート
山本　若子（有限会社N.A.T取締役）

アーティストと現地に乗り込むまでに担当者とお会いできる機会は、全体研修会と個別研修くらい。とはいえ、やらねばならないことはてんこ盛りだし、皆さんの深層にたどり着けるほどゆっくりお話を...というのはなかなか厳しい実感があります。

どのコーディネーターも、おんかつをやってみようと思われた動機、そして何を見据えて取り組もうとされているのかということを軸にコーディネートされていることと、想像ではありますが思います（他のコーディネーターのご手腕をのぞいてみたい...）。

「本物の芸術体験の提供」。おんかつを実施するにあたり事業のコンセプトとしてこれに類する文言をよく見受けます。確かにその通りです。ただ、この本物の芸術体験にどれほどの価値があり、効果があり、何をもたらしてくれるのか、というところに思いを馳せ、担当者による方向性が指し示されている内容であるほど、提供という表面的な事象にとどまらない、未来に良い影響を与えるような価値ある体験になると信じています。

組織を背負っての考えをはじめ、おんかつに手を挙げたいきさつやどんなところでアクティビティを展開していきたいかなど、具体的な内容をお聞きしていくうちに、組織の代弁者としてだけではなくご担当者の個人的な思いが垣間見える時があります。それが見えた時が実に嬉しい。この先、事業を進めていくために必要なものを見つけた気がするのです。

なぜその個人的な思いが嬉しいのか。それはおんかつを進めていく上でのモチベーションであり、また、選択を迫られた時の指標になるからです。

どんな仕事も経験値に拠るところがあると思います。既に経験済みのことであれば比較的抵抗なく参入できますが、未経験であれば少し身構えたり。おんかつの場合、音楽を扱いますのでもしかしたら経験値低めと思い、ぐいぐいっと踏み込めない方もいらっしゃるかも知れません。

「どんな仕事も人とやっていく上では一緒ですよね」と、ある町のご担当者。おっしゃる通りだと思います。クラシック音楽という芸術を幼少の頃からのたゆまぬ努力で身につけたアーティストという人たちとどう接すれば良いのか...と遠慮がちに接している担当者をお見かけします。しかしそんな気後れは必要はありません。しかも音活ではアーティストは同志です。それぞれに与えられた役割や経験値を理解し合いながら一緒に作り上げていけば良いのです。

おんかつを行うにあたっては、これら個人の思いと経験値とを遠慮無く重ねて欲しく思っています。個人の思いについて考えることが難しいならば、個人的なフィールドにおんかつを持ち込んだら？と想像してみると良いかもしれません。自分の身内がいるケアセンターに行ったら？　我が子が通う学校に行ったら？　はたまた自分が所属するサークルに行ったら、等々。届ける場所や相手が具体的になればなるほど届けようとしているものを理解したくなり、自分が選ぶアーティストに何ができ、何を求めるのか...と思いを巡らせるようになります。さらに問いかけをし続けると、自分は何をしたいのだろうと、自分への問いかけも発生し、ぐるぐると無限ループに陥るように感じるかもしれません。しかしそれは同じところを回っているのではなく、螺旋階段を上るかのように少しずつ違う風景が見えるようになっているはずです。

また経験値について、クラシック音楽には馴染みがないのであれば、その経験のなさはこれからアウトリーチを体験する人たちの立場に立てるということですし、もしアーティストが作ったアウトリーチのプログラム内容に理解しにくい所があると感じたならば、それはアウトリーチ対象者にとっても理解できないことである可能性が高いです。伝えようとしていることをちゃんと伝わるように精度を上げていくことが必要であり、これは音楽アウトリーチに限らず、あらゆる人と人とのやりとりに共通することです。ですので、遠慮なく所感をコーディネーターもしくはアーティストにぶつけて欲しいと思います。

最後に。個人的な思いと経験値については、お仕事モードでのお話の場ではなかなか慮れないかも知れません。お話を聞かせてください、ゆっくりとご飯でも食べながら。

アドバイザーレポート
大澤　寅雄　（株式会社ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室）

●おんかつを契機としたアウトリーチ事業の継続

地域創造の公共ホール音楽活性化事業（以下「おんかつ」）では、クラシック音楽を地域で身近なものとするため、演奏家を公共ホールに派遣し、コンサートとアウトリーチをはじめとするプログラムを実施しています。また、企画・制作能力を高めるための研修機会を提供することで、公共ホールスタッフの育成や地域文化の活性化を図っています。

おんかつに取り組んだ経験のある公共ホールの職員の多くは「継続してこそ意味がある」と言いますが、継続は決して容易なことではありません。そこで、おんかつを契機に、その後もアウトリーチ事業を継続している岡山県の美作市、勝央町、和気町、真庭市の４市町のホールの職員に、おんかつの終了以降もアウトリーチを継続することの意義や課題、成果などを伺いました。

2019年11月21日、岡山県北東部の美作市内の中学校で、マリンバ奏者の塚越慎子さんのアクティビティが公共ホール音楽活性化支援事業で実施されました。中学１年生が対象で、演奏の合間のトークでは、塚越さんが話しながら目を合わせようとすると、生徒は照れたり恥ずかしがったり。同じ曲でもアレンジによって雰囲気が大きく変化することや、プロのマリンバ奏者としてのキャリアの話をみんなが興味深く聞いていました。

翌日22日は、美作市に隣接する勝央町の小学校で、ピアノトリオ・ミュゼのアクティビティが公共ホール音楽活性化支援・文化庁連携事業で小学４年生と２年生を対象に実施。ホールの職員が用意したヴァイオリン３挺を使った演奏体験でピアノと共演し、「ヴァイオリンの弓はどんな動物の毛を使っているか知っていますか？」という質問に、何人もの子どもたちが一斉に「馬のしっぽ！」と答えるなど、密度の濃い音楽を介した交流が生まれました。

●企画制作の基礎を知らなかった「おんかつ以前」

美作市と勝央町でのアクティビティの前後に、和気町と真庭市を含めた４市町の公共ホールの職員にお話しを聞きました。最初に、おんかつに取り組む以前はどのような事業を実施していたのかをお聞きしたところ、講演会や式典、発表会といった利用の貸館が中心だったことや、コンサートを実施するにしても入場無料で、多くの住民は有料でチケットを買う習慣が根付いていなかったこと、いざ公演事業をすることになったときに、専門的な知識や情報もなく企画内容も知らず、動員目的でチケットを捌かなければならなかったことなど、様々な苦労話を聞きました。

こうした苦労があったからこそ、おんかつへの参加は貴重な体験でした。昨年度、初めておんかつを実施した美作市教育委員会の皆木いそ美さんは、「やることすべてが初めての経験で、コンサートの企画制作の基礎や運営の細かい配慮まで学ぶことができました」と振り返ります。職員の意識の変化について聞いたところ「プレゼンテーションでアーティストを選択できるので、自分がチケットを売るときに『きっと地域の人が喜んでくれる』と自信を持って薦められます」と皆木さん。他にも、子どもたちが音楽に引きこまれる様子や喜ぶ姿を目の当たりにして音楽に対する意識が変わるなど、職員自身の深い気づきやモチベーションの向上を実感する意見が聞かれました。また、真庭市のエスパス真庭の井尾祥子さんは、小規模なスペース、少人数の聴衆、長くない時間で行われるおんかつの基本スタイルが「単なる音楽鑑賞ではなく、音楽との出会いを心に長く残していくために、とても重要だということに気づきました」と言います。

●組織の協力連携の強化と職員の異動への備え

おんかつを通じて変化するのは担当職員だけではありません。話を伺った４市町のホールは少ない人

員体制で管理運営しています。おんかつの企画制作、連絡調整、現場運営の業務は、いわゆる買い公演と比べられないほど多く、担当職員にはストレスやプレッシャーも圧し掛かりますが、組織全体で取り組むことが組織の変化にもなるという話を聞きました。和気町の学び館･サエスタの目賀浅子さんは「おんかつが走りだしたらチームのみんなで動くし、年に一度の『おまつり』のような感じ」、勝央町の勝央文化ホールの竹内祐三さんは「職員総がかりになることで組織に一体感が生まれ、経験値も上がり、他の職員がやっている仕事も理解できる」と言います。組織内部の連携や協力が事業を持続可能にしていることがわかります。

また、事業の継続で大きな障壁となるのが職員の異動です。おんかつを経験した前任者の異動で配属された和気町の目賀さんは「異動があるからこそ組織の結束力が必要だし、前任者の異動先の部課との交流や連携も生まれます」と言います。勝央町の竹内さんは、ホールでおんかつを経験した後、他部署への異動を経てから再びホールに配属された経験を持ちます。「おんかつを引き継いでいくためには、ホール全体の業務が引き継がれなければならない」と、業務マニュアルの作成と後任の育成に力を入れています。

岡山県内には、勝央町や真庭市に経験豊富な職員がいることで、近隣のホールでの職員の異動の際には相談に応じ、仕事上の仲間意識も感じているようです。経験値の差や事業の位置付けの違いを尊重しつつ、困ったことはお互いに支え合う緩やかなネットワークがあることは、おんかつの継続にとって重要なポイントです。

●いまの子どもが親になったときの地域を見据えて

ホール独自でもアウトリーチ事業に取り組む勝央町と真庭市は、財源の確保でもアウトリーチの優先順位が高いことがわかりました。勝央町では鑑賞型の公演事業よりも先にアウトリーチ系の普及啓発事業から予算を固めており､真庭市ではアウトリーチのための予算をホールとは別に市が計上しています。

継続することで地域の理解や支持が深まることも期待できますが、その一方で、例えばコンサートの入場者数が目に見えて増えたというような､数字で変化を示すことが困難であることは共通の課題です。また、数値で説明可能な評価に縛られると「数をこなすこと」、つまり、アウトリーチをやること自体が目的になってしまいかねません。手段の目的化に陥らないようにするためにも、美作市の皆木さんは「何のために、誰を対象にするのかを説明することが大事」だと言います。

アウトリーチに取り組んだことでホールと地域との関係で何か変化を感じたか聞くと、「ホールに理解や共感をする地域住民､いわゆる『サイレントパトロン』は増えたと思います」（美作市の皆木さん）、「私の仕事を理解してくれる人が地域に増えました。公演のチケットを薦めると『井尾さんが言うならいいコンサートに間違いない』と言ってくれたこともあります」（エスパス真庭の井尾さん）。

勝央町の竹内さんは「長く、次の世代まで継続していく以外に成果の道筋はない。いまの小学生が親になったときに、その親が、おんかつで経験したことを子どもに語れるような地域になれば」と言います。そうした長期的な視野を持つことの重要性を､アウトリーチ事業を継続する職員は実感しています。

第４部
平成30-令和元年度
公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

平成30-令和元年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 秋田セッション 実施概要

1　事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2　実施内容

（1）実施団体

①　対象団体（研修事業、総括公演プログラム事業）：秋田県

②　公演実施団体（市町村公演事業）：大館市、能代市、羽後町、横手市

（2）事業内容

対象団体は事業を２ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア）研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象としてアウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ）研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、公演実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ）アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として４日間の連続した日程で次の事業を実施する。

ア）地域交流プログラム

学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業を、原則として６回（１日につき２回・３日間）実施する。

イ）コンサート

公共ホール等において有料のクラッシック音楽のコンサートを実施する。

3　事業実施に対する支援

（1）チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定･実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため､地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

（2）コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

（3）講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4　経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）

・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）

・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の２年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

公演実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、１団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、１団体につき５万円を限度として負担する。

5　派遣アーティスト及び派遣コーディネーター

（１）派遣アーティスト

①弦楽四重奏（メルヴィル弦楽四重奏団）

吉野駿（Vn）、京極朔子（Vn）、古屋聡見（Va）、小林幸太郎（Vc）

②サクソフォン四重奏（NOK Saxophone Quartet）

福田彩乃（S.sax）、坂井利絵（A.sax）、佐藤杏奈（T.sax）、西田早希（B.sax）

（２）チーフコーディネーター

児玉真（(一財)地域創造プロデューサー）

（３）コーディネーター

菊地俊孝（(公財)東松山文化まちづくり公社副局長 東松山市民文化センター副館長兼プロデューサー）

三浦幸恵（HAKUJUホール　事業担当）

（４）アシスタントコーディネーター

酒井雅代（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻 教育研究助手）

山下直弥（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻）

6　事業概要

（１）研修事業

①研修プログラムⅠ（アウトリーチ・セミナー）

日　時：平成30年６月７日（木）13：00 ～ 17：40

会　場：アトリオン　第１練習室

対象者：秋田県内の市町村文化担当者、公共ホール職員（参加者29名）

内　容：アウトリーチに関する知識や理解を深めてもらうため、２名の講師による講演および若手演奏家による模擬アウトリーチを実施した。

時　間	内　容
13：00 ～ 13：10	主催・共催あいさつ
13：10 ～ 14：10	講演「アウトリーチから広がる芸術と地域の可能性」 講師：吉本光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事）
14：20 ～ 15：20	講演「文化会館の役割とアウトリーチの実際」 講師：児玉真
15：35 ～ 16：20	模擬アウトリーチ 実演：Les Vents Japonais（木管五重奏）
16：30 ～ 17：30	アーティストトークセッション 児玉真、吉本光宏、Les Vents Japonais
16：30 ～ 17：40	閉会のあいさつ

②研修プログラムⅡ（全体研修会）

日　時：平成31年４月25日（木）13：30 ～ 17：30
会　場：アトリオン　第１練習室
対象者：アーティスト代表者、市町村公演事業担当者（参加者22名）
内　容：アーティスト代表者および市町村公演の担当者を対象者に、事業全体に関する説明を実施した。また、市町村ごとに個別打合せを行い、市町村公演に向けた準備を行った。

時　間	内　容
13：30 ～ 13：40	主催・共催あいさつ
13：40 ～ 14：00	参加者紹介
14：00 ～ 15：00	アウトリーチフォーラム事業について 講師：児玉真
15：15 ～ 15：30	事業説明・質疑応答
15：30 ～ 17：30	個別打合せ

③アウトリーチ研修

日　程：令和元年６月７日（金）～６月12日（水）
会　場：アトリオン　第１練習室ほか
対象者：メルヴィル弦楽四重奏団、NOK Saxophone Quartet
内　容：アーティストを対象とした、アウトリーチプログラム作りの研修を実施した。

日　程	内　容
６月７日（金）	開講式、個別研修
６月８日（土）	個別研修
６月９日（日）	個別研修
６月10日（月）	個別研修、ランスルー
６月11日（火）	アウトリーチ 会場：秋田市立築山小学校
	①NOK Saxophone Quartet 11：30 ～ 12：15（５年生・34名） ②メルヴィル弦楽四重奏団 13：40 ～ 14：25（５年生・29名）
	15：20 ～ 16：20　チーム別ミーティング

６月11日（火）	16：20 ～ 17：50　全体ミーティング
	17：50 ～ 22：00　個別研修
６月12日（水）	アウトリーチ 会場：秋田市立旭南小学校
	メルヴィル弦楽四重奏団 ①11：25 ～ 12：10（６年生・26名） ②13：45 ～ 14：30（６年生・26名）
	アウトリーチ 会場：秋田市立浜田小学校
	NOK Saxophone Quartet ①11：30 ～ 12：15（１～３年生・23名） ②13：45 ～ 14：30（４～６年生・28名）
	15：40 ～ 16：20　チーム別ミーティング
	16：20 ～ 16：40　閉講式

（２）市町村公演事業

【メルヴィル弦楽四重奏団】

①能代市公演

日　程：令和元年９月25日（水）～９月28日（土）

主　催：NPO法人能代市芸術文化協会

日　程	内　容
アウトリーチ	
９月25日（水）	会場：能代市立渟城南小学校 ①10：30 ～ 11：15（５年生・54名） ②14：00 ～ 14：45（６年生・31名）
９月26日（木）	会場：能代市立第四小学校 ③11：15 ～ 12：00（５年生・45名） ④14：05 ～ 14：50（５年生・45名）
９月27日（金）	会場：能代市立浅内小学校 ⑤11：25 ～ 12：10（５・６年生・31名）
	会場：秋田県立能代支援学校 ⑥14：00 ～ 14：45（小学高学年と中等部・32名）
コンサート	
９月28日（土）	会場：能代市文化会館　中ホール　入場者：213名

②羽後町公演

日　程：令和元年10月30日（水）～11月２日（土）

主　催：羽後町

日　程	内　容
アウトリーチ	
10月30日（水）	会場：羽後町立三輪小学校 ①11：15～12：00（４年生・31名） ②13：50～14：35（５年生・23名）
10月31日（木）	会場：羽後町立西馬音内小学校 ③11：25～12：20（５年生・26名） ④13：55～14：40（５年生・27名）
11月１日（金）	会場：羽後町立羽後明成小学校 ⑤10：20～10：50（４・５・６年生・46名） 会場：羽後町立高瀬小学校 ⑥13：50～14：35（全校・68名）
コンサート	
11月２日（土）	会場：羽後町文化交流施設　美里音　入場者：155名

【NOK Saxophone Quartet】

①大館市公演

日　程：令和元年９月25日（水）～９月28日（土）

主　催：（一財）大館市文教振興事業団

日　程	内　容
アウトリーチ	
９月25日（水）	会場：大館市立上川沿小学校 ①11：05～11：50（４年生・29名） ②13：45～14：30（６年生・26名）
９月26日（木）	会場：大館市立川口小学校 ③11：15～12：00（５年生・23名） ④14：15～15：00（６年生・27名）
９月27日（金）	会場：大館市立花岡小学校 ⑤11：15～12：00（３・４年生・29名） ⑥13：40～14：25（５・６年生・28名）
コンサート	
９月28日（土）	会場：ほくしか鹿鳴ホール（大館市民文化会館）　中ホール　入場者：130名

②横手市公演
日　程：令和元年11月20日（水）～11月23日（土）
主　催：横手市

日　程	内　容
アウトリーチ	
11月20日（水）	会場：横手市立浅舞小学校 ①11：15～12：00（５年生・23名） ②13：10～13：55（５年生・21名）
11月21日（木）	会場：横手市立雄物川小学校 ③11：00～12：00（４年生・29名） ④14：00～15：00（４年生・25名）
11月22日（金）	会場：横手市立山内小学校 ⑤11：10～12：10（５年生・16名） ⑥13：45～14：45（６年生・22名）
コンサート	
11月23日（土）	会場：横手市ふれあいセンターかまくら館ホール　入場者：78名

（３）総括公演プログラム事業（ガラコンサート）
日　時：令和元年11月30日（土）
会　場：アトリオン音楽ホール
入場者：232名

①アウトリーチ研修

②市町村公演事業（NOK Saxophone Quartet、大館市花岡小学校）

③市町村公演事業（メルヴィル弦楽四重奏団、能代市立浅内小学校）

④ガラコンサート

メルヴィル弦楽四重奏団（弦楽四重奏）

桐朋学園大学在学中に同級生により結成された。在学中には国内での演奏会をはじめ、韓国・ソウルでの桐朋学園大学・ソウルメトロポリタンユースシンフォニー交流演奏会等にも出演。卒業を機に解散をし、留学など各々が別の場所で研鑽を積んだ。メンバーの帰国もあり、今回のアウトリーチフォーラムをきっかけに再結成。それぞれが培ったものを出し合い、アウトリーチやコンサートという形で、それを昇華させていきたいと思っている。

○吉野 駿（よしの しゅん）ーヴァイオリンー
埼玉県出身。ジュリアード音楽院(予科)、桐朋学園大学などで学ぶ。卒業後、オタワ国立芸術センター管弦楽団、San Francisco Academy Orchestraに在籍し研鑽を積む。また、トリトン・アーツ・ネットワーク室内楽アウトリーチセミナーに参加。クールシュベール国際音楽アカデミー、ニューヨークSMF、プロジェクトQ、JTが育てるアンサンブルシリーズ、京都･国際音楽学生フェスティバル、アフィニス夏の音楽祭等に出演。全日本学生音楽コンクール等で入賞。これまでに田中直子、辰巳明子、高木和弘、堀正文、Daniel Carlsonの各氏に師事。

○京極 朔子（きょうごく さくこ）ーヴァイオリンー
静岡県出身。桐朋学園大学音楽部門を卒業し、同大学研究科を経て、桐朋オーケストラアカデミーを修了。桐朋オーケストラアカデミー第51回定期演奏会で、コンサートミストレスを務める。小澤征爾音楽塾、ウィーン国際音楽ゼミナール、テキサス州ミーミル室内楽フェスティバルに参加。現在は、プロオーケストラへのエキストラ出演や、室内楽、ソロ演奏でも活動の場を広げている。静岡市文化財団「静岡の名手たち」メンバー。

○古屋 聡見（ふるや さとみ）ーヴィオラー
山梨県出身。桐朋学園大学音楽学部在学中にN響アカデミーに在籍・修了。2013年渡独し、ハンス・アイスラー音楽大学ベルリンに入学。在学中より、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団をはじめ、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団などドイツ国内主要オーケストラにエキストラとして出演する傍ら、ソロ、室内楽、演奏会企画などの活動を行う。2017年冬から翌春まで王立セビリア交響楽団に期間契約主席奏者として在籍。現在日本フィルハーモニー交響楽団、NHK交響楽団等国内オーケストラにおいて客演首席奏者、またはエキストラとして出演の他、スタジオミュージシャンとしてレコーディングなどの活動も行っている。これまでに、江戸純子、Walter Kuessnerの各氏に師事。

○小林 幸太郎（こばやし こうたろう）ーチェローー
千葉県出身。桐朋学園大学音楽学部卒業。チェロを倉田澄子氏に師事。泉の森ジュニアチェロコンクールにてコンクール史上初めて全部門（小学生の部、中学生の部、高校～大学生の部）に優勝。その他全日本学生音楽コンクールをはじめとする多数のコンクールに優勝、入賞を果たす。ヴァチカン国際音楽祭、東京・春・音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン等に出演。桐朋学園チェロアンサンブルの常任アレンジャー、コンサートマスターを経て、現在チェリスト、作編曲家として国内外多数のアーティスト、団体と共演。幅広く音楽制作に携わっている。

NOK Saxophone Quartet（サクソフォン四重奏）

名古屋・大阪・京都で活動する同級生４人が2015年に結成したサクソフォンカルテット。第４回ナゴヤサクソフォンコンクールアンサンブル部門において第１位を受賞。これまでに東京、名古屋、大阪、京都にて定期演奏会を開催。「皆さまの心の扉をKNOCK（ノック）します！」をモットーに、全都道府県で演奏することを目標としている。

○福田 彩乃（ふくた あやの）ーソプラノサクソフォンー

三重県津市出身。三重県立津高等学校を経て、京都市立芸術大学音楽学部管･打楽専攻を首席で卒業。京都市長賞・京都音楽協会賞を受賞。これまでにサクソフォンを尾家幸枝、服部吉之、國末貞仁、須川展也の各氏に師事。第88回読売新人演奏会、第34回ヤマハ管楽器新人演奏会など、多数の演奏会に出演。演奏のみならずコンサートや音楽イベントへの制作にも携わり、研鑽を積んでいる。2016年よりプロ奏者によるチーム「SAX PARTY!」（音楽監督：須川展也）に所属。平成28年度公益財団法人青山財団奨学生。現在、同大学院２回生。

○坂井 利絵（さかい りえ）ーアルトサクソフォンー

岡山県津山市出身。明誠学院高等学校特別芸術コースを経て愛知県立芸術大学音楽学部卒業、同大学大学院修了。第28回中国ユース音楽コンクール優秀賞、第１回津山音楽コンクール優秀賞、第９回横浜国際音楽コンクールサクソフォン部門大学の部第５位。日本サクソフォーン協会主催第14回サクソフォーン新人演奏会、第50回岡山県新人演奏会、愛知県立芸術大学主催第48回卒業演奏会、第12回大学院修了演奏会「博士前期課程最優秀修了生による演奏会」等に多数出演。サクソフォンを宗貞啓二、岸本和宣、田中靖人の各氏に師事。

○佐藤 杏奈（さとう あんな）ーテナーサクソフォンー

愛知県安城市出身。私立安城学園高等学校を経て愛知県立芸術大学音楽学部を卒業。サクソフォンを大塚加奈恵、小森伸二、田中靖人の各氏に師事。大学在学中、第１回ナゴヤサクソフォンコンクールU25若手演奏家部門第１位を受賞。2017年音大卒業生による第17回ヤマハ管楽器新人演奏会に出演。2019年新進演奏家育成プロジェクトオーケストラ・シリーズにて、名古屋フィルハーモニー交響楽団とクレストンの協奏曲を共演。現在は愛知県を中心にソロ活動、学校法人桜丘学園 桜丘中学校吹奏楽部のコーチを務め後進の指導も行なっている。

○西田 早希（にしだ さき）ーバリトンサクソフォンー

兵庫県加古川市出身。大阪音楽大学音楽学部音楽学科管楽器専攻を経て昭和音楽大学大学院音楽研究科（修士課程）音楽芸術表現専攻修了。クラシックにおけるソロバリトンサクソフォンの確立を目指しレパートリー開拓を進め､また室内楽の分野においてもバリトンサクソフォン奏者として活動している。第14回ウェルネス加古川新人演奏会に出演。ジャン＝イブ・フルモー、フィル・ピーリック各氏のマスタークラスを受講。サクソフォンを石田さと子、飯守伸二、國末貞仁、田中靖人の各氏、室内楽を西本淳、井上麻子、福本信太郎、小山弦太郎の各氏に師事。

事業担当者レポート
佐藤　亜希子（秋田県観光文化スポーツ部文化振興課）

１　実施目的

秋田県では、現在、秋田市と連携して文化関連施設「あきた芸術劇場」の整備を進めており、令和３年度中の開館を目指している。

開館までの間、県民が芸術文化に触れる機会が減少しないよう、県がアウトリーチの手法を学び、学校等での音楽鑑賞機会を設けるとともに、今後、質の高い音楽公演をあきた芸術劇場をはじめ、県内各市町村ホールにおいて提供できるようにしたいこと、及びこの事業を通じて、県と市町村ホールのネットワークづくりや人材育成を図ることを目的とする。

２　各年度の実施状況

（１）平成30年度

県内市町村の文化行政担当者、教育関係者、公共ホール職員等を対象とした「アウトリーチ・シンポジウム」を実施した。シンポジウムでは、アウトリーチ活動の基本だけでなく、その効果や可能性など幅広い講義内容に加え、演奏家による模擬アウトリーチを体験することができ、参加者にとって非常に有意義なものとなった。

（２）令和元年度

秋田県の場合、ガラコンサートが11月末ということもあり、研修会は春に、市町村公演等が秋に集中するスケジュールとなった。

４月、この事業に参加することとなった大館市、能代市、横手市、羽後町の担当者、コーディネーター、アーティスト及び地域創造スタッフによる研修会が実施された。事業を推進していく上で、必要な知識や事務手続き等を学び、その後、市町村公演事業について、より具体的なイメージを掴んでもらうため個別打合せを行った。翌日は、６月のアウトリーチ研修の際に訪問する秋田市内３校の下見を行った。

６月、この事業の関係者が一堂に会するアウトリーチ研修が行われた。６日間の研修でアウトリーチプログラムの作成と小学校でのアウトリーチコンサートというハードスケジュールの中、一方的な演奏では、子どもたちの心には何も届かないということを念頭に、どのようなアプローチであれば音楽の素晴らしさやアーティストの想いが伝わるのか、試行錯誤しながら、連日夜遅くまで熱心に取り組んだ。

秋田市内３校でのアウトリーチコンサートでは、各小学校はもちろんのこと、クラス単位でも子どもたちの反応は異なっていた。当初、私自身、秋田県の子どもは消極的で恥ずかしがり屋という印象であったが、思いのほか、反応が良く、アーティストからの問いに対しても積極的に発言をしていたことに驚いた。アーティストたちは、始めこそ緊張した面持ちであったが、程なくして子どもたちと打ち解け、45分間を楽しく過ごしているようであった。

この研修ではアーティストの顕著な成長ぶりを目の当たりにする貴重な経験ができた。

研修終了後は、その余韻に浸る間もなく、９月からスタートする市町村公演事業の打合せ、小学校の下見、公演準備が同時進行で行われた。

日程の都合上、９月に大館市と能代市が同一期間での実施、10月～11月に羽後町と横手市の実施となった。

残念ながら、全ての行程には同行できなかったが、各市町ホール担当者が大変協力的かつ柔軟な対応をしてくださったおかげで、４市町とも大きなトラブル等なく終えることができた。今回、県北２地区（大館市、能代市）と県南２地区（横手市、羽後町）での実施となったが、それぞれの地域に合わせたコンサートプログラムは、どの会場でも来場者の満足度が高いように思った。

最後の市町村公演が終了した翌週、この事業の総括となるガラコンサートを秋田市で実施した。

４市町担当者だけでなく、これまで訪問した市町や学校関係者の来場もあり、アーティストとの再会を喜ぶ姿もあった。

２組のアーティストが顔を合わせるのは６月以来であったが、合同演奏の息はぴったりで、大変感動的なコンサートでこの事業の幕を閉じることができた。

３　成果

ホール運営者ではない文化振興課が、県内４市町ホールと連携し、県内の子供たちに音楽を提供できたことは、今後、秋田県の芸術文化活動における市町村ホールとのネットワークづくりの大きな一歩となった。

当初は、あまり馴染みのない「アウトリーチ」であったが、この事業の参加をきっかけに来年度以降「おんかつ事業」の実施を予定している市町があることから、県内において、質の高い音楽の普及が拡大することに期待が持てる。

４　課題

今回培ったノウハウやネットワークを一過性のものとしないよう、県として今後に繋げていくため、令和４年３月開館予定のあきた芸術劇場におけるアウトリーチ事業に活かしていく必要があるほか、県内各地域の公共ホールの現状の把握や事業支援策の検討など、県内の音楽事業の普及・拡大による地域活性化を見据えた取り組みが必要と感じた。

チーフコーディネーターレポート
児玉　真（(一財）地域創造プロデューサー）

東北地域はホールの自主事業に関しては、企画力が未成熟なのか、社会環境の整備がまだまだのためなのか、関東以西に対して弱体な印象があるのだけれども、今回はその印象がかなり変わった。今回のフォーラム事業で特徴的だったのは、秋田県の文化振興の皆さんが、立て替え中の新たな芸術文化会館の役割をふまえてこの事業に積極的に取りくんでくれたことだと思う。また、参加した４つの市町の会館もそれぞれ特徴がありながらも担当者の熱意が高かったと感じられたのが一番嬉しかったし、今回の機会が今後の事業展開に良いきっかけや人脈作りに役立ってくれることを期待する。

チーフコーディネーターとしては、アウトリーチ事業を支えるコーディネーター、県庁担当課、会館担当者、アーチストがお互いに敬意をベースにした上でフラットに意見を言い合えるプラットフォームを作りたい、というのが今回のフォーラムでの一つの目標だった。ステークホルダーである聴き手（お客様）とアーチストだけではなく、関わるすべての人が、刺激とやる気を持てないと長期間とか継続的な事業はなかなかうまくいかないのである。

今回コーディネーターには音楽の専門的知識量よりもホールでの企画制作経験が多い、新しい人を選んだ。それは自分の年齢を考えて何年か後に来るであろう世代交代を考え、今のうちに経験を積んでもらうという意図もあった。公共、民間の違いはあるがホール制作経験の多いコーディネーターと、比較的制作の経験が多くはないが温かみのある対応を期待できる市町の会館というチームが一体となって、どう衆知を集めてプログラムを考えていくか、またそれを演奏家に気づいてもらえるか、という課題を意識した面もあった。予想よりも良い結果を残せたと思う。

ロバート・フルガムの「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本があるが、「知恵は山のてっぺんにあるのではなく、身の回りの何気ないことの中に宿っている」という真理にたどり着くには、起こっていることへの感性を高め、深く考える、という習慣をどのように作っていくか、それをどう生かしていくか、という生きる姿勢のようなものが大事である。アウトリーチでいうと、「アウトリーチで必要な知恵はすべて学校の子供たちが教えてくれた」ということもいえると思う。今回、コーディネーターが毎回ホールの担当者や県の担当者の感想、意見を聞きながらアーチストに考えてもらうような場所作りをしてくれたので（自分だと、アーチストに対してつい解を言ってしまいそうなので)、フォーラムのやり方の一つとしては良かったのではないか。

メルヴィル弦楽四重奏団、NOKサクソフォンクァルテットの２団体は同じ四重奏でも全く違った人間的、音楽的な個性を持ったグループで、考える手順や音楽への思いの方向性の違いが案外くっきりと存在して、どちらも決して楽なコーディネートではなかったと思うけれども、私としても今までにない新しい体験をさせていただいた。

メルヴィルは、引っ込み思案であろうと想像する秋田の子供たちに、徹底的に感じたことを聞いて言葉にしてもらう、というプログラム作り。子供の反応が心配だったのだけれど、時を追って見事に引き出すことが出来たのは「一緒に実験しよう」という姿勢が子供をその気にさせたから。NOKは最後に持ってきた「命の奇跡」にたどり着くまでのコース作りが難しかったが「みんなの気持ちをノックするよ！」というメッセージが最後に活きるように４人の気持ちがうまくできたことで印象的なアウトリーチになった。こういう「キーワード」の存在が活きたケースだったと思う。

コンサートでは４つの会館の担当者の思いにそれぞれバランス良く対応できていたのではないかとおもう。ガラコンサートでは、特に共演部分の８人のアンサンブルが制作的には難しいかと感じられたが、前回のフォーラムで故中村透さんのアドヴァイスを活かして、僅かとはいえ秋田県に編曲料を予算化しておいてもらったのが功を奏し、編曲家でもあるチェロの小林幸太郎さんのおかげで心配は杞憂だった。

以上

コーディネーターレポート
菊地　俊孝（(公財)東松山文化まちづくり公社副局長 東松山市民文化センター副館長兼プロデューサー）

アウトリーチフォーラムを振り返ると、この１年の活動が本当にあっという間であり、様々な事を考えた活動であった。アーティストもコーディネーターも共に悩み、考え、楽しむことのできた充実した期間であった。

考え続ける演奏家たち

アーティストが自分たちのプログラムを創り出す場面においてNOKサクソフォンカルテットの４名が当初より一貫して考えていたことは、別々の場所にいながら活動する彼女らにとって音楽が繋げてくれていること。音楽によってできた仲間との絆。である。人のことを想う、感じてもらうことから人に寄り添うことの大切さを感じてもらいたいというプログラムであった。

NOKは取り組みたい楽曲はある程度明確になっているものの、何でその曲でなくてはならいないのか、何でその構成でなくてはならないのかという問いにはなかなか明確な答えが出ない。おそらく感覚としては持っているのだが、言語化できない。選曲、構成とその意味という問いは今回のプログラムづくりでは彼女たちに大きくのしかかった。彼女たち自身､なんとなく感じてわかっていることなのだが、言葉にしようとすると違う方へ逸れていってしまう。この繰り返しだった。この作業を根気よく続け、徐々にその本質に迫っていく。この地道な作業を続けることができたのは、やはり音楽を通じて「伝えたい」という強い気持ちと支え合う仲間がいたからに他ならない。

私は当初より、彼女たちが１つのプログラムづくりに終始することは避けたいと考えていた。本質的な答えを探し、その答えに別の角度からもアプローチを行うことで、子供たちに合わせた内容に変化させる。そうすることで、より子供たちに寄り添い自分たちの体験していること、思っていることを伝えられると考えたからだ。また、これからアウトリーチというある意味厳しい世界に飛び込んでいく彼女たちにとって「完成したプログラム」ではなく、「考えるプロセス」が重要だと思ったからだ。

彼女たちが初めて創り上げたプログラムを小学校で実施したとき、彼女たちの中で何かが変わった。これは彼女らが子供たちを前にしたとき、自分たちに何ができるのかを身をもって感じたからではないかと思っている。緊張のなかで、自分たちが探してきたものが薄ら見えたときの気づき、高揚感はみているこちらにも伝わってきた。そこから何か確信のようなものに変わり、彼女たちの言葉になったのではないかと感じた。

この活動を通じて、NOKには「常に進化するアーティスト」であってほしいと思っている。常に進化ができるということは、自分たちの中に「揺るぎないもの」があるということ。音楽活動を通じて人に感動を与えられるアーティストという生き方には、この「揺るぎないもの」が必要なのではないだろうか。これがあるから変われる、変えられる。NOKには常に進化する音楽家であってほしいと願っている。

音楽を通じて繋がる人々

今回伺った横手市、大館市とも公共ホールとしてアウトリーチ活動の取り組みのなかで、この活動の奥深さや意義をより感じてもらえたのではないだろうか。それぞれのホール運営や文化行政の動きは違ったが、どちらのホールにおいても、現在置かれている状況に満足せず、新たな活路を見出そうとしているのがとても印象的であった。

横手市はホールの老朽化を迎え文化施策の方向性を導き出そうとしていた。ホールは直営館ということもあり、生涯学習課の皆さんが学校での活動を注目してくださり、課を挙げてこの事業に協力してくださったのがとても印象的であった。

一方、大館市は指定管理者ということもあり、少人数での事業運営のなかでこの事業に取り組んでくださった。そのきめ細やかな対応はアーティスト、スタッフのみならず、教育機関も安心して音楽体験活動を受け入れることができただろう。どこの学校へ行っても親切丁寧にアーティストを受け入れてくださった。

この事業では多くの人々がこの活動に関わり音楽を通じて繋がっていく。学校と公共ホール、市、県、アーティストなど本当に多くの人々が同じベクトルに向かって力を合わせていく。縦割りと言われがちな行政、公共ホールの取り組みのなかで、この事業は横断的に展開され、多くの分野の人たちを巻き込

んで進んでいく。これこそが、このフォーラム事業の意義であり、役割だと強く感じた。

アウトリーチフォーラムがもたらすもの

私たちは公共施設や行政、教育機関という組織の枠にとらわれず、これらの体験活動を前向きに取り組んでいかなくてはならない。特にこの教育機関（子供たち）へのアプローチは芸術文化に携わるものにとって数ある課題の一つである。

ある小学校の校長室でこんな話を聞いたことがある。子供たちの創造力を喚起するには、創造活動に触れるしかない。と。音楽家がその人生を捧げて追い求める音楽、その活動に子供たちが触れることで子供たちは音楽にふれる喜びや意欲を引き出す。次代の子供たちにその喜びや感動を伝えていくこと、その音楽体験の中で得るものは何事にも変えがたい貴重な経験となる。

音楽体験活動が子どもたちに音楽の聴き方や楽しみ方を伝え、音楽に触れる喜びや意欲を引き出していることは紛れもない事実である。こうした活動での直接的な効果に加え、その活動に携わる多くの関係者の関係性にも影響を与え、その後のその地域の文化にも影響を与えるアウトリーチフォーラム事業は、地域連携の第１歩になる活動であった。その１歩はまだまだ小さいかも知れないが、地域の文化に向かう大きな１歩になる。

これまでフォーラム事業は、県のホールを管理する団体が実質的に事業を実施をすることが多かったが、秋田県では県の文化振興課が取り組むという。県・市連携文化施設を立ち上げるという大プロジェクトを前に、県では「地域の文化力を高め、文化の力で秋田の元気を創出する」という基本目標を掲げ、文化芸術の基盤整備に取り組んでいる最中でのアウトリーチフォーラム事業への参加であった。担当の佐藤さんは、県の文化振興課に配属されてすぐにこの事業の担当となられたが、本当に積極的に事業に取り組んでいただいた。もっと言えばこの事業の成功だけでなく、その先に続く秋田での音楽活動の普及を見据えての大きな視野に、この事業に携わるコーディネーターとして本当に心強く、様々な形で今後に残る事業にしたいと強く思った。

このフォーラム事業により連携した秋田県、横手市、大館市のみなさんには秋田の他地域を牽引する先進的な事業に取り組んでいってほしい。そして、秋田が音楽にあふれる豊かな地となるよう切に願う。

終わりにこの事業でお世話になった多くの方々、受け入れてくださった秋田県、横手市、大館市の皆様、サポートしてくださった関係者の方々、そしてNOKに心から感謝したい。

コーディネーターレポート
三浦　幸恵（HAKUJUホール　事業担当）

メルヴィル弦楽四重奏団が作り上げたプログラムは、演奏者と子どもたちの位置関係や視点を変えることでコンサートホールでは体験できない聴き方を提示し、カルテットの音楽を聴く耳をひらかせ、カルテットに親しみを持ってもらうことを目的とした。

イメージや物語などにも頼らず、音そのものを聴いて「音楽の良さ」を感じてもらうということは、大変挑戦的なプログラムであり、アウトリーチを行う多くのアーティストが敬遠する内容でもあるかもしれない。なぜならば、子どもたちが音楽を聴く準備ができてないうちに一方的に音楽を押し付ける形になる危険性もはらみ、聴く準備ができていない子どもでもハッとするほどに圧倒的に素晴らしい音楽を提供できなければ、アウトリーチ自体が成立しない可能性も大いに有り得るからだ。

このように挑戦的なプログラムであったため、プログラム作りの過程やランスルー時には関係者の皆様から多くのアドバイスをいただく過程をつくり、その都度ブラッシュアップしながら次の流れに落ち着いた。様々な音楽体験を「実験」と称して､子どもたちを遊びに誘うような雰囲気を作り出したのだ。

＜導入＞
拍手で入場し、最初のご挨拶として演奏。
M1）グラズノフ：弦楽四重奏曲　第３番「スラヴ」より　第３楽章
　自己紹介、楽器紹介、「弦楽四重奏＝カルテット」編成の説明
　音の重なりを体験してもらうため、M2）の曲の短めのフレーズをチェロから順番に重ねて変化を聴いてもらう。その後、演奏。
M2）グラズノフ：弦楽四重奏曲　第３番より　第２楽章

＜実験コーナー＞
あらかじめ教室に大きめの四角の枠をテープで作り、その枠を使い、子どもたちの立ち位置や、演奏者の位置を変えて３通りの聴き方を体験する。

実験①　M3）グラズノフ：弦楽四重奏曲　第３番「スラヴ」より　第１楽章
演奏者は四角の四隅で立って演奏し、子どもたちには四角の中でそれぞれの楽器の近くと四角の中央と移動しながら聴いてもらい、近くで聴いたときの音の音色や遠くから音が聴こえてくる様子などを体感してもらう。

実験②　M4）パッヘルベル：カノン
子どもたちは四角の外側に一列に座って並んでもらい、演奏者は演奏しながら四角の四隅から次第に中央に歩いていき、４つの音が中央に集まる様子を視覚的にも見て、その音の変化を聴いてもらう。

実験③　M5）ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第12番「アメリカ」より第１楽章
演奏者は四角の中央で座って演奏し、子どもたちはその周りを立って囲む。４人を覗き込むように間近でアンサンブルする様子、演奏者の後ろ姿を眺め、大迫力の音楽を聴いてもらう。

＜まとめ＞
それぞれの楽器の音を聴き、様々な聴き方を経た後で、改めて通常のコンサートのような鑑賞スタイルで聴いてもらう。

M6）グラズノフ：弦楽四重奏曲 第３番「スラヴ」より 第４楽章

M7）校歌、県民歌、合唱曲などを子どもたちの合唱と弦楽四重奏で共演

メルヴィル弦楽四重奏団は、能代市・羽後町でのアウトリーチを経るごとに、各々で課題を見つけ、

言葉を選びながら進化していったように思う。特に、メルヴィルのアウトリーチは、つつがなく淡々と進行する反面、子どもたちからの意見や感想を引き出し切れない傾向にあったのだが、能代市の最後のアウトリーチとなった能代支援学校での体験から大きく変化したように感じられた。

能代支援学校でのアウトリーチは、小学高等部と中等部を対象にし、移動などの場面が多いアウトリーチに不安もあったのだが、事前の下見で対象となる子どもたちの普段の様子も見学させていただき、先生たちの協力のもと、他の小学校と同じ内容を実施することになった。当日、参加してくれた子どもたちは、音楽は積極的に楽しんでくれたし、メンバーの言葉にも集中して耳を傾け、問いかけがあると身振り手振りも加えて一生懸命伝えてくれた。それまでのアウトリーチでは、メルヴィルのメンバーそれぞれが、なんとなく構えた様子だったのだが、支援学校では自然体の姿で優しい笑顔がみられ、その後のアウトリーチでも子どもたちと対峙する姿勢がほぐれ、子どもたちへ伝えようとする意識にも変化が見られたように感じられた。

迎えた羽後町では、能代市でのアウトリーチやコンサートを経て、それぞれの曲目の完成度が高まり、音楽的な説得力が増したことで、アウトリーチでの子どもたちの感想も具体的な言葉が出てくるようになり、更に深いコミュニケーションができるようになった。小規模学校へ伺う機会もいただき、羽後明成小学校で４～６年生約50名、高瀬小学校で全校生徒約70名と複数の学年を対象としたイレギュラーな人数でのアウトリーチも行った際にも、それまでで培った対処法を活かし、余裕を持ちながら進行できたことは、メンバーそれぞれの成長を伺えた。羽後町では、子どもたちがコンサートにも足を運んでくれ、アウトリーチを経て「また聴きたい！」という気持ちが子どもたちに芽生えたことは一つの成果と言えるかもしれない。

また、この度の事業において、大変驚かされた点も記しておきたい。それは、それぞれの事業に関わる方の感性の鋭さである。「クラシックは全然わからねものな」とおっしゃりながらも、毎回アウトリーチが終わる度に、「昨日よりも更に良くなりましたね」「なんかちょっと音が違って聴こえますね」「さっきの方がいいな」と毎回のアウトリーチに真摯に寄り添い、時には厳しい目を持ってアーティストにも音楽にも向き合ってくださった。

そして、どの学校さんに伺っても、それぞれのまちの方とお話ししても、皆様が協力的であたたかく迎え入れてくださり、地域を担う多くの大人たちの純粋な期待や希望と子どもたちへの愛情を肌で感じる場面が多くあった点も、今回の秋田セッションにおいて特筆すべき点だと感じる。アウトリーチに関わる若手アーティストには、子どもたちから得た気づきと合わせて、そのような期待や希望を汲み取る感性をも更に育まれることを深く期待したい。

最後に、２年間にわたる事業を成し遂げ、いつも素晴らしい環境を用意し、アーティストをサポートしてくださった佐藤さんをはじめとする秋田県文化振興課の皆様、能代市の佐藤さん、羽後町の髙橋さんをはじめとする関係者の皆様には感謝を申し上げるとともに、この事業を足がかりに県内に広く展開してゆくであろう文化事業関係者の皆様にかげながらエールを贈りたい。

アシスタントコーディネーター
酒井　雅代（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻 教育研究助手）

NOKサクソフォンカルテットは、名古屋、大阪、京都の３都市で活動する同級生が集まり、2015年に結成された。NOKという名は、Nagoya、Osaka、Kyotoの頭文字を取ってつけられたが、「みなさまの心を“KNOCK”したいと」いう気持ちも込められている。現在は東京、名古屋、京都をベースに活躍する４人。合わせやリハーサルをするのにも大移動と経済的な負担を伴うだろうに、初顔合わせの時にすでに、「この４人でカルテットとしてやっていきたい」という強い意志と意気込みを感じた。

◆NOKのアウトリーチプログラムができるまで

①研修前のディスカッション

菊地コーディネーターからの提案で、６月の研修が始まる前に「アウトリーチで子供たちに伝えたいこと」についてメール上でディスカッションが開始された。最初にNOKから出てきた答えは、「音楽の楽しさを伝えたい」だった。これに対して、「楽しさについて深掘りして考えてみよう」と、菊地コーディネーターからさらなる投げかけがあり、オンラインでのディスカッションが続いた。そこから探り当てたキーワードは、「共感」、「尊敬」、「お互いを思いやる」だった。

②研修期間中のプログラム作り

NOKのプログラム作りは一筋縄にはいかなかった。練習よりもはるかに多くの時間が話し合いに費やされた。ディスカッションでNOKが発していたのは、「音楽の楽しさを伝えたいが、楽しいだけではない部分もあったほうが良いのはないか」、「ラゴ作曲の《シウダデス》を聴いてもらいたい」、「最後に《命の奇跡》を聴いてもらいたい。」そして、「《命の奇跡》を聴くことを通して、お互いを思いやり、自分から一歩歩み寄る気持ちを伝えたい」というアイディアだった。必ずしも耳馴染みが良いとは言えない《シウダデス》を、子供たちに主体的に、自分ごととして楽しんで聴いてもらうには、どのような工夫ができるか。また、最後の《命の奇跡》へプログラムを有機的につなげていくにはどうしたら良いかについて、彼女たちは考え続けた。時にディスカッションがループする場面や、袋小路に入り抜けらなくなっている場面も見受けられたが、このプロセスはNOKとして何を実現させたいのかを深掘りする時間となった。研修期間中に出来上がったプログラムは、以下の通り。

①小前奏人作曲《KNOCK!!》
― 子供たちとNOKメンバーの出会いの曲。音楽を通して挨拶をする。
② ホルスト作曲《惑星より“木星”》
― 子供たちに目を閉じて夜空の風景を想像してもらった後に、演奏が開始される。
③ ラゴ作曲《シウダデス》の《東京》
―《東京》の２つの踏切の音が重なって描かれている場面を、子供たちがカーンカーンと声で真似をする参加型のアクティビティを取り入れた。

《シウダデス》の《モンテヴィデオ》
― この曲では、作曲家ラゴの“気持ち”を想像してもらう。
④ 村松崇継作曲《命の奇跡》
― ③《モンテヴィデオ》で他者の気持ちを想像してもらったところから、「思いやり」「寄り添う」「自分から一歩 歩み寄る」というNOKが伝えたかったところへとつなげていく。

秋田市研修後２校目にアウトリーチに訪れた浜田小学校では、上記のプログラムが特に功を奏し、子供たちの心にすっと馴染んだ。この時の子供たちの反応は、NOKのアウトリーチ実践を推し進め、ブラッシュアップさせていく良きエネルギーともなっただろう。

◆大館市と横手市のアウトリーチ公演

NOKは、９月に大館市、11月に横手市でアウトリーチ公演を実施した。

NOKは秋田市、大館市、横手市とアウトリーチの回を重ねるごとに、貪欲にプログラムのブラッシュアップを試みた。大館市では、研修期間中に実施したプログラムの《シウダデス》の《東京》の部分を、対話型観賞の方法に変更した。《東京》の曲中に描写されている音を切り取り、ラゴが音で表現してい

る風景を想像してもらった。さらに、横手市では、曲目をも大きく変更し、第２のプログラムに挑戦した。６月研修時は、プログラムを構成するのに膨大な時間を要し、コーディネーターの介入なしには議論が深まらなかったが、横手市ではプログラムを構成する力や、短い時間で修正に対応する力がついてきていると感じた。

大館、横手両市の担当者は、「このようなやり方をしたのは初めてだった」とおっしゃっていた。その理由の一つは、両市の担当者がNOKのアウトリーチのプログラムについて、ディスカッションに加わる場面があったからではないか。菊地コーディネーターはアウトリーチ実施後、毎度ふりかえりの時間を設け、そこには公演に関わる全員が円になる形で加わった。クラシック音楽家のプログラム内容ついてマネジメント側が意見をすることは、専門性を必要とし、決して容易なことではないとされるが、ここでは、自然とそれぞれの立場から意見をし、それをNOKが真摯に受け止め、プログラムの改善に役立てようとする姿勢が見られた。

◆実施を終えて

NOKはアウトリーチ実践の中で、子供たちの反応から大きな学びを得ていた。言葉の面でも、演奏の面でも、届いた、届かなかったという反応をよく読み取り、次に生かそうとしていたように思う。また、大館市、横手市の担当の方、コーディネーターからのフィードバックを受け止め、プログラムに反映させたり、修正したりを続けた。一つのものを作りあげていく過程に様々な立場の人が参加し、アーティストが彼らの意見をプログラムや演奏に反映させることは、このフォーラムの醍醐味の一つであると感じた。

◆アウトリーチフォーラム事業が音楽家にもたらすもの

今回、東京藝術大学国際芸術創造研究科修士１年のホウ・シンゼンが参与観察のため、６月の研修と横手市公演に同行させていただいたため、横手市公演終了後、NOKにインタビューの機会を得た。そこで、アウトリーチが音楽家にもたらす効果について考察する。

・音楽家としてのアイデンティティの再認識

最も印象的だったのは、メンバー一人一人が、自身の音楽活動の意義を再認識していたことだった。以下は実際に彼女たちが語った言葉である。

「音楽を通して伝えたいことが伝わるということを経験した」
「プログラムについて深く考えていくことで、心に響くものができると感じた」
「改めて音楽は自分の一部なんだと思った」
「４人でこんなに心を開いた状態で話したことはなかった」
「これをやりたいからこれを弾くということが結びついた」
「何を伝えたいかということが自分の中で明確になった」

自分たちが音楽を通して伝えたいことは何なのかを深く掘り下げていくことは、音楽の解釈を深めていく作業に他ならないし、音楽の意義や役割について深掘りしていくことにつながる。また、アウトリーチの実践でどうしたら伝えたいことが伝わるか、対象を特定して考え、実践し、それを省察するサイクルを繰り返すことは、アウトリーチの場が他者とのコミュニケーションの場であることを徹底的に意識させる。演奏家は、音楽大学という特殊な環境の中で、試験やコンクールに追われながら、斯くあるべき理想の演奏を追求し、つい練習室に籠りがちになる。このこと自体は悪いことではなく、むしろ大切なことなのだが、その鍛錬の成果を社会に還元し、伝えていくことは、案外大変なことなのかもしれない。また、音楽家が多くの仕事をこなすなかで職人化していく過程の中でも、伝える伝わるの感覚は時に失われてしまうことがあるようにも思う。アウトリーチの実践はコミュニケーション、演奏の場が双方向であるという感覚をアーティストに再認識させ、音楽家としてのアイデンティティの再考を促しているのではないかと考える。

・言葉の問題について

「コーディネーターからぽん！と出る言葉に力があると思った」

抽象的で、非言語であるところの音楽について、言葉で語ることは容易なことではない。しかし、小学生を相手に届けたい曲の入り口（エントリーポイント）を考える上で、特に鑑賞型のアウトリーチプログラムにおいては、アーティストが子供たちに語りかける言葉は大事な問題となる。

フォーラム事業では、コーディネーターがここに一端を担っていると考える。アーティストが伝えようとしていることを引き出しながら、アーティストのふわふわした言葉の断片を、可視化したり、構成していくことで、プログラムが立ち上がっていく瞬間がある。

インタビューでNOKの一人が、「考える力が身についたのが一番の収穫だ」と語った。また、別のメンバーは「普段の生活の中でも、生徒に対しての言葉の掛け方や、指導が上手くなった。ちゃんと言葉で相手に届けるということができているように感じる」と語った。６月研修時のNOKは、自分たちが感じていること、感覚のみに頼って行っていることについて、言語化していくことに苦戦していた。多くの時間を楽譜と楽器に費やす音楽家にとっては無理もないとも言えるが、考えを深めていく上で、また考えをまとめていく上で言葉は欠かせない。研修期間中に多くの時間を費やして、コーディネーターも参加しながら、プログラム作りを行う過程で、感覚的なことについて言葉で考え続けたことは、彼女たちがフォーラムを終え、他の仕事に戻っても糧となっていた。

・音楽家とアートマネージャーの協働的な学びの場

フォーラム事業は、音楽家とアートマネージャーがお互いから学びあう場を提供しているという意味で希少な場であると考える。

日本の音楽家とアートマネージャーとが協働して一つのコンサートを作り上げるという場面は極めて少ないと言えるだろう。往々にして、コンサートの内容は、演奏家に委ねられる場合が多く、アートマネージャーは制作に終始することが多い。音楽家が、音楽家ではない人とコンサートのコンテンツを作りあげたり、コンテンツそのものに対して批評してもらったり、アドヴァイスを得る機会も少ないかもしれない。マネジメント側には、音楽的な内容や演奏について、アーティストに意見するのは憚れるという雰囲気さえある。

文化芸術が､振興から活用に向かい始めている流れの中､なんとなく閉塞感が漂い続けているクラシック音楽業界にとって、アーティストとアートマネージャーのより有機的な連携はなんらかのブレイクスルーになるのではないかと考えている。

最後に、NOKの皆さま、NOKチームに親身に併走くださった皆々様へ感謝を申し上げます。
また、このフォーラムを機に繋がったご縁を大切に生きてゆきたいと思います。

アシスタントコーディネーターレポート
山下　直弥（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻）

アウトリーチとは音楽家から一方向的に繰り広げられるものではなく、聴衆との「対話」により進行し、観客の反応や表情によって、パフォーマンスの流動的な変化を必要とされます。今回、私が担当したメルヴィル弦楽四重奏団のアウトリーチはその最たる内容でした。彼らのアウトリーチのテーマは「弦楽四重奏の実験」。弦楽四重奏に親しみを持ってもらうという目的のもと、弦楽四重奏の構造や特徴を様々な角度から知るための「実験」を展開し、その後、音楽家と子供たちの対話によって検証するといったアウトリーチを実施しました。また、「純粋に音楽を聴いてもらいたい」という音楽家たちの希望の元、曲目や作曲家の名前は言わず、極力子供達に情報を与えないという挑戦的な取り組みも行いました。

しかし、実験とは目的とその目的の検証方法、結果とが関連し合い、子供たちに一連の流れとしてそれらが伝わらなければ、成立しない側面があります。さらに、それらを考え、プログラムを創作するためには、聴衆をイメージし、その聴衆に対し音楽家自身がアウトリーチプログラムにおいて、伝えたいメッセージを明確化しておく必要があります。初期の段階では、そういった課題が解決されず、アウトリーチの中で子供たちに感想を求めても、感想を発しないこともあり、感想があったとしても「小さい」「大きい」「音が高い」「音が低い」といった音楽の内容に関する感想ではなく、音楽家たちの伝えたいことが上手く伝わっていない様子が散見されました。しかし、公演やアウトリーチを何度も経験し、地域の様々な人々と出会うことで、アウトリーチの意味や目的が音楽家自身の中で生まれ、聴衆と音と言葉を通じて対話しようとしたとき、彼らのアウトリーチはオリジナリティ溢れる素晴らしいものとなっていきました。その影には、能代市、羽後町のホール担当者や地域創造の職員、秋田県の担当者などのフォローがあったと思います。本報告書では、プロセスを通して、どのようにプログラムが変化していったのか、その変化にそれぞれの主体がどのように関わっていったのかを記述します。

[合宿～目的、手法と結果のギャップに苦しむ～]

あらかじめVn1stの吉野さんを中心にプログラムの構造は決めており、じっくりミーティングを行うというよりも、何度もランスルーを行い、修正したり、付け加えるといった方法により磨きをかけました。ランスルーでは、秋田県の職員、地域創造、様々な人々が参与し、コメントを行います。それらの人々は音楽家に伴走しているコーディネーターとは異なり、初見なので、子供たちと近い純粋な視点を持っていました。特に多く指摘を受けたのが、実験の目的（実験において彼らが体験してほしいこと）と方法（曲、体型など）とが合致していないということです。つまり、実験と銘打っている以上、ただ音楽を聴かせるだけではなく、選曲の理由、その曲を聴かせる目的、その目的を伝えるための手法が関連している必要があります。また、それらの構造を考える上で、音楽家たちに足りなかったものは音楽を共有するといったそもそものアウトリーチへの目的意識でした。ランスルーを繰り返し、音楽家とコーディネーターとで対話をし、課題や目的を整理する作業を行うことで、徐々にアウトリーチプログラムの構造に磨きがかかっていきました。

[能代市での公演～子どもたちとの触れ合いを通して～]

能代市は吹奏楽が盛んで管楽器の演奏はよく耳にするが、弦楽器を聴く機会はほとんどないというお話を聞いていました。佐藤さんをはじめとする能代市文化会館の職員の方々は非常に協力的で、アウトリーチが終わった後に音楽家にコメントをくださり、音楽家たちが悩んだときにはあたたかな言葉をかけてフォローしてくださるなど、積極的に創作プロセスに参与してくださいました。

音楽家たちにとっては能代市が最初の市町村アウトリーチ＆公演でした。最初期は演奏に対して強く目的意識を持てないことや上手く子どもたちに伝わらないこともありましたが、子どもたちと直に何度も触れ合うことで、演奏に取り組む姿勢もアウトリーチの内容も変化が見られました。

また、最終日のホールでの演奏会は音楽家たちの「東京で行うような本格的なプログラムで行いたい」という希望により、３つの弦楽四重奏曲を演奏しました。クラシックにあまり馴染みがない土地だったので、不安はありましたが、音楽家たちの熱い意思を館長の小林さんが受け止めてくださり、本格的なプログラムを実施することとなりました。そして、迎えた当日。能代市の担当者の入念な広報のおかげで、会場はほぼ満席となりました。楽章ごとに起きる拍手とともに、地域のお客さんが音楽を聴こうとする前のめりな姿勢があたたかな雰囲気をつくり、終演後もお客さんの嬉しそうな表情が見られ、音楽

家たちが伝えたかった音楽が伝わったことが感じられました。

[羽後町での公演～地域の視点を知る～]

羽後町の担当者の方々はとてもウェルカムな雰囲気で、事業に対して熱を持ってアウトリーチに接していただけました。特に交流の場において、地域文化についてたくさん語ってくださったり、文化に触れる場を作っていただくなど、地域のイメージを形成できる機会をたくさんいただきました。そのように地域と触れ合うことで、徐々に音楽家たちがアウトリーチの意味や目的を強く認識し、子どもや地域との接し方に柔軟さが出てきたように感じました。特に、羽後町では「美しい」「感動した」といったような音楽の内容や心の揺れ動きを言葉にする子どもが多く、子どもとの濃密な対話ができ、メルヴィル弦楽四重奏団が初期に立てた「弦楽四重奏の親しみを伝える」という目的が達成されていることがわかりました。

また、羽後町の担当者高橋さん、菅原さんも地域や教育の視点から、アウトリーチに対して貴重なコメントをくださりました。その助言を音楽家たちが実践し、子どもたちとのコミュニケーションが円滑に行えている場面が見え、地域の方々しか持ち得ない視点の重要さを感じました。その裏には、地域との交流の場を作り、対話の場においてつなぎ役となっていたコーディネーターの三浦さんの功績は大きかったと思います。

[終わりに～集団創作としてのアウトリーチ～]

本事業において、アウトリーチは演奏する音楽家にとっても彼らに伴走するホール担当者やコーディネーターにとっても、従来の一般的な演奏会とは異なる新しい創作プロセスが必要とされます。今回のアウトリーチでは、特に地域の人々しか持ち得ない視点の重要さに気づかされました。地域にとって有意義なアウトリーチ・演奏会を作るためには、舞台上で演奏する音楽家だけではなく、伴走する我々も同じ目的意識を持ち、創作に参与する必要性は大いにあります。つまり、今後、音楽家のみが創作するアウトリーチだけではなく、地域の人々が参加する「集団創作としてのアウトリーチ」が展開され、音楽家と地域の人々が対話し、同じ目的に向かって、互いに視点を補い合う場が重要になるのではないかと考えます。また、そういった場において、主体同士の意向を整理するコーディネーターの役割はさらに重要になるではないでしょうか。

最後ではありますが、今回のプログラムで、ご尽力くださった秋田県文化振興課の佐藤さん、能代市の佐藤さん、羽後町の高橋さん、菅原さんには心より感謝申し上げます。

第５部
令和元年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業

令和元年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業
実施概要

1　趣旨

一般財団法人地域創造は、市町村等で実施してきた公共ホール音楽活性化事業で蓄積したノウハウを活かした事業を政令指定都市に普及することを目的として、政令指定都市等との共催により、公共ホール等を拠点としたクラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する研修会等を実施する。

2　実施内容

（1）実施団体

公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団

（2）事業内容

実施団体は地域創造と共同して次の事業を実施する。

①研修会プログラムの策定

実施団体は、地域創造が派遣するアドバイザーと共同で研修会プログラムを策定する。

②研修会等の開催

実施団体は、当該市内及び周辺地域の公共ホール職員、文化行政担当者、教育関係者及びアーティスト等を対象とした、地域交流プログラム並びに文化・芸術による地域づくりに関する研修会等を開催する。

3　経費負担

研修会等の実施に係る経費のうち、対象経費について、30万円を限度として地域創造が負担する。ただし、下記以外の現地移動費やその他の諸経費及び実施団体が前項に定める内容を超えて事業を行った場合に発生した超過分については、実施団体の負担とする。

4　事業実施に対する支援

（1）アドバイザー等の派遣

地域創造は、研修会プログラムの策定・研修会等の実施にあたり、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

アドバイザー等の派遣は、研修会プログラム策定（２回程度）と研修会等実施時に行うことができる。

（2）講師の派遣

地域創造は、地域の芸術活動に詳しい専門家やアウトリーチに積極的に取り組むアーティスト等を講師として派遣する。

5　主催・共催等

主催：公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団

共催：一般財団法人地域創造

協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

6　アドバイザー

児玉　真　（一般財団法人地域創造プロデューサー）

7　事業日程

令和元年８月29日（木）～30日（金）

8　参加者数

105名

講座①

タイトル：「社会における芸術の役割～京都を例に」
期　　日：令和元年８月29日（木）
講　　師：建畠哲（京都芸術センター館長）

社会における芸術の役割を、クラシック音楽にとどまらず、講師の専門分野である現代美術の例を引き合いに出しながら、考察を行った。芸術の役割を明らかにした後、様々な事例を出すことにより、アウトリーチの意義や必要性について提起した。

講座②

タイトル：アウトリーチから始まる地域の活力創出
期　　日：令和元年８月29日（木）
講　　師：吉本光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所研究理事）

アウトリーチが引き起こす地域活性化を、国内の例はもちろん、国外の多彩な例を提示しながら考察を行った。特に、高齢者や介護、障がい者、犯罪者更生など、アートを活用した様々な人々との交流やアートの可能性を提示した。

講座③

タイトル：地域のアーティストと公共ホール
　　～新潟の取り組みから
期　　日：令和元年８月30日（金）
講　　師：榎本広樹（りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館音楽企画課長）

りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館が取り組む「登録アーティスト制アウトリーチ事業」の紹介を行った。アウトリーチ事業を取り組む中で、地元アーティストの成長はもちろん、ホール職員の意識変化、地域住民の反応等、様々な視点から事業紹介を行った。

講座④

タイトル：アウトリーチのいま
　　～研究的観点からみえる現状と課題
期　　日：令和元年８月30日（金）
講　　師：梶田美香（名古屋芸術大学教授）

愛知県でのリサーチ・データの分析結果を元に、いま現場（公共ホール職員やアーティスト、受け入れ先）が抱える課題や展望について講義を行った。

また、アウトリーチを行う際に重要なポイントについて、アーティスト／公共ホール職員の２つの目線から提示した。

講座⑤

タイトル：アウトリーチ・プログラムの実践
期　　日：令和元年８月29日（木）
講　　師：加藤直明（トロンボーン）、城綾乃（ピアノ）

舞台上を小学校と仮定し、実際にアーティストが行っているアウトリーチ・プログラム（45分）の実践を行った。

講座⑥

タイトル：Join us！～キョウト・ミュージック・アウトリーチ～登録アーティストによる実演
期　　日：令和元年８月30日（金）
講　　師：田中咲絵（ピアノ）、DUO GRANDE（弦楽デュオ、上敷領藍子・朴梨恵）

京都コンサートホールの登録アーティストが普段行っているアウトリーチ・プログラム（40分）の実演。

ホール担当者の意見・評価
高野　裕子

（1）研修会のねらい
・京都コンサートホールの活性化を図り、全国にホールの存在を発信する
・地域における文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与する
・アウトリーチ活動の情報交換を行い、地元音楽家や他ホール職員等との交流を図る
・教育機関や市の関連施設をはじめ、文化庁の地域文化創生本部にも働きかけ、ホールのネットワーク拡充を図る

（2）企画のポイント
クラシック音楽における「アウトリーチ活動」を２つの視点（①全国的なアウトリーチ活動の現状、②地域で行われているアウトリーチ活動の現状）から考察を行う。

（3）企画実現にあたり苦労（問題となった）した点
公共ホール職員からは興味を持ってもらえたが、アーティストの興味をひくことに苦労した。

（4）上記③をどのようにクリアしたか
音大・芸大にチラシを送付したり、演奏家に協力を仰いだり、様々な工夫を行ったものの、結局はクリアできなかった。

（5）　研修会を実施しての成果
全国、様々な場所から公共ホール職員が当セミナーに出席し、活発な意見交換をすることができた。

（6）研修会を実施しての反省点・課題
反省点は、演奏家の興味をひくことができなかったことである。アウトリーチは演奏家有りきにもかかわらず、当セミナーへの出席を促すことができなかった。
今後の課題は、このセミナー開催をきっかけに、定期的にアウトリーチ活動に関する情報交換会を継続的に行えるかどうか、である。一回限りで終わらせず、規模は小さくても継続して問題提起を行っていきたい。

（7）今回の研修会を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと
今回の研修会を通じて､「京都」の音楽家はまだまだアウトリーチからは遠い存在であることが分かった。これまで公共ホールが「アウトリーチ」という活動を積極的に発信してこなかったことも原因の一つだと思うので、アウトリーチ事業を通して今後も演奏家と共に「京都のクラシック音楽界」について考えていくことができれば嬉しい。

担当者レポート
高野　裕子（京都コンサートホール事業企画課）

２日間にわたり開催したセミナー『公共ホールとアウトリーチ活動の未来』では、クラシック音楽によるアウトリーチ活動について多角的視点から考察を行い、非常に有意義な議論を重ねることができた。参加者も２日間で100名を超えた。特に、今回のセミナーを通して多彩な参加者――アーティスト、研究者、公共ホール職員、教員、そして一般市民たち――が、問題意識や課題を共有できたことは、今後活動を継続していく上で、わたしたちにとっても登録アーティストにとっても励みとなった。また、参加者アンケートからはセミナー開催に関するポジティブな意見がたくさん寄せられ、京都コンサートホールとして大きな収穫の一つとなった。

このように好評を博した理由の一つとして、プログラム構成が挙げられるだろう。マクロ・ミクロ的視点を取り入れ、１日目は海外からの事例も含む全国的なアウトリーチの紹介を行い、２日目は地方で行われているアウトリーチ活動の考察を行った。また、ヴァラエティに富む顔ぶれが揃うよう、ゲスト選びにも配慮した(美術評論家の建畠哲氏やニッセイ基礎研究所の吉本光宏氏、地域創造プロデューサーの児玉真氏、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館の榎本広樹氏、名古屋芸術大学教授の梶田美香氏に加え、トロンボーン奏者の加藤直明氏とピアニストの城綾乃氏)。そこに京都コンサートホール登録アーティストの２組（田中咲絵、DUO GRANDEの朴梨恵・上敷領藍子)、そして当ホールから事業企画課の川本悟・高野の２名が加わり、それぞれが考える「アウトリーチ」に関して意見を交わした。

個人的に印象深かった講演は、名古屋芸術大学の梶田氏によるものである。アウトリーチにおけるホール職員とアーティストの関係性や問題点が提示されたのだが、時にそれらが当ホールの課題とリンクしていたので共感する場面が多かった。また、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館の榎本氏の講演では、アウトリーチ活動を通した地元アーティストの成長過程について紹介され、同じ目標を持つ者として非常に勇気づけられた。

質疑応答の時間では積極的に意見が出され、活発な議論を重ねることができた。なかには市民の方からの鋭い指摘もあり、アウトリーチに関する注目度の高さが浮き彫りとなった。

今後、セミナー内で提起されたアウトリーチに関する議論をどのように継続・発展させていくかが重要となるだろう。１回のセミナー開催で終わらせることなく、また、京都コンサートホール内だけで完結することなく、これからも様々な人々との関わりを大切にしながらアウトリーチ活動を重ねていきたい。

最後に、今回のセミナー開催実現に向けて温かな力添えをしてくださった一般財団法人地域創造ならびに関係者の皆様へ深く感謝の意を表する。

アドバイザーレポート
児玉　真

今回の研修会では、文化の伝統が重なりあうように存在している京都という地域に、比較的新しい概念のアウトリーチ（コミュニティエンゲージメントやエデュケーションにおけるシェアリングの手法）を紹介することがひとつの目標となりました。

社会との接点を意識しつつアウトリーチのプログラムを行うということは、音楽や芸術の社会的な効能を意識にあげつつ具体化していく必要があるように思われます。そのため、よくやっているようにアウトリーチの意義を語っていただく前に、芸術の社会的な意義を話してくださる京都に縁のある方の話を聞くことから始めようと考えました。現代美術が専門の建畠さんには音楽関係の人たちばかりの前で語っていただくという無理筋をお願いしましたが、ダイバーシティの観点から話して頂いて意義があったと思います。有り難かった。

内田樹の「最終講義」という本には、彼が京都大学で講演した時のことが書かれています。少し抜き書きすると、

「講演のあとの質疑応答で、経済学部の学生が『大学で文学研究をすることに意味があるんですか？』という質問をしました。僕はこれはいい質問だと思いました。というのは、文学研究者である限り、『文学研究は何のためにあるのか』ということを常に自ら問うべきだと思うからです。（中略）

今の大学で「存在しないもの」とかかわることを主務としているのは文学部ばかりです。世界内部的に存在しないものとかかわるもっとも有効な方法の一つが「文学研究」です。（中略）文学研究者は『存在しないもの』を専一的に『存在しないもの』として扱っている。どんなふうに人間は欲望を覚えるか、どうやって絶望するのか、どうやってそこから立ち直るのか、どうやって愛し合うのか……そういうことを研究するのが文学研究です」

この文学研究の部分を音楽に置き換えると、音楽芸術を扱う意味も、アウトリーチで音楽に興味のない人たちのところにわざわざ訪問する意味も（手法の違いということはさておいて）概ね網羅しているような気持ちになります。彼とは同年なのでセンスが似ているということもあるかもしれませんが、アウトリーチが、単に、顧客の拡大であったり、音楽の単なる提供であったり、慰問の延長線であったりという事を超えた活動であり運動である、ということへの入口になるかもしれないとも思えるのです。

しかし同時に、地域での演奏者やマネジメント人材、またそれを支える人たちの育成や環境設定という意味もアウトリーチの事業にはあります。ステークホルダーを受け取る人（聴き手）に限定せず、送り手をはじめ様々な関係者も含めて考えないと地域の文化状況は発展できないのです。今回、実演を見てもらう時間が多すぎるかなと若干心配したのですが、京都の有能な演奏家を紹介出来たことや、おんかつの演奏家と交流してもらえたことも意義がありました。様々な観点から話をしてくださった講師の皆様や演奏家の皆様、充実した２日間になるように制作をしてくださったコンサートホールの皆さんにもお礼を言いたいと思います。